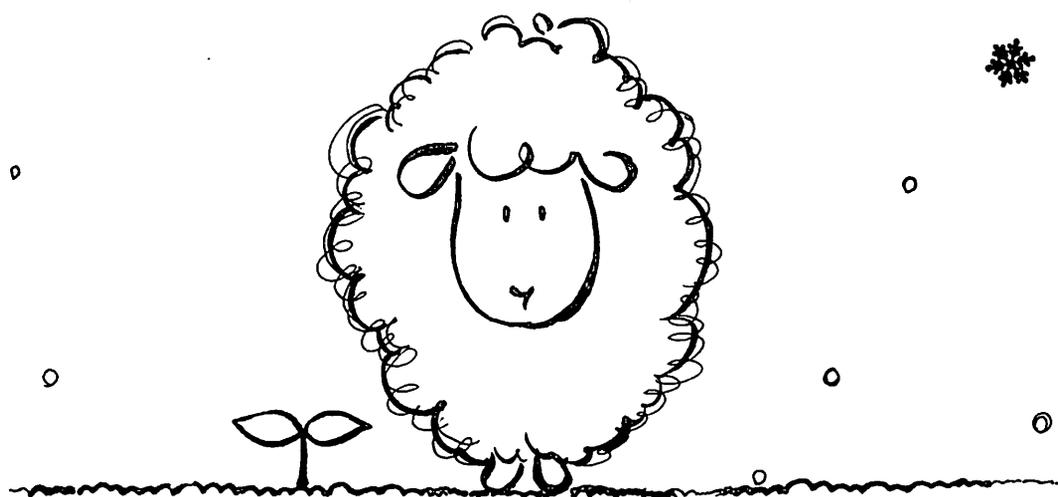


日曜学校教案誌

vol. **12**
2004. 1. 2. 3月号



たとえ、お前たちの罪が緋のようでも 雪のように白くすることができる。

日本キリスト改革派教会 中部中会教育委員会

も く じ

まえがき	春名義行 ...	3
巻頭説教「子どもと神の国」	望月 信 ...	4
日曜学校・教会学校訪問		
仙台教会日曜学校の紹介		8
自由献金のお願い		11
2004年1・2・3月分カリキュラム		12
聖書研究・説教展開例・分級展開例		13
1月4日		14
1月11日		21
1月18日		28
1月25日		35
2月1日		42
2月8日		49
2月15日		56
2月22日		63
2月29日		70
3月7日		77
3月14日		84
3月21日		91
3月28日		98
小学科下級教材		105
2004年4・5・6月分カリキュラム		106
2004年度カリキュラム (2004年4月～2005年3月)		107
あとがき		109

まえがき

春名義行（津島伝道所宣教師）

子どもが生まれ、子どもの成長を見ていると人間が原罪を持っている存在であることを感じます。自らの罪もそうですが、まったく何も知らないはずの子どもにも、罪の事実を感じずにはいられません。最初は生きるために必要な欲求を満たすための要求をします。それが成長するにつけ自分がほしいもの自分がしてほしいことに対する欲求が強くなり、それを満たすことができるまで泣き続ける。そんな姿を目にします。その欲求が満たされるまで要求し続ける姿の中に、人間が本来的に持っている罪の姿を見失ってしまいます。

子どもは見ていると、天使のようであり、心を和ましてくれるものです。しかし、罪のない存在ではないのです。当たり前のことですが、子どもも罪人であり、キリストの贖いによる救いを受けなければいけない存在であることには違いありません。

子どもの心は、信仰や良心について白紙のような状態です。しかし、罪については全く否定ができないほど、しっかりと持っているのです。その子どもが成長し様々な価値観を身につける前にキリストに出会えるようにすること。これも私たちの教会の責任ではないでしょうか？「人間はどこから来てどこに行くのか」、また、「何を目的として生きるのか」。このような正しい価値観を得ることができるのはキリストを信

じることによることだからです。その価値観を与え、キリストへと導き、子どもたちを救いに導くことができるのは教会だけなのです。

人生に対する真の価値観を与え、キリストによる救いを子どもたちにも与えるべき教会は、何をすべきなのでしょう？ いかによれば子どもたちが教会に集まるかという技術的なことを議論し学ぶことでしょうか？ それとも、子どもの救いのために真剣に祈り、それに取り組むことでしょうか？ わたしは神様に期待し、真剣に祈り、真剣に取り組むことだと信じています。真剣に祈り、子どもを主イエスに導こうと真剣に取り組んでいる教会には、たとえ今、子どもたちが少なくても、神様の時に応じて必ず子どもたちが与えられると信じています。

この教案誌も、子どもたちの救いを真剣に考え、祈り、取り組んでいるものです。そして、教会の祈りと、子どもたちを主イエス・キリストに導こうという熱心なお働きのお役に立てればと願いつつ作成しています。

今号も筆者一人一人の祈り、編集者の祈り、そして、これを使うすべての教会の祈りを神様が聞き届けてくださり、子どもたちがキリストと出会うための道具として用いられることを願っています。子どもたちがキリストを信じる信仰を持って歩むことができるように願ってやみません。

「子どもと神の国」

—箴言1章7節、マルコによる福音書10章13～16節による説教—

望月 信（高蔵寺教会牧師）

今朝は、わたしたちの教会の花の日主日として礼拝をささげています。花の日と言いますのは、1868年にアメリカの教会で始まった行事とされています。もともとは、6月の第二主日で、アメリカでは、学校の学年が変わる、年度の変り目にあたります。子どもの一年の歩みが守られたことを主なる神に感謝する「子どもの日」として始められたようです。それが日本にも導入されて行われています。ただし日本では6月になりますと梅雨の時期になり、花が少ない季節になります。そのため、日本の教会では、5月に日付を動かして、行うことが少なくありません。私たちの教会も、今年は5月の今日を花の日として、子どもの成長を感謝し、またこれからも守り導いてくださるよう、祝福を祈り求める日として、礼拝を守ることにいたしました。そのことの一つとして、先ほどは、子どもの成長を感謝して讃美と祈りをささげるときを持ちました。

また、今日は、母の日でもあります。この母の日というのも、やはりもともとはアメリカの教会の行事であり、こちらは1910年頃に母親への感謝を表す日として定着し、アメリカでは1920年に国民の祝日に指定され、日本の教会でも母の日として行われるようになりました。この母の日のほうは、日本でも教会の行事というだけではなく、一般の社会的な行事として定着しているのは、皆さんもご存じの通りです。

今日は、ですから、母の日であり、花の日、子どもの日でもあります。主なる神が、子どもを健やかに養ってくださっていることを感謝し、また母親に日頃の労苦を感謝する、そのような

豊かな主の日を過ごしたいと願っています。この機会に、子どもが与えられている恵みをあらためて考えることも大切でしょう。あるいは、母とされていること、父とされていることの意味や、家族が与えられていることの感謝をあらためて問い直す時とすることもよいでしょう。この花の日は、私たちが家族の存在を見つめ直すときなのであらうと思います。

今朝は、そのような花の日、子どもの日にあたって、聖書が私たちの家族のあり方として、何を求めているのか。そのことを、確認したいと思います。私たちキリスト者の家族のあるべき姿として、聖書は何を求めているのでしょうか。

今朝は、第一に、箴言の御言葉に耳を傾けました。この箴言という書物は、お読みいただくとすぐに分かることですが、いろいろな格言やことわざが集められている書物です。

私たちの教会では、この朝の礼拝の前に、教理教室という時間がありまして、今、そこでは、旧約聖書の書巻を一つ一つ取り扱っています。その教理教室で、ついこのあいだ、この箴言を取り扱ったばかりです。その備えのために、私はこの箴言をあらためて読み直しました。そうして、この箴言のねらい、目的がどこにあるのだろうか、この箴言を一つの書物として編集した人々は、いったい何を考えながら、この書物を作ったのだろうかと考えました。

それは、教育のためなのです。箴言の中では、繰り返し繰り返し、「わが子よ」と呼びかけられています。この箴言は、子どもを教育することを念頭に置いて編集されているのです。それは、

ただ自分の子どもというだけではなく、その当時のイスラエルの民の子どもたち、若者たち、青年たちの教育です。当時、イスラエルにおいては、すでに学校教育のようなもの、子どもたちを一カ所に集めて、教師が教育していくということが行われていました。その教育の基本方針が示されているのが、この箴言です。

そして、今朝読みました御言葉は、そのかなめとも言うべき御言葉です。もう一度お読みいたします。「主を畏れることは知恵の初め。無知な者は知恵をも諭しをも侮る」。言ってみるならば、これは、聖書の語る教育基本法なのです。教育の根本は何であるか、すなわち、「神を畏れること」です。「知恵の初め」とある「初め」とは、土台とか、かなめとか、あるいは「すべて」と翻訳されることもあります。要するに、主を畏れること、神を畏れることが、教育の初めであり、基本であり、目的です。つまり、すべてなのです。

それは、この筋、神を畏れるという筋が一本しっかりと通っていないならば、教育はできないですよ、子育てはできないですよ、ということです。さらには、人生そのものが分からなくなってしまう。そういうものです。神を畏れ敬うこと、この筋がしっかりと通っているところでこそ、教育が成り立つし、家庭であるならば、父親として、また母親として、それぞれ役割を果たすことができる。箴言は、そう主張しており、これが、聖書の語る家庭の姿です。

この基本を明確にした上で、箴言はこう語ります。8節。「わが子よ、父の諭しに聞き従え。母の教えをおろそかにするな」。これは、父親の諭しを聞くようにと、母親の教えを軽んじないようにと、子どもに言い聞かせていく形を取っていますが、むしろ、親に対して語られている言葉として受け止める方がよいでしょう。すなわち、父親には子どもを諭す責任が与えられています。「諭す」というのは、何が正しいのか、何が間違っているのかを教えて、子どもの誤り

を正していく、けじめをつけていくということです。母親も、それに協力して、子どもを教えていかなければなりません。「教え」というのは、「道しるべ」とか「羅針盤」という意味です。ですから、人生の道しるべ、人生の羅針盤を示していくということです。こうして、聖書は、親の基本的な務めは、何がよいことで何が間違っているのか、善悪を教えるということであり、また人生の道案内をすること、人生の歩むべき方向を指し示してやることであると語っています。これが親の務めなのです。

このような親の役割をきちんと果たすことができているのか、そのことをあらためて点検し、見直すということが、私たちに求められています。あるいは、逆に、親がこのような役割を果たして、自分を育ててくれたことに感謝する、そのことも、大切でしょう。私たちはみな、何らかのかたちで、親から何がよいことで、何が間違っているのかを学んできたのです。人生の中で、本当に大切なことが何であるのか、どのように人生を歩んでいけばよいのか、それを、私たちはみな、親を通して、それは、親の背中を通して、というべきかも知れません。親の生き方を見ることを通して、学んできたのです。その親に感謝をすることが求められていることは、言うまでもありません。

私自身も、親になりましたはじめて、親の労苦が少しずつ分かってきたように思います。その意味では、一生涯、親の背中を追いながら、私たちは生きていくのかも知れません。

しかし、親としての役割を果たすと言いつても、何が正しいのか、何が間違っているのかを教えるということ、それも、言葉で教えることはもちろん、生活を通して教えていくわけですから、これはたいへんなことです。人生の歩むべき方向を指し示すなど、自分にできるものなのだろうかとも思います。だからこそ大切なのが、「神を畏れ敬うこと」であると申し上げることが出来ます。

主なる神を信じて、神を畏れ敬うことがないならば、そのところでは、私たちが教える何が正しいか、何が間違っているのかという基準は、たちまちのところ、人間的なものとなり、揺れ動くもの、方向の定まらないものになってしまうでしょう。私たち自身は、何が正しいのかという基準を持っていません。善悪の判断の基準は、私たち人間の内にはありません。それは、ただ主なる神にあるのみです。主なる神を畏れるときにこそ、私たちは、何が正しいのかを、正しく見極めることができます。そして、人生の目的は、神を喜び、ほめたたえることなのだ。そう教えることができます。私たちは、人生とは自分のためにある、自分が喜び楽しむことが人生だ、そういう価値観で生きている人たちで、周りを取り囲まれています。私たちも、しばしばそのような価値観に流されてしまいます。私たちは、ただ主なる神を畏れ敬い、神を礼拝するところだけ、神を喜び、神と人にと仕えて生きる、自分のためではなく他者のために生きる、それが人生だという価値観に、堅く立ち続けることができます。

そして、もう一つ、今朝は、マルコによる福音書の御言葉にも耳を傾けました。主イエスが、子どもたちをご自身のみもとに招かれた御言葉です。主イエスのところに子どもたちをつれてきた親たち、「人々が子どもたちを連れてきた」とありますが、これは、当然、親たちです。親が子どもを祝福してもらおうと、主イエスのところに子どもを連れてきたのですが、その親たちを弟子たちが叱って追い払おうとした。ところが、主イエスは、その弟子たちに対してむしろ憤られて、子どもをそばに呼び寄せられたという出来事です。

主イエスは、このところで、「子どもたちをわたしのところに来させなさい」とおっしゃいました。そして、「神の国はこのような者たちのものである」とおっしゃいました。これは、神の国は、このような子どもたちのものであるとい

うことです。主イエスは、神の支配、神の恵みの御国は子どもたちの国なのだ、そうおっしゃいました。これは、子どものように弱い、力無い、小さな者にこそ、神の国は与えられるということです。子どもというのは、無力さ、力のない、弱いものの代表です。ルカ福音書によりますと、ここで連れてこられた子どもたちの中には、乳飲み子が含まれていたようです。乳飲み子、赤ん坊です。親によって養われないならば、自分で生きることがまったくできない、そういう弱さを抱えた者たち、そのような者にこそ、神の国は与えられます。それは、彼らは、ただ恵みとして、神の国を受け取るからです。自分の能力によらず、自分の力によらず、お金に頼るのでもなく、ただ親を愛して、親を信頼して、生きていくのが幼子です。そのように、ただ神を愛して、神を信頼して、神の御国を恵みとして受け取る。信仰とは、裸の手であると言われます。こちらでは何も差し出すことのできるものはない。しかし、手を出してごらんと言われて、ただその言葉を信頼して、期待して手を出す。それが子どもです。

そして、今朝、注目したいのは、主イエスのもう一つの言葉、「はっきり言っておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」という言葉です。この言葉は、この言葉を聞く者たちを、子どもにする言葉、子どもの立場に立たせる言葉です。みな、子どもなのだ。そう言っているのです。子どもとは、決して年齢ではありません。主なる神のまなざしの中では、私たちみな、子どもなのです。私たちも、子どもになって、裸の手、何も差し出すものがない手ではありますが、その裸の手を差し出せばよいということです。主なる神に期待して、神を信頼して、神の国に入れられる恵みを受け取る。それが、私たちです。

ですから、この主イエスの言葉、「子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決して

そこに入ることはできない」という御言葉は、私たちが、子どもの立場に立たせる、子どもとしての地平に立たせます。それは、どういうことかと言いますと、神の御前にあって、私たちには、親も子どももない、ということです。もちろん、親は親であり、子どもは子どもであり続けます。しかし、神の御国の恵みを受け取るということ、すなわち、信仰ということにおいて、親も子どももない、等しい地平に立つのです。等しい地平に立って、神を恐れ敬う。聖書は、そう教えています。

このことは、私たち、とりわけ親であるものにとって、何よりの福音でしょう。先ほど申しました、親の務めの重荷、親としての責任の重さから解き放たれるのです。もちろん、親の務めは、私たちの上にとどまり続けています。私たちは、その責任を放棄することはできません。しかし、その重荷は解き放たれる。すなわち、私たちは、肩肘張って、親として子どもに何が正しいかを教えなければならない、間違っていることは間違っていると諭さなければならないと言って、緊張して、張りつめている必要はないのです。親であれ、子どもであれ、等しく神の恵みによって生かされるのです。親は、ただ神を恐れ敬う生活、神を礼拝して、神を喜ぶ生活をすればよい。その生活が、子どもに何が正しいか、何が間違っているかを教えることになり、また神を喜ぶことこそが人生であると教えることになる。親は、子どもの上立って教える諭すのではなく、子どもと共に生きていくのです。子どもと共に、子どもと足の歩幅を等しく

して、ゆっくりと歩いていく、そのところで、子どもを神の御前に立たせることが起こっているのです。私たち一人一人が、神の御前に謙そんにされ、小さくされて、裸の手を差し出して生きている、ただ神を礼拝し、祈り、神に依り頼んで生きている、そのところで、子どもも裸の手を神に差し出すことを学ぶのです。神に祈り、依り頼むことを習うのです。

主イエス・キリストは、子どもを連れてきた親たちをしりぞけた弟子たちに憤りをあらわにされました。この「憤り」という言葉は、たいへん激しい感情を表す言葉です。激しく怒られた、そのような意味の言葉です。そこには、主なる神の激しい愛があります。主なる神は、私たちに神の恵みを与え、主なる神の祝福を与えることを願っておられる。激しくそのことを求めておられます。それは、主イエス・キリストがご自身を十字架にささげて、死んでくださるほどの激しい愛なのです。その十字架の愛によって、私たちに、この福音、神の恵みに生きる、神をほめたたえて、讚美して生きる人生が与えられています。ここにこそ、私たちの人生のすべてがあります。私たちは、あらためて、私たちの家庭をこの神にささげて、また私たちのこの教会、神の家族であるこの信仰共同体を神にささげたいと願います。キリストこそわが命である、そう言い表して、キリストのものとして生きることを喜びとする家族として、また信仰共同体として、共に歩んで参りましょう。

(2003年5月4日、高蔵寺教会主日礼拝説教)

仙台教会日曜学校の紹介

仙台教会日曜学校教師会

1. はじめに

仙台教会は、仙台市内五つの教会・伝道所の一つで、戦前の日本基督教会時代から続く伝統をもつ教会です。吉田隆牧師が牧師として赴任されて4年目です。現在、「恵みと奉仕の分かち合い」による全員参加型の教会形成を目指して励んでいます。毎週の日曜学校に集る生徒は、中高生を含めて平均13名ほど（在籍数は20名）です。礼拝の中で牧師がSS説教をしてくださり、礼拝後分級をしています。今年4月から本教案誌を使用しています。

2. 礼拝と分級

(1) 礼拝

礼拝は、10時から始まりますが、その中で吉田隆牧師に、本教案誌に沿ったSS説教をしていただいています。身振り手振りを交えたとても楽しく分かりやすいお話をしてくださり、大人も引き付けられます（写真1）。わたしたちの教会の礼拝では、色々と子どもたちに役割をもたせています。月一度ぐらい子ども聖歌隊による賛美を礼拝に組みいれています。賛美歌は分

級で一月ぐらい練習したものを歌いますが、11月には、「主イエスは弟子たちを」を歌いました。献金奉仕も執事さんと一緒に行います。また最近では、礼拝の奏楽の一部も担当出来るようになりました。

(2) 分級

礼拝後、まず小学生科・幼稚科全員で簡単な礼拝を行います。人数は子どもたちが11名ほど、SS教師3名、それにお母さんたち3～4名です。賛美（賛美練習も含む）、祈祷、献金などで、時により司会者がSS説教内容の確認のため質問したり、お話ししたりします。また第一主日には、精勤賞・奨励賞を渡し、さらにその月の誕生者を紹介して、カードやプレゼントをわたし、誕生日の歌を歌ってお祝いし、励まします（写真2、写真3）。

分級は、幼稚科、小学生下級、小学生上級（中学1年生を含めてジュニア科としています）に分かれます。それぞれ本教案誌に従って、工夫しながら進めています。

(3) 中高生会

最近クラブ等で来れない生徒があり、2、3



写真1 礼拝時のSS説教



写真2 分級礼拝の様子

名ですが、教師1名(2名の教師が交替で担当)、ヘルパー1名を加えて、毎週4、5名のグループです。しかし楽しく色々な話に花が咲き、時間がいくらあっても足りない状況です。本教案誌を4月より導入していますが、経過処置として従来の教材も1週おきに用いています。

(4) 食事会

毎月第一週は、各会がありますのでそれと平行して、食事係が用意してくださる食事(だいたいは子ども向けに準備してくださるカレーライス)を2階の教室でいただくようにしています。これはお母さん方が少しでも多く婦人会に出席できればとの配慮でもあります。また時として、どなたかからのお菓子などの差し入れもあり、子どもたちにとってとても楽しい日です。

3. 子どものための集会・行事

(1) 土曜学校

以前は子ども会として、年数回土曜日午後に行ってききましたが、今年から毎月1回の行事として、学童保育の教会版として、一日教会を開放しています。近くの小学校前でチラシ配りをして、PRしています。参加者は、殆どがSSの子どもたちですが、平均して子ども10数人、大人10名程度でしょうか。午前中は、みんなで三々五々自由にゲームをしたり本を読んだりして過ごします。宿題の指導も歓迎ですが、まだその例はないです。時々囲碁を教えて欲しいという



写真3 分級での子どもたちの様子

子どもが来ますが、大歓迎でお相手しています(私は一応アマ有段者)。最近昼食は、サンドイッチやお好み焼き、おそばなどの食材を買ってきて、みんなで作りながら食べるようにしています。

午後は、賛美と吉田牧師(不在の時は信徒が担当します)のお話で礼拝のときを持ちます。その後、工作や、ゲームで楽しみます。若干のおやつも準備しています。

(2) クリスマス子ども会

毎年12月は、土曜学校としてではなく、従来どおりのSSの子どもたち中心のクリスマス会を行っています。今年は、OPCのカミングス宣教師が中心になって進めている二つの開拓伝道の集会に集っている親子を招待して行う予定です。

第一部はクリスマス燭火礼拝とし、第二部の祝会では、ゲームやビデオ・スライドの上映、プレゼントがあります。教師たちで劇をやろうという話もありますが、まだ実現していません。

(3) 市内合同CSキャンプ

毎年的一大イベントは、仙台市内合同CS教師会の主催で行っている夏のキャンプです。2003年度は、南蔵王にあるキャンプ村で7月25日、26日の二日間行いました。全体では子ども60名(中学生17名、小学生35名、幼児9名)、各教会の牧師、CS教師、保護者、ヘルパーなど合わせて合計100名となる多数の参加者となりました。仙台教会からは、子ども15名を含めて24名が参加しました。このうち特に中学生たちは、テントを張って、キャンプ生活を楽しみました。今回のテーマは、「イエス様ってどんなかた」でした。礼拝、分級、キャンプファイアー、花火、きもだめし、工作などのほか、自然とのふれあいの時間もとりました。二日目は、あいにく雨天のため一部のプログラムを中止しましたが、子どもたちにとって思い出多い二日間でした。なお食事は、毎年のことですが、数人のボランティアの方々がサービスして下さいますので、

たいへん感謝です。

(4) 子どもオルガン教室

仙台教会では、一昨年、パイプオルガンを設置しました。そこで将来のオルガニスト養成を目指して、SS の子どもたちのため毎週火曜日に、子どもオルガン教室が開かれています。千葉に引っ越された家族があったことなど、変動はありますが、現在のところ生徒は4名です。

4. SS 教師会

毎月第四主日の午後行っています。事務的なことのほか、カリキュラムや分級の進め方、諸行事の計画、また出来る限り子どもたち一人ひとりの状況を話し合います。必要に応じて教会員の皆さんに協力していただけるよう、毎月発行される教会報に教師会報告を掲載してもらっています。

現在は、教師5名、ヘルパー3名ですが、一人ひとり、学びの必要を感じています。そこで出来るだけいろいろなセミナー、講習会に参加して、その結果を話し合っています。最近では、4～6月の土曜日にCS成長センター主催のCS教師セミナー（東京）があり、交替で出席しました。他教派の教会のSSや土曜学校のやり方や種々の取り組みを学ぶことが出来、学びを分かち合うことが出来ました。また7月には日本キリスト教団・東北教区主催の礼拝と音楽講習会に参加しました。今回は、新しい子ども賛美歌に関する実践的な講習会でしたが、私たちのSSでも、新しい賛美歌を取り入れていきたいと考えています。

5. 日曜学校教案と教材

昨年度までは、教材として整っていて使いやすいことから、“成長”を用いてきました。しかし聖書の取り上げ方、理解の仕方に不安と物足

りなさも感じてきました。昨年、市内合同CS教師会で、本教案誌についての学びを行い、その結果、4月より切り替えました。正直言って、もっともっと具体的な指導書、教材としてそのまま使えるものであって欲しいとの希望もありますが、まずは毎週安心して用いさせていたいております。また補助教材として、成長も用いることとしています。特に賛美歌、工作など、参考にしています。

賛美歌は、教師会で、毎月賛美するものを2曲位ずつ選び、歌っています。今後、新しい子ども賛美歌の中からも積極的に選曲していく予定です。

6. おわりに

仙台教会で行っている子どもたちの色々な集いなどをご紹介します。最後にいくつかの課題をあげておきます。どこでも同様の問題があると思いますが、中学生、高校生になると、クラブや塾などで来れなくなる子どもたちがいます。しかし、数は少なくとも続けていくこと、彼らの居場所を常に確保し、忍耐強く祈っていくことが、私たちのSSでも求められています。また分級を午後行っていることから、契約の子は集りやすい一方で、近隣の子どもたちを受け入れ難くなっています。さらに、各会や委員会活動、求道者会などとの時間や場所の調整が困難な場合もあります。

この他、SS や子どもたちのために教師として、ヘルパーとして奉仕して下さる若い奉仕者を育てる必要を感じています。

なお仙台教会ではここ3年間に、3名の契約の子が信仰告白に導かれましたが、教会全体の大きな喜びでした。この喜びを励みとして、さらにより良いSSを目指していきたいと願っています。 (日曜学校教師会書記 中林 撰)

『日曜学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会教育委員会は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『日曜学校教案誌』を発行しています。教案誌はすでに第11号を数え、中部中会においては三分の二を越える教会がこの『教案誌』を採用してくださっています。また、他中会、他教会においても採用して下さる教会が与えられています。皆様のご支援に心から感謝を申し上げます。

この『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会教育委員会では、あわせて皆様からの自由献金によってご支援いただきたいと願っています。この献金は、『教案誌』の編集・出版のための費用として用いられます。子どもたちの信仰教育のための『教案誌』の発行のために、ぜひ皆様からのお祈りと献金のご支援をいただきたく、よろしくごお願い申し上げます。『教案誌』を購入くださることも、発行のための支援となります。信仰の養いの益ともなりますので、ぜひ『教案誌』をご購入いただき、ご支援いただきたいと願っています。よろしくごお願い申し上げます。

目標金額	30万円
期 間	2003年7月～2004年3月末
送 金 先	郵便振替 長谷川正一 00840-3-3192

※『教案誌』自由募金である旨、振込用紙にご記入ください

日曜学校 2003年度カリキュラム (2004年1～3月分)

—救済史に基づく一年間のカリキュラム—

月日	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
教会暦・行事	単 元 の 目 標		
1月4日	聖霊の降臨	使徒言行録2:1-13	使徒2:4
	わたしたちを励まし、力づけてくださる聖霊の恵みを知ろう		
1月11日	ペトロの説教	使徒言行録2:14-42	使徒2:21
	「わたしのための主イエスの十字架」であることを知り、主の御名を呼ぼう		
1月18日	足の不自由な人のいやし	使徒言行録3:1-10	使徒3:6
	暗闇と悲惨を造りかえて、喜びをあふれさせてくださる主をほめたたえよう		
1月25日	ペトロの神殿での説教	使徒言行録3:11-26	エゼキエル33:11
	主イエスを十字架につけた罪を悔い改めて、神に立ち帰るよう招く		
2月1日	ステファノの殉教	使徒言行録7:54-8:1	使徒7:60
	ステファノを福音の使者として用い、力づけ、勇気づけた主イエスを仰ごう		
2月8日	宦官の救い	使徒言行録8:26-40	使徒8:35
	福音の使者とされ、福音を語り伝える喜びを知ろう		
2月15日	サウロの回心	使徒言行録9:1-19	テモテ1:15
	心の目が開かれて、主イエスを知り、信じる者として歩もう		
2月22日	第一次伝道旅行	使徒言行録13:1-12	マタイ28:18-19a
	聖霊によって遣わされて福音が宣べ伝えられる、その大きな御業を仰ごう		
2月29日	マケドニアの幻	使徒言行録16:6-15	使徒2:17
	神の御心を祈り求めて、神の御計画・幻・使命を担うことへと招く		
3月7日	エフェソでの告別説教	使徒言行録20:17-38	使徒20:32
	主イエスと教会を愛する愛を教え、また神の恵みの御言葉への信頼へと招く		
3月14日	ローマへの旅	使徒言行録27章	ヘブライ11:1
	神の御言葉に信頼し、主にのみ依り頼むことへと招く		
3月21日	ローマにて	使徒言行録28章	テモテ2:9
	神の御言葉の力とその広がりを示し、御言葉の力への驚きと信頼に導く		
3月28日	受難節	ヨハネ18:38-19:16	コリント二5:21a
	わたしたちの罪を担って裁きを受けてくださった主イエスの十字架を仰ごう		

聖書研究・説教展開例・分級展開例

テキスト 使徒言行録2章1～13節

1. 祈りの群れの上に注がれる聖霊

「わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい」(ルカ24章49節)と主は命じられました。その約束が、祈りのうちに待望していた群れに実現します。聖霊は目に見える顕著な形で注がれました。ヘブル語では「霊」ルーアッハは激しい風、また息でもあります。この時、神の息吹が激しい風となって注がれ、かつて幕屋(出40章34節)や神殿(列王上8章10節)を満たした神の栄光シェキナーが、一人一人の上に臨みます。それは出エジプトの民を荒野の間、導きつづけた雲と火の柱(出13章21節)で、神の臨在を意味しました。それが今や一人一人に臨み、そこを御自身の神殿とされたのです。これ以降、聖霊はわたしたち一人一人に臨在し、わたしたちを神殿としてくださるようになったのでした(1コリント3章16節、6章19節)。

このことは、ヨエルの預言の成就でした。「『終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ』(2章17節、ヨエル3章1節)と。もちろん旧約時代にも聖霊は臨みましたが、それは特定の人物に、しかも特定の期間だけでした。旧約時代には実現しなかったこの出来事が、ペンテコステを境に実現することになり、今やすべての人に、聖霊が常にいつまでも臨在してくださるようになったのです。

しかもこれは個人主義的なものではなく、祈る群れ、礼拝する共同体の上に臨まれます。キリストの御名によって集い祈る、その群れの上に、たとえそれがどれほど小さくても、そこを御自身の

臨在の場としてくださるのです。それは、この小さく無力な群れが「力を受けて」、キリストの証人となるためでした(1章8節)。祈る群れが伝道する群れとなり、礼拝の共同体が宣教の共同体となっていくために、聖霊が注がれたのでした。こうして礼拝(神学)と伝道は一つとされていきます。それを結びつけていくのは「祈り」なのです。

2. 収穫が約束された宣教

この出来事が起きたのは「五旬祭の日」であることも興味深いことです。今日ではペンテコステといえば、この聖霊降臨の出来事を指すものとされますが、本来のペンテコステとは、今日もユダヤ教で祝われている「五旬祭」、つまり「過越祭」の7週後に祝う「産物の初物を刈り入れる刈り入れの祭り」(出23章16節)のことでした。ペンテコステとは小麦の収穫を感謝し、その初物を主に捧げる祭りなのでした。そこに聖霊が降されたとは、これから始められる教会の伝道の働きが、豊かな刈り入れと収穫を期待することができることを意味していないでしょうか。ここから広がっていく世界宣教の働きの初物として、ここに12弟子たちが人々の前に登場するのです。そして彼らを通して、主イエスの福音が世界へと広げられていくのです。その刈り入れには、すでに大きな収穫が予想されている、約束されていると共に、その収穫の主、源は、聖霊ご自身であるということです。そしてこの宣教の働きの力の根源、源も、聖霊なのです。

(三川栄二)

テキスト 使徒言行録2章1～13節

(単元のねらい)

圧倒的なしるしをもって臨まれた聖霊。今回はそのしるしを覚えつつも、弟子たちに与えられたに違いない励ましに注目しました。その励ましを私たちも共有することをねらいとしたい。

「神の偉大な業が語られる」

死よりよみがえられたイエス様は、天に帰られる前、弟子たちに大きな約束をして下さいました。「もう間もなく、あなたがたは聖霊を受けます。その時、あなたがたは天からの力を受けるのです」と。

弟子たちはお祈りしながらその日を待ちました。1日、2日、……7日……そして10日目のことです。ついに、約束の聖霊が一人一人の上に、力をもって来て下さったのです。弟子たちは皆、聖霊に満たされました。

実はこの日は、五旬祭の祭りの日でもありました。世界の各地から大勢の人たちが、ここ都エルサレムに集まっている日であったのです。

それでは、聖霊が降られたこの日、どんなことが起ったのかを見て行きましょう。

まずは、聖霊が降られた時、二つのしるしが伴いました。一つは、2節「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。」という耳に聞こえたしるし。もう一つは、3節「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」という目に見えるしるしです。これらの圧倒的なしるしによって、弟子たちは聖霊が今、ここに、降られたことをはっきりと悟ることが出来ました。

そして、このしるしに続いて、弟子たちは何と、いきなり外国語を話し出したのです。弟子たちは皆ガリラヤの地方出身者。外国語を話す能力を身に付けていたわけではありません。ですから、弟子たち自身「自分は一体、何を話しているんだ？」と驚きあわてたことでしょう。しかし、意味のないことを語っていたのではなかったのです。その国の言葉を知っていれば、通訳なしでちゃんと理

解できた意味の通ったことを語っていたのです。11節で、それを聞いた人たちが、その内容を要約してこう答えています。「……クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

そう、弟子たちは神の偉大な業を語っていたのです。具体的にどの様なことが語られていたのかは記されていません。しかし、その内容が主イエス・キリストと無関係であったとは考えられません。なぜなら、栄光ある御子なる神が、人となってこの罪の世に下り、十字架にかかって死なれ、3日目によみがえって下さった。そのようにして、罪人に救いの道を開いて下さった。この救い主のみ業を抜きにしては、神の偉大な御業はとも語れないからです。

こうして、弟子たちは御霊が話させて下さる通りに語りました。人々はあっけにとられながらも足を止め、驚き怪しみつつも耳を傾けます。なぜなら、弟子たちが、自分たちのなつかしい故郷の言葉で語っていたからです。9節からは、集まっていた人たちの多様さ、どれほど広い地域から集まっていたかが地名をあげて教えられています。その広がり、今なら4年に一度のオリンピック、あのオリンピックに参加する国々が一同にそろったといった感じです。世界中の国々の言葉で神の偉大な御業が、今ここで、語り伝えられていたのです。

様々な国の言葉が語られ、驚きつつも熱心に聴き入る多くの人々の姿。それはきっと、弟子たちを不思議に力付けたに違いありません。

この時、弟子たちは全員集まっても120人ほどでした(1:15)。世界全体から見れば、からし種ほどの小さな一団です。しかし、その小さな一団に主イエス様は仰せられました。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至まで、わたしの証人となる」。小さな一団である弟子たちによって、地の果てに至までキリストの福音が届けられるんだ、とイエス様は言われます。あまりに大きな計画のゆえ、めまいがしそうです。

しかし、聖霊は最初に降られたこの日、弟子たちに外国語を話す能力を授け、やがて起ることを垣間見せて下さったのです。それぞれの国語で主の証しが宜べ伝え語られること、地の果てに至まで福音が届けられ、聴かれること、約束が成就されるその日が来ることをあらかじめ見せ、保証して下さいました。弟子たちは、どんなにか力付

けられたことでしょう。自分たちは小さくても主は大いなるお方です。

主イエス様は、ある時、こう教えて下さいました。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔く時には、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」(マルコ4:30~32)。

私たちの主に捧げる奉仕はどんなに小さくとも、神様の大きな計画の中で、無くてはならない一つです。主は、地の果てに至まで福音を届けることをよしとされ、そのために私たちを用いて下さいます。小さな者であることを恐れ、恥じることはありません。この日、弟子たちを力付けて下さった聖霊は、私たちをも力付け大きな枝を張る者にして下さいます。力を得て共に進みましょう。

(小野田雄二)

[今日の暗唱聖句] 使徒言行録2章4節

すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。

〈ねらい〉

聖霊なる神さまは、どんな時も僕たち私たちと共にいてくださり、力づけてくださることを喜び感謝します。

〈今日のお話〉

新しい年を迎えました。〇〇くん、〇〇ちゃん……と、新しい年もいっしょに神さまのお話を聞くことができるとてもうれしいです。いいえ、先生と〇〇くん、〇〇ちゃん、……だけではありません。ここには目には見えませんが、聖霊なる神さまが私たちの真ん中にいらっしゃいます。聖霊なる神さまは、私たちに、聖書のお話がよくわかるように助けてくださいます。

イエスさまが天にお帰りになって、とても心細く思っていたペトロたちはイエスさまのお約束どおりに、皆で心を合わせてお祈りをしていました。その時、聖霊なる神さまのお力がペトロたち心を満たしました。

わたしたちも、ペトロさんたちのように、みん

なで集まって神さまのお話を聞いたり、いっしょに集まってお祈りをささげることを神さまはとても喜んでくださいます。そして、聖書を読む時も、お祈りをささげる時も、聖霊なる神さまがわたしたちを助けてくださいます。

〈暗唱聖句〉使徒言行録1：8

「あなたがたの上に聖霊がくだると、あなたごたは力をうける。」

〈賛美〉

「わたしたちは しゅイエスのこども」44番
日本基督教団出版局『子どもさんびか』より

〈子どもカテキズム〉問30

聖霊なる神さまが私たちに信仰を与え……

〈お祈り〉

新しい一年も、聖霊なる神さまがわたしたちのお祈りを助けてください。アーメン

〈分級の流れ〉

①分級の部屋を整えて、子どもたちも新たな気持ちで分級に期待を持てるように、工夫します。

(例*出席表を新しくして壁に貼ったり、季節の花を飾ったり……)

②聖霊降臨の絵本や絵を見せながら「今日のお話」をします。

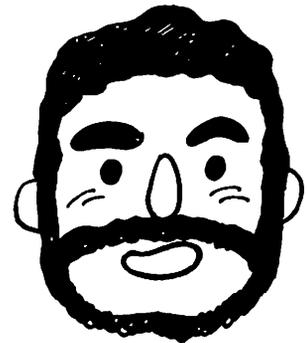
③新しい年の、初めての分級です。

聖書かるた、聖書すごろくなどで楽しく遊びましょう。

教会に、聖書かるたも聖書すごろくも無い場合は、先生手作りの「ペトロ福笑い」を用意しましょう。

画用紙に顔の輪郭を描いて、部分ごとに切った眉毛・目・鼻・口・ひげ等を用意します。タオルなどで目隠しをして、さあ、やってみよう。「もっと上!」「下、下!」と教えてあげてね

④丸くなってお祈りをささげて、来週に期待を持たせます。



〈目標〉

ペテロコステの出来事を生き生きと再現する喜びを通して子どもたちとの交わりを深める。少しでもこの驚くべき出来事が子どもたちの心に残るように。

〈導入〉

『しりとりで言ってみよう！(十二弟子編)』

黒板などに十二弟子の名前を書いておいて、しりとりで全員の名前を言えるかみんなで協力してやってみる。つながらないところはほかの言葉でおぎなう。たとえば、

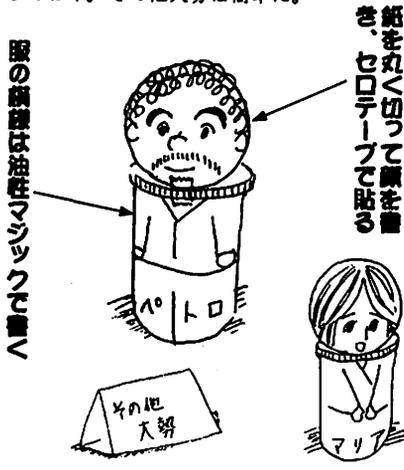
ペトロ→ローマ→マタイ→イスカリオテのユダ→大好きなイエスさま→また来てくれるイエスさま→まずかったぶたのえさ→サマリヤ→ヤコブ→ブスなマリヤ→やだと言ったヨナ→なかなか信じなかったトマス……

〈展開〉

(1) 場面設定

《準備》

フィルムケース(デジカメの時代では手に入りにくくなった?)などを使って、弟子たちの簡単な人形を作っておく。その他大勢は簡単に。



●時期：過ぎ越しの祭りから50日目、つまり主の十字架から50日目。イエスさまが昇天されてから10日目ほど。

●人物：十二弟子(うち一人はユダの代わりに選ばれたマティア)＋イエスの母マリヤ＋イエスの兄弟たち＋その他大勢(120人

ほど) リーダーは？

●場所：エルサレムの都の家で大きな屋上の間。お金持ちの家？最後の晩餐があったところ？

これらの場面設定を説明するか、子どもたちと一緒に考えたりしながら、人形を並べていこう。屋上の広間はティッシュペーパーの箱を台にする程度でいいでしょう。

(2) 弟子たちの心情

ユダヤ教の迫害を恐れていた？いやもう彼らは恐れていなかった。その証拠にまたエルサレムの都の真中に戻ってきたではないか！彼らはただ「心を合わせ熱心に祈り」(使徒1:14)、父の約束(聖霊)を待ち望んでいた。

(3) 驚きのしるし

激しい風。風は旧約聖書では神の霊を表した。炎のような舌。炎は神のご臨在のしるしであった。(新聖書注解P.71)

(4) 聖霊降臨後の弟子たち

イエスを証しする者となった。世界中から集まっている外国のユダヤ教徒たちにもわかるように外国語で「神の偉大な業を語りだした。」(使徒2:11)ヘブライ語、アラム語、ギリシヤ語、コリント語、エジプト語、アラビア語などのカードをつくり、弟子人形の前に置こう。

彼らはどのように神の偉大な業を語ったのか想像してみよう。詩編に出てくるような言葉で、神の創造、救い、さばき、摂理、統治の業を語ったのでしょうか。また主のいやしの業、主の苦難、主の十字架、主の復活などを力強くあかしたのでしょうか。

〈ともに祈ろう！〉

- ① 新しい年への感謝。一年の祝福。
- ② お友だちの新年の誓いが果たされるように。

〈遊び〉

お年玉袋に飴玉、チョコレート、聖句カードを入れてプレゼントしましょう。またお年玉(お金以外。)交換会にしてもよいでしょう。

お正月です。こままわし、凧あげ、かるたなどで楽しく遊びましょう。

〈ねらい〉

私たちの内に宿っている聖霊なる神様が、弟子たちにも働かれた同じ神様であることを明確に表現する。その為には、聖書中の聖霊の働きを用いて具体的な展開をし、いかにその働きが重要かに注目したい。この箇所は、ペンテコステには「教会の誕生日」に主眼が置かれるが、ここでは我々のうちに宿っている「聖霊」がどのように働かれるかに重きを置きたい。

〈展開例〉

聖霊が降った出来事について考えていきましょう。

○聖霊が降るときに、二つのことが起こりました。

どのようなことが起こりましたか？

→2章2節、「激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。」

台風の時や激しい雨風が吹いている時を想像してみてください。その時と同じようにものすごい音の迫力で天から神様の息吹（聖霊）が降ってきたのです。ヘブル語で「霊」は「激しい風」、また「息」でもあります。私たちも神様の息吹、「霊」によって生かされているのです。【参照：創世記2章7節】

→2章3節「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」

キャンプファイヤーの火は見たことありますか？ ものすごい火の勢いです。その炎と同

じような舌（べろ）が分かれてひとりひとりの上にとどまりました。五旬祭で外国から沢山の人が来ていて、その不思議な光景を目の当たりにしました。見た目はとても気持ちのいいものではなかったと思います。だけどそれが、大切な神様の働きだったのです。その舌が一人一人の上にとどまり、「聖霊」に満たされ（豊かになり）、自分たちの言葉ではない言葉で話を始めたのです。その光景はものすごかったでしょう。それを聞き、見た人たちは自分の国へ帰ってまた誰かに知らせたはずですが、こうして神様を信じる民が更に起こされていきました。

○聖霊が私たちの内に宿っています。どんなときに感じますか？

神様と自分との信仰を確認する時としたい。どうしても神様のことを語らずにはいられない時があるのかどうか、また、その時は本当に喜んで神様のことを伝えようとしていたのかなど、普段の生活の中で聖霊なる神様をどのように感じるかを話し合ってみる。

〈祈り〉

神様、いつも私たちの内に宿ってくださり、私たちが神様を信じる心もお与えくださっていることに感謝します。どうか私たちの心をしっかりと捉えてください。そして、私たち自らが神様、イエス様を証して一人でも多くの人にお知らせすることができますように。

ねらい

○聖霊の注ぎによって人間の霊性が啓発され、清められ豊かにされることを学ぶ。

展開例

○五旬祭（ギリシア語で「ペンテコステ」、50の意味）とはユダヤ教で今日まで伝承されている過ぎ越し祭の七週後に祝う「刈り入れの祭」のこと。この日、すなわちイエスが復活されて50日目に聖霊が降り教会が誕生した記念日。昇天したイエスが地上に再び「聖霊」としてもどってきて、信仰者の心に内住した日。この日以来キリストは信仰者と一心同体となる。キリ

ストの体は信仰者の共同体の集まりなり、これが教会である。

話し合ってみよう！

○人間の霊性は聖霊の内住によって豊かにされるのでないか。人間のスピリットは神のスピリットによって清められ、潜在的機能が活発化されるのではないか。逆に悪霊は人格を破壊する力をもっているのではないか。

祈り

私の霊をキリストの霊によって清めてください。

○暗唱聖句○

使徒言行録 2：4

○祈りの課題○

聖書日課

月	創世記	1章 1～2節
火	詩編51編	1～11節
水	詩編51編	12～21節
木	エレミヤ	31章 31～34節
金	ガラテヤ	5章 22～26節
土	ペテロー	2章 1～6節

☆ニ日記☆

テキスト 使徒言行録2章14～42節

1. 十字架で殺されたイエスこそ主、メシア

ペトロは、ほんの50日前に起きた主イエスの十字架について聖書から説き明かし、まず詩篇16編から、主イエスの復活を論証します。周りを敵ばかりに囲まれ、まことの神に従う真実な者はわずかで、むしろ偽りの神につき従う者ばかりに囲まれながら、襲いかかられて「倒れる壁、崩れる石垣」(62編4節)にされようとしているとき、ダビデが「神はわたしの岩、わたしの救い、岩の塔。わたしは動揺しない」と告白した詩編です。「わたしの心は喜び、魂は踊ります」とは、すべてがうまくいっている手放しの喜びのことではなく、むしろ「死の陰の民を行く」とき、「わたしを苦しめる者を前にして」(23編4、5節)の喜びです。主はダビデの「魂を陰府に渡すことなく、墓穴を見」せることをしないで「命の道」に導かれるからです。だからこの箇所はペトロとパウロによって、主イエスの復活の預言とその成就として語られます(使徒2章25～28節、13章35節)。このことはやがてダビデの子であるイエス・キリストにおいて成就しただけではなく、その方によって確かにされたことでした。ダビデはそれをはるかに望み見ながら、この「命の道」の確かさの中を歩み、「御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い、永遠の喜びをいただきます」。ペトロたちは、「神はこのイエスを復活させられた」ことの証人なものでした。そして主が約束されたとおりに、主が天から遣わされた聖霊の力によって、ペトロたちは隠れていた部屋から出て、今や主イエスを力強く証しする者とされたのです。主を三度否定したペトロが、今ここで力強く証していること自体が、そのことの証明でした。

2. 神の右に上げられたイエス

しかしさらにペトロは、ここで詩篇110編を引用しながら、主イエスがダビデの主であることを明らかにします。主イエスもご自身について問わ

れたとき、この詩編を引用してご自身がダビデの子でありながら、しかもダビデに優る者であられることを明らかにされました(マタイ22章41～45節、マルコ12章35～37節、ルカ20章41～44節)。そしてさらには、ご自身が「神の右に座る」者であることを明言されました(マタイ26章64節、マルコ14章62節、ルカ22章69節)。それは、ダニエルが、『人の子』のような者が天の雲に乗り、『日の老いたる者』の前に来て、そのもとに進み、權威、威光、王権を受けた」と預言していたことが、ご自身において実現したことを明言するものでした。福音書は、この主イエスが復活後、天に昇られて、神の右に座られたことをも証言します(マルコ16章19節)。そこでペトロはここで、「イエスは神の右に上げられ」たことを証しし、その根拠にこの詩編を引用して「あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさった」と証言したのでした。

このように聖書は、ここで神の「右の座に就いた方とは主イエス・キリストであり、その方は神ご自身から敵を足台として踏みつけ、支配する權威と力を与えられた方であることを明らかにします。復活して天に昇られた主イエスは、今や「神の右の座」に就かれ(マタイ26章64節、コロサイ3章1節、ヘブライ1章3節、8章1節、10章12節)、高く上げられて(フィリピ2章9節)、一切の權威を与えられ(エフェソ1章21節)、天使やすべての權威と勢力は、このキリストの支配に服するものとされました(ペトロ3章22節)。こうしてキリストが「敵のただ中で支配」する力と權威を与えられるために、神が「力ある杖」を伸ばされたのでした(2節)。こうしてペトロはここでの説教を、こうしめくくるのでした。「だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさった」と。

(三川栄二)

テキスト 使徒言行録2章14～42節

〔単元のねらい〕

この日、ペトロは、旧約からの引用を四つも積み重ねて論証しつつ説教しました。ですから、預言と成就という関係に焦点を当てて語ることも出来るでしょう。しかし、今回はペトロの説教を聞いた人々の反応に焦点を置きました。なぜなら、ここにペトロの説教をどのように聞かなければならないかが教えられているからです。キリストの十字架は我がためなり。聖霊の助けを祈り求めて、この点に迫ることをねらいとしたい。

「人々は大いに心を打たれた」

五旬祭の日に、約束の聖霊が降られました。すると、弟子たち一人一人は聖霊に満たされ、動かされて、なんと、様々な国の言葉で神の偉大なみ業を語り始めたのでした。

五旬祭のその日、世界の各地から信心深いユダヤの人々が、ここエルサレムに集まっています。人々は、あっけにとられて足を止め、驚き怪しみつつも、その語られることに聴き入りました。しかし、ある人たちは言います「な一に、あの人たちは、ぶどう酒に酔っているだけだよ」。

この時でした。ペトロは立ち上がり、声を張り上げて語り出したのです「ユダヤの方々、ぜひ、聴いて下さい」と。

さて、使徒ペトロは何を語るのでしょうか。要点は三つありました。

第一に、私たちは酒に酔っているのではなく、聖霊が私たちを通して、今ここで、み業を現しておられること。第二に、聖霊が降られたのは、神様の約束の成就であり、今や、聖霊が豊かに臨まれる新しい時代が到来したこと。第三に、ナザレのイエスこそ主であり、メシヤ（救い主）であること。この三つです。

そして、この第三の点を22節から詳しく説明していくのでした。すなわち、ナザレのイエスは十字架に架かれる前、多くの奇跡と、不思議な業と、しるしを行うことによって神から遣わされた方であることを証明された。そして、その後十字

架に架かって死なれたけれども、復活され、今や天に昇り、聖霊を注いでおられるのだ、と教えたのでした。

こうして、ペトロが語り終えた後、人々の反応が37節に記されています。「人々はこれを聞いて大いに心を打たれ（心を刺され）、ペトロとほかの使徒たちに、『兄弟たち、私たちはどうしたらよいのですか』と言った。」のでした。

なぜ、人々は心を刺されたのでしょうか。なぜ、激しい恐れの中に、どうしたらよいのかと震えつつ尋ねたのでしょうか。それは、主イエスを十字架の死に追いやったのは、あなたがた一人一人であると、ペトロがはっきりと告げたからです（23、36節）。そして、人々も救い主を十字架に架けて殺してしまった、この大きな罪を犯したのが、誰でもない、自分自身であることを認めたからです。

さて、今日は、主イエスを十字架に架けたのは私である、というこの点をよく考えてみましょう。

この日、ペトロの説教を聴く群衆の中の多くの人々は、主イエスの十字架刑との直接の関わりは持っていません。なぜなら、ほとんどの人が五旬祭のために世界の各地から集って来たばかりの人たちであったからです。

しかし、人々は主を十字架に追いやり、死に至らせたのは私であると悟ることが出来ました。だからこそ大いに心を打たれたのです。皆さんはどうでしょうか？ イエス様を十字架につけて殺

したのは、あなたであると言われて、それを認めることができるでしょうか。

ある人は言うでしょう。「イエス様が十字架に架かれたのは、私が生まれるよりずっと前のことだ。それなのになぜ、イエスを十字架につけたのはあなただと、言われなくてはならないんだ。おかしな話ではないか」と。確かに、イエス様が十字架を負って、エルサレムの町を歩まれたその時、私たちはまだ、生まれてもいませんでした。何の関わりが持ち得るでしょうか。しかし、聖書は、イエス様を十字架に架けて殺したのはあなたであると告げるのです。

もしも、あなたの内に罪がなく、罪を犯して誰かを悲しませたことが一度としてなかったのなら、イエス様を十字架に追いやったのはあなたではありません。しかし、もしも、罪があることを認めるのなら、イエス様はきっと、こう言われるでしょう。「あなたのその手で犯した罪のために、わたしはこの両手を釘で打ち抜かれました。あなたが悪い考えを一心になって思いめぐらしたゆえに、頭にいばらの冠をかぶりしました。あなたが思いと言葉と行いにおいて犯した一切の罪のために、わたしは十字架につけられました。そう、わたしを十字架につけ死に至らせたのは、あなただったのです。

しかし、心配しなくていい。わたしは、あなたのために喜んで十字架を負ったのだから。わたしは、あなたに罪の赦しを与えるために、あなたの罪ととがを代わりに負って死ぬためにこそ十字架についたのです。だから、わたしの死から目を逸らしてはなりません」。

さて、大いに心を打たれ助けを求めて声をあげた人々に対して、ペトロは、なお望みのあることを示して答えました。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」悔い改めとは、あれこれのことを反省するという意味ではありません。心の向きを全く、根こそぎに変えることです。それまでの、主イエスの名を呼び求めることをしなかった生き方を止め、「イエス様、私のために十字架に架かって下さり、御免なさい。そして感謝します」と告白することです。その時、あなたの罪は全く赦され、そして聖霊を受け、心は平安に満たされ、義に生きる力を得ます。この福音の約束は、遠くにいるすべての人にも与えられています。

私たちも悔い改めて進んで行きましょう。

(小野田雄二)

【今日の暗唱聖句】

使徒言行録 2 章 21 節

主の名を呼び求める者は皆、救われる。

〈ねらい〉

聖霊なる神さまが私たちに信仰をあたえ、神さまの子どもにしていただける恵みを喜び、感謝します。

〈今日のお話〉

シモンさんは、湖でお魚をとる漁師さんでした。シモンさんの弟のアンデレさんが先にイエスさまのお話を聞いて、お兄さんのシモンさんをさそいました。お友だちの中にも、お兄さんやお姉さんに誘われて教会にきた人もいますか？

イエスさまは、シモンさんの顔をじっと見つめて「あなたをペトロと呼びます。ペトロとは、〈岩〉という意味ですよ。」と言いました。

岩は、ドッシリとしていて強そうですね。でも、ペトロさんの性格はそうではありませんでした。しかし、聖霊なる神さまに満たされてからは、何も恐れなくて、イエスさまのことを人々にいっしょうけんめいに伝える人になりました。そしてたくさんの人々がイエスさまのことを信じて洗礼

を受けました。これが、一番初めの教会です。イエスさまがおっしゃったとおりペトロさんはお魚ではなく、人間をとる漁師（ルカ5：10）になったのですね！

〈暗唱聖句〉使徒言行録2：21

「主の名を呼び求める者は皆、救われる。」

〈賛美〉

「ペテロは」(67番) 1・3節

日本基督教団出版局『子どもさんびか』より



〈子どもカテキズム〉問31

神さまの子どもとされることです……私たちの罪をゆるして義と認めてくださいました……

〈お祈り〉

わたしたちの名まえを呼んでくださるイエスさま、神さまの子どもにしてください、ありがとうございます。アーメン。

〈分級の流れ〉

- ①寒くなって、風邪気味だったり、お休みのお友だちの安否を問いながら、暖かく迎えましょう。病欠のお友だちには、忘れない前に、お見舞いのカードを書きます。

- ② 例1 「ペトロさんのお魚つり」(キャンディもあるよ!) —

- ・画用紙にクレヨンで、好きな魚の絵を描いて切り抜きます。
- ・魚の口にゼムクリップをはさみます。(キャンディの端にクリップをはさんで混ぜる)
- ・釣り竿は、30~40cmの棒の先に、太めのヒモを垂らして、先に磁石をつけてできあがり!!



- 例2 「魚つかみ」(小さいミカンがたくさんある時に) —

- ・二本のロープで川を作ります。「さあここは川です。これから魚がどんどん泳いできます。自分の前にきたらさっと捕まえましょう。とても速いですよ。」と言って、ミカンを魚に見たてて、端から転がします。場所としては、少し坂になっている所がいいでしょう。ロープの外側に並ぶ順番を交代しましょう。



*とにかく、ゲームは楽しく! しましょう

- ③ 「お魚あそび」を楽しんだ後、賛美をします。

- ④丸くなってお祈りをささげて、来週に期待を持たせます。

〈目標〉

ペトロの説教から聖書のメッセージの真髓を学ぼう。

〈導入〉

「連想ゲーム」

- (1) 黒・赤・白・黄それぞれの色から連想するものを10個ずつくらい言い合ひましょう。さまざまな答えがでると思います。たのしい交わりのきっかけとしてください。
- (2) 「じのないほんのうた」(『ふくいんこどもさんびか』)の歌詞を示して、黒は罪、赤は罪の贖いのための血、白は罪のきよめ、黄は神の国を表すものとして使うことを確認しましょう。

〈展開〉

ペトロの説教の言葉から、四つの色を表すものを探してみましょう。

黒：あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。

赤：十字架

白：イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。

黄：神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。

みなさんは何色が好きでしょうか。黒が好きだという人もいるでしょう。でも今日の黒の意味は罪です。誰でも「あなたは罪人だ」と言われることを嫌います。でもこの黒のメッセージはなくてはならないものなのです。自分に罪があることがわからなければ、私たちとイエスさまはなんの関係もなくなるからです。

神さまから皆さんへのメッセージは、この四つ

の色が全部含まれています。聖書のメッセージでまず大切なのは黒です。これからも聖書のお話を聞きつけて、みなさんも「大いに心を打たれる」(使2:37)時がきますように。そして赤・白・黄のすばらしい知らせを感謝して受け取ることがきますように。

〈ともに祈ろう!〉

- 三学期の学校生活が祝福されるように。
- お友だちの願いごとがかなうように。

〈遊び〉

「記憶力ゲーム」

【105ページに掲載の図版】の絵をコピーし、全員に配る。1分間見た後、絵を伏せて次のような質問に答える。

- ①ペトロは何を腰に下げていますか？
- ②どんな動物が、それぞれ何匹いましたか？
- ③ローマの兵士がこっそり説教を聞いていました。何人いましたか？
- ④どこの国の外国人が来ていますか。
- ⑤どこかの王子がペトロの説教を聴いています。どこの国の王子ですか？
- ⑥木に登っている少年は何人ですか？
- ⑦パンは何個ありましたか？
- ⑧馬がくわえているくだものは何ですか？
- ⑨おしっこを我慢している人が一人います。
- ⑩ペトロはどんな履物を履いていましたか。
- ⑪話を聞いている日本人はどんな仕事をしている人ですか。
- ⑫この絵を見て変だと思うところはどれですか？

*絵にどんどんイラストを追加してユニークな絵にしてください。

〈ねらい〉

ペトロの御言葉の解き明かしで多くの人たちがその言葉を受けてイエスを信じた。まさに、伝道の原点である。なぜ人々はペトロの言葉に心動かされて神様の言葉に従ったのか、聖霊の働きを中心に理解を深める時としたい。

〈展開例〉

○「人々はこれを聞いて大いに心を打たれ」(37節) ました。どうしてか話し合ってみよう。

→それまで親しんできた偉大な預言者ヨエル、ダビデが実はイエス・キリストの預言であったこと、またそれは同時に自分の罪の大きさも分かったことが大いに心を打たれました。

ペトロさんの威厳ある話し方はまさに聖霊なる神様の命ある言葉として人々の心を動かしてしまいました。実は偉大な預言は全てイエス・キリストに繋がっていたこと(歴史的認識)、そしてイエス様が我々の罪の為に十字架に付け、殺してしまったこと(信仰的認識)が事実として受け入れた瞬間です。その力は全て聖霊の働きによるものだったのです。

○人々はペトロさんの話を聞いて不安になってしまいました。ペトロさんと他の使徒たちにどうすればよいと聞きましたか？(38節)

→「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただ

きなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」(38節)

人々はペトロさんのお話に心動かされた反面、不安のどん底に突き落とされました。自分の罪がどれほど深いか理解できたからです。それでは一体どうしたらいいのかと。方法が全く分からない……。自分の力ではどうにもならないことも同時に分かりました。その不安の解消には「悔い改めてイエス様を信じること」以外に方法がないことを示唆しています。そのことで「賜物としての聖霊」を受けられることができる特別な権利が私たちには与えられ、神様からの勇氣と希望も同時に与えられているのです。

○実際に神様の言葉を聞いて(聖書で読んで)心動かされたことがありますか？ 具体的に話し合ってみよう。

聖書の話聞いて心動かされるのは、聖霊の働きによります。それは自分の罪が大きく、また許していただいていることがきちんと自覚できている証候でもあります。心動かされることを率直に認め、そのことを忘れず、日々の生活で聖霊なる神様の働きに感謝しましょう。それでも人間は罪深いのです。すぐにその大切なことすら忘れてしまうのです。しっかり神様にお祈りして罪に支配されないように備えたいと思います。

ねらい

- イエスの十字架の死は私のためでもあったことを理解する。

展開例

- キリスト教の最古の説教。神がイエスを復活させたと言っている。イエスが自分の力で復活したのではなく、全知全能の神が神の子としての地上のイエスの十字架に至るまでの神への従順に合格点を与えた出来事が復活。「御子は死者の中からの復活によって力ある神の子と定められた」（ローマ1：4）。「あなた方が十字架につけて殺したイエスを神はメシヤとされた」とあるように、私の罪がイエスを十字架に追い

やったのであり、そのイエスが復活させられることによって私の罪がゆるされ、義とされる根拠となっている。

話し合ってみよう！

- 死人の復活は人間の力では不可能。神の力が必要であった。神はこの力をイエスに与えて全面肯定された。すなわちイエスは正式に神の子に相応しいと宣言された。

祈り

天の父なる神は私を愛して、イエスを救い主として送り、私の罪のために死んでよみがえられたことを信じます。

○暗唱聖句○

使徒言行録2：21

○祈りの課題○

聖書日課

月 詩編16編
火 使徒2章 25～33節
水 詩編110編
木 使徒2章 34～36節
金 エペソ1章 17～23節
土 ヒリビ2章 6～11節

☆三日記☆

テキスト 使徒言行録3章1～10節

1. ナザレの人イエス・キリストの名によって

ペトロとヨハネがいつものように「美しの門」を通り抜けて、神殿の中に入ろうとしたときのことでした。そこに集まる善男善女からの喜捨、施しを求めて、毎日その場に置かれていた男から、施しを求められたのです。その彼がペトロたちに施しを求めた時、二人は彼をじっと見つめながら、こう語りました。「わたしには金や銀はない」と。それを聞いたこの男はどれほど落胆したことでしょうか。「わたしには金や銀はない」、それは拭いようもない事実でした。「ない」、それは欠乏、弱さです。しかし真実の強さ、豊かさは、この「ない」から始められます。その「ない」という事実から、満ち溢れるほどの満足が与えられました。ここでも、この「ない」、欠乏から、祝福が開始されていきます。「持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」。

ペトロは金銀を持っていませんでしたが、別のものを持っていました。それは主イエスに対する信仰であり、主が生きて働いてくださることの恵みの事実でした。「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」。そこでこの男が立ち上がり、歩き回り、躍り上がって神を賛美するに至ったのは、彼にそれほどの強い信念があったからではありませんでした。医学では彼の障害が重度で治療不可能なことを、医者ルカは見抜いていました。それは「生まれながら」(3章2節)の障害で、彼は40歳を越えていたからです。「生まれながら足の不自由」であるということは、彼はそもそも「歩く」ということを知らず、経験したこともないということです。ほんの数日寝込んでいても、足の筋肉は弱り、足腰が立たなくなり、歩行困難になります。ところが生まれてからこの方一度も歩いたことのない彼が、ここで「踊りあがって立ち、歩き出し」、さらには「歩き

回ったり踊ったり」することができた、それはまさしく奇跡であったことを明らかにしています。だからそれを見た人々は「我を忘れるほど驚いた」のでした。この奇跡が起きたのは、ペトロにそのような奇跡の治癒能力が備えられていたからではないことは、ペトロ自身が明らかにしました(12節)。そうではなくて、「イエスの名」がそれを起こしたのです。「この人が良くなって、立っているのは、イエス・キリストの名によるものです」(4章10節)。

2. イエスの名、生きて働く主のリアリティー

「名」がそのような奇跡を起こすことを不思議に思いませんか。「名は体を表わす」とあるように、聖書の世界では、「名」はその実体を意味しました。つまり「イエスの名」とは、ここで主イエスご自身が生きて働いておられるということなのです。天に上げられた主は、しかしここで聖霊によって、弟子たちを通して、今も生きて働いておられるということなのです。神殿は「神がその名を置く」と定めた場所でした(申命記12章11、21節)。そこで神はソロモンが建立した神殿に「わたしの名をとどめる」と約束されましたが(列王記上8章29節)、それはそこに神が臨在されるということでした。神の名が置かれるとは、そこに神が臨在されるということです。イエスの名とは、ペトロと教会の許に教会の頭である主ご自身が共にいてくださり、臨在されるということです。天の昇られた主が、しかし今も教会と共にいてくださり、わたしたちの内において生きて働いてくださるということなのです。その証拠、しるしが、この出来事なのでした。そして今やそれは、主が天に昇られた後の教会においても継続している、そうして主は見えない姿で教会に臨在し、教会を通して生きて働いておられるということなのでした。(三川栄二)

テキスト 使徒言行録3章1～10節

〔単元のねらい〕

美しい門で、使徒たちを通してなされた癒しの御業。これは、それ自体驚くべきものです。しかし、この一つだけを取り上げることはせずに、この男を見詰めるベトロにも注目しました。それはベトロにも人を造り変えられる主の憐れみと御力が豊かに注がれていたからです。こうして、主イエスが成して下さる御業の深さ・広さを覚えたいと思います。

「主イエスの名によって立ち上がり、歩きなさい」

約束の聖霊が降られて後、誕生したばかりの教会は力強く進んで行きました。次々とイエス様を信じる人が起こされ、皆、主に従うことを喜んで告白しました。教会の交わりに加わる人々の数は、すぐにも、3千人を越えていきました。

さて、そんなある日のことです。ベトロとヨハネは一人の男と出会うのでした。

場所はエルサレム神殿にある「美しい門」のそば、時は午後三時の祈りの時間でした。ベトロたちは、エルサレムに住む多くのユダヤの人々と同じ様に、祈るために神殿へ向かいました。

さて、もう一方の一人の男。彼は生まれながらに足のきかない人でした。彼は毎日、この美しい門のそばに置かれ癒しを求めました。人々が祈り心を持って集るその時刻を見計らい、人通りの多いこの門の所に、家族の者か、あるいは友人に選ばれて来ていたのでした。4章22節に「彼は、四十歳を過ぎていた」とあります。もう何十年もの間、来る日も来る日もここに置かれていたのです。変化のない単調な生活は、彼の心から希望や気力を失わせていったことでしょう。

この時も、向こうからやって来た二人に、いつもと変わらぬ虚ろな表情で手を差し延べただけだったかもしれません。

ところがです。彼はここで、全く思いもよらぬ言葉を告げられるのでした。ベトロとヨハネは彼をじっと見て、「私たちを見なさい」と言ったのです。つまり、ベトロたちは、彼と目と目を合わせることで、そして真正面から彼とその状況を受け

止めることを求めたのでした。

ここで、ちょっと考えてみましょう。

今、私たちは町中の広い通りを歩いているとします。ふと気付くと、道の先に四十歳程の人がほこりにまみれて座っているのが見えます。遠くからでも、その人が自分では歩くことの出来ない人であること、癒しを乞うためにそこに運ばれて来た人であることが分かります。

さて、その人を私たちはじっと見つめ、さらに、その人に「私たちを見よ」と言うことが出来るでしょうか。きっと出来ません。本当に気の毒だとは思いますが。しかし、状況はどうにも変えようがないほど悲惨です。何も出来ない自分自身の無力さを思い、あるいは、苦しんでいる人のことなど何も考えないで過ごして来た自分自身の憐れみの無さを突かれて、きっと目をそむけてしまうことでしょう。もしかすると、その人に近付かないで済むように行く道を変えてしまうかもしれません。ところが、ベトロは「私たちを見なさい」と、この人に言うことが出来たのです。

かつて、エリコの町でのこと、こんなことがありました（マルコ10:46～52）。イエス様と弟子たちの一行がエルサレムへ向かっている時のことです。道端に盲人の物乞いバルテマイが座っていました。彼は道行く人がイエス様だと分かるので「ダビデの子イエスよ、私を憐れんで下さい」と大声を上げました。ところが、回りの人々は彼を叱りつけて黙らせようとしたのです。ベトロもそ

の仲間の一人でした。この時、イエス様だけは立ち止まって下さり、バルテマイを呼び、彼を憐れんで目を見えるようにして下さったのでした。

かつては盲人の物乞いの叫びに見向きもしなかったペトロが、この日、足を止め、生まれつき足のきかないこの人に言っているのです「私たちを見よ」と。ここに、ペトロに注がれている主の憐れみと御力を見ない訳にはいきません。

私たちも、またそうです。たとえどんなに悲惨な状況であったとしても、聖霊の力を受け、死に打ち勝たれたイエス様に信頼するならば、その状況にも、逃げずに目を向けていくことがきっと出来るのです。

それでは、本文に戻りましょう。互いに目と目を合わせて後、ペトロの口から、さらに意外な言葉が語り出されました。「金銀は私にはない」。もしも、これで終わってしまったのなら、たまったものではありません。しかし、ペトロには次の言葉があったのです「しかし、私にあるものを上げよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」。やがて朽ち行く金や

銀とは比べものにならない、はるかに良きものをペトロは投げようとしたのです。

こうして、ペトロが彼の右手を取って立ち上がらせると、たちまち、その人は足やくるぶしがしっかりして、躍り上がって立ち、歩き出すことが出来たのでした。完全な癒しです。まさしく、主の御業の現れでした。

彼は、歩き回りつつ神を賛美しました。彼も喜びに溢れる救われた仲間の一人となったのでした。そして、彼をこんなにも喜びと賛美で満ち溢れさせられたのは、金や銀ではなく、主イエス様の憐れみと御力であったのでした。

ペトロを造り変えられた主。そして、生まれつき足のきかなかったこの人を喜び立ち上がらせられた主。その主イエス様は、あなたをも造り変えることの出来る方です。

暗闇と悲惨さにも目を向けさせ、立ち向かわせる憐れみと勇気を与え、主を喜びたたえる賛美の歌声を満ち溢れさせることの出来るお方です。

復活の主イエス様に憐れみと御力を祈り求めて進もうではありませんか。 (小野田雄二)

〔今日の暗唱聖句〕 使徒言行録3章6節

ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。
ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」

〈ねらい〉

イエスさまのお名まえによって、お祈りができることを喜び、感謝します。自分の口で、お祈りできるよう励まします。

〈今日のお話〉

ある日、ペトロさんとヨハネさんは、足が思うように動かない男の人に出会いました。なんとかして、助けてあげたいと思いましたが、お金も十分持っていませんでしたし、その男の人が喜ぶことは、何ひとつしてあげられないように思えました。……そうだっ!!「お祈りしよう！」

ペトロさんは、イエスさまのお名まえによってお祈りしました。「イエスさまのお名まえによって立ち上がり歩きなさい。」

……するとどうでしょう!男の人は立ちあがって、歩きだし、神さまを賛美しはじめました。男の人にとって、お金をもらったりすることが一番うれしいことではなくて、イエスさまのお話を聞くこと、イエスさまのお力を信じるのが一番大切で、うれしいことだったのですね。

小さいぼくたちわたしたちは、「何も持っていない、何もできない」と思うことがあるかもしれませんが、ぼくたちわたしたちは、イエスさまのお名まえによってお祈りができるのです!うれいですね。

〈暗唱聖句〉使徒言行録3:6

「イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」

〈賛美〉

「主イエスとともに」90番

いのちのことは社『ふくいんこどもさんびか』より

〈子どもカテキズム〉問28

……救いは、ただ神さまの恵みとして与えられるのです。

〈お祈り〉

だいすきなイエスさま、イエスさまのお名まえをとおして父なる神さまにお祈りができますことを感謝します。アーメン。



〈分級の流れ〉

①聖書物語の絵本を見せながら、「今日のお話」をします。

②一人一人が十分に、体を動かして楽しんでいるか気を配ります

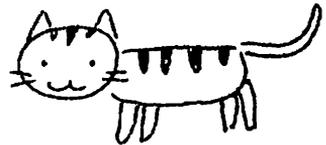
例1「立って歩きなさい」ゲーム

・教師が先頭になり、みんなは縦一列になって教師のうしろに並びます。教師は、歩きながら「立って、歩きなさい」と言い終わるいなや、振り向きます。他の子どもは、教師が「立って、歩きなさい」と言っている間は、歩いてついていき、ふりむいたらサッと止まります。教師は、その時まだ動いている子を見つけたら名前を呼びます。名前を呼ばれた子は、列の後ろに並びます。こうして、ある目的地につくまで続けます。★教師は、ジグザグに歩いたり速く言ったり、ゆっくり言ったり、速く歩いたり、ゆっくり歩いたりして変化をつけます。

例2「美しい門」ゲーム

・「ロンドン橋おちた」の要領で、「♪主イエスとともに歩きましょう」を賛美しながら、歩いて回ります。教師が二人以上いるクラスでは、教師が橋になって、歌の最後に橋をくぐったお友だちをやさしくつかまえます。教師に、つかまえられた子どもはウレシー!!

③丸くなってお祈りをささげて、来週に期待を持たせます。



〈ねらい〉

「わたしには金銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」(使徒言行録3章6節)

足の不自由な人は「金銀」を求めていた。しかし「見えるものは過ぎ去る」(コリント二4章18節)。「イエス・キリストの名」こそ、人が真に求めるべきものであることを確かめたい。

さらに、この人のいやしは単に肉体的なものにはとどまらないことを確かめたい。この人の足がいやされたのは「神を賛美し」、信仰によって主イエスのみ跡に従う道を歩いていくためであったのである。

〈展開例〉

1. 「金銀」はいちばん大切なもの？

この世には、お金や財産こそが人を幸せにしてくれると考える人たちがたくさんいると思います。でも、ほんとうにお金に私たちを幸せにしてくれる力があるでしょうか。お金は天国に持っていきませんね。それから、お金が人を不幸にすることもあります。

この生まれつき足の不自由な人は、人々からお金をもらって生活していました。ペトロが「金銀はわたしにはない」と言ったとき、この人はたぶんがっかりしたでしょう。でも、ペトロとヨハネは、この人にお金よりももっとすばらしいものがあることを示したのです。それはイエスさまの教

いです。

2. イエスさまのみ力

ペトロが「ナザレの人イエス・キリストの名によって歩きなさい」と言うと、この生まれつき立つことも歩くこともできなかった人が、立ち上がって歩き出しました。この人はどんなに驚いたことでしょうか。そして、どれほどうれしかったことでしょうか。この人は歩き回り、躍り上がって神さまを賛美しました。

イエスさまにはこのようなすばらしい力があります。この人にふるわれたみ力が、今も私たちがほんとうの命の喜びに入れてくださるために、教会と私たちひとりひとりの人生に生きて働いてくださるのです。

3. イエスさまの道を歩く

この人の足がいやされたのは、何よりもこの人がイエスさまの道、命の道を歩いていくためでした。イエスさまを信じて、イエスさまが歩きなさいと仰せになる道を歩いていくときに、私たちの命はほんとうに祝福されるのです。私たちもイエスさまの道をと共に歩いていきましょう。

〈祈り〉

父なる神さま。私たちの命をもも、金銀よりもはるかにすばらしいイエスさまの命のみ力によって生かしてください。アーメン。

〈ねらい〉

イエスの名によってなされた素晴らしいいやしの御業から、主の御力と愛を感じる。

〈展開例〉

○礼拝説教のおさらいとしての問い

- ①足の不自由な人が座っていたところは、何と呼ばれていましたか。(美しい門)
- ②その人はどれくらいの間、歩けずにいましたか。(生まれてからずっと。40年以上)
- ③その人は最初、ペトロにどうしてももらいたいと思っていたのですか。(お金を恵んでもらおうと思っていた)
- ④ペトロは誰の名によって、足の不自由な人を歩かせることが出来たのですか。(イエス・キリスト)

○話し合いの導入例

①この日ペトロは、イエスの名によって、生まれつき歩けない人をいやすという、驚くべき奇跡を行いました。しかし、ペトロは以前からこのような働きをしていたわけではありませんね。まだイエス様がいらっしゃった時、ペトロはイエス様に助けを求める目が見えない人を追い払おうとしたり、イエス様が十字架にかけられることになった時は、恐ろしくなってイエス様を知らないと言ったりしました。そのような、弱い弟子だった

ペトロを主は変えてくださり、人をいやす力を与え、イエス様を宣べ伝えるように用いられました。私たちも、イエス様から離れたたり、罪を犯したりしてしまう弱さを一人一人が持っています。でも、心から悔い改めて神様に従えば、必要な勇気や力、知恵をいただくことが出来るのですね。今までに、神様にお祈りをして勇気や力が出た、問題を解決することが出来た、という経験はありますか。また、今困っていること、誰かのためにしてあげたいと思っていることがあったら、一緒にお祈りしてみましょう。

②ペテロが行った奇跡を見て、そこにいた多くの人たちはとても驚き、その後、ペトロの話聞くために集まってきます。目の前で、今まで一度も歩くことも、立つことも出来なかった人が歩き回って神様を賛美しているのを見たら……今までイエス様のことを知らなかった人、信じていなかった人も、イエス様が本当の救い主だということを、素直に信じる事が出来たでしょう。今、私たちは、イエス様や弟子たちの奇跡をこの目で実際に見ることは出来ません。でも、神様は聖書によって、私たちに今も信仰を与えてくださっています。あなたは、聖書を読むことで、このような奇跡を信じ、イエス様を本当の救い主と信じる事が出来ますか。

ねらい

○暗闇と悲惨を造り替えて喜びの人生を与えてくださる主をほめたたえる。

展開例

○イエス・キリストの十字架の死と復活による救いがどのような影響を人間に与えるかの奇跡的事例。この場合、ペテロの説教はあくまで手段。この手段を通して、復活の主イエス・キリストが、聖霊の働きを媒介にして、現実生きて働かれたということ。信仰があれば、このような救いが与えられることを示している。現代では

奇跡によらず、体の完全な癒しは死後の復活を信じ待たねばならないが。

話し合ってみよう！

○現代では通常、奇跡は与えられないが、体の完全な癒しが復活信仰によって約束されていることを話し合ってみよう。

祈り

体の癒しも含めて救われていることを信じさせてください。

○暗唱聖句○

使徒言行録3：6

○祈りの課題○

聖書日課

月	ローマ3章	21～26節
火	ローマ5章	1～11節
水	ローマ6章	1～23節
木	ローマ8章	1～11節
金	ローマ8章	18～30節
土	ローマ8章	31～39節

☆ニ日記☆

テキスト 使徒言行録3章11～26節

1. 祝福の源となられた主イエス

イスラエルの使命は、「祝福の源」となることでした。神がアブラムに「地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る」(創世記12章3節)と約束され、だから「祝福の源」となることが求められたようにです。それがここ(25節)で確認されます。ただペトロは、このアブラムへの約束を、少し変えて引用します。ここで神はアブラムに対して、アブラム自身が、また彼の子孫であるイスラエルが「祝福の源」となることを約束されましたが、ペトロはそれを「あなたから生まれる者」によって、アブラム自身ではなくその子孫と変えるのでした。しかもそれは単数形で、アブラムの子孫であるイスラエルではなく、「アブラハムの子イエス・キリスト」を指すものとしたのです。「祝福の源」とされた方は、わたしたちの主イエス・キリストご自身なのだ、それがここでのペトロの主張なのでした。主イエスがわたしたちすべての者にとっての「祝福の源」となってくださり、主から神の恵みと祝福が広げられていく、ここでの「祝福」の中味は、一般的な祝福や恵み、あるいは地上的な祝福なのではなく、キリストにある救いと永遠の命を意味します。アブラムに与えられた「祝福の源」は、地上における土地と財産と子孫繁栄の約束でしたが、それはイエス・キリストにあって天に連なる約束、永遠の命の約束とされていったのでした。こうしてペトロは、人々が十字架につけて殺したイエスの生と死がもたらす「祝福」の意味を、あざやかに聖書自身から説き起こし、明らかにしていったのでした。

2. 祝福の源になるためのメシアの苦しみ

そしてそのために、主は「メシアの苦しみ」にあわなければならず、それは預言者によってあらかじめ預言されていたことの成就だったと、十字

架の意味を説き明かすのでした。「神は、すべての預言者の口を通して予告しておられたメシアの苦しみを、このように実現なさったのです」と(18節)。そしてイスラエルの民が待ち続けてきた「モーセのような預言者」とは、実はイエス・キリストのことであり、預言者たちが語り伝えてきたことは、このイエス・キリストだったとペトロは語るのです(22～24節)。まさに主イエスは「メシア」であったと(20節)。そしてメシアであったゆえに、「メシアの苦しみ」を負って十字架にかかられたのですが、神はその主イエスを「死者の中から復活させてください」だったのでした(15節)。

それがペトロがここで力強く語る証言であり、生まれながらに足が不自由であった人が、この「イエスの名」によって癒され、立ち上がり、歩くことができたのは、この復活の主が今も生きて、ここで働いてくださっていることの証拠だとしたのです。治癒不可能な男が、ここで今、事実みなの前で立ち上がり、歩き、踊りまわっていることこそ、主イエスが復活して、生きておられることの証拠だ。復活の主の力が、この人に生きて働き、この人を立ち上がらせたのでした。それは、ペトロの信心深さや、治癒能力のすごさ、あるいはこの人自身の信仰深さに基づくものではなく、それを越えて主ご自身が生きて働いてくださった結果なのでした。そしてこのキリストの復活の証人は日に日に増えていくのです。復活の主は、今も生きて働き、わたしたちの内にも業を起こし、復活の事実を見せてくださるからです。私たち自身もその証人の一人ではないでしょうか。死からよみがえられた復活の主が、ご自身の復活の命と力をわたしたちに与えてくださるからです。

(三川栄二)

テキスト 使徒言行録3章11～26節

〔単元のねらい〕

ペトロの神殿での説教は、神殿に集っていたイスラエルの人たちがその聴衆でした。そこで、ペトロは選民イスラエルの特権を交えて語っています。しかし、今回はこの点には触れませんでした。話の焦点を絞るためです。立ち帰って生きよ。この主の御旨に迫ることをねらいとしたい。

「立ち帰って生きよ」

ペトロを用いて、主イエスが足の不自由な人をいやされたのは、エルサレム神殿でのことでした。宮の中にいた大勢の人々は「美しい門」のそばでいつも施しを乞うていた、その見慣れた人が、今では真っ直ぐに立ち、歩き回って神を賛美しているのを見て、我を忘れる程に驚きました。「一体何が起こったんだ」と言うわけです。

非常に驚いた人々は、すぐさまペトロとヨハネのもとに集って来ました。こうして、この時に語られたのがペトロの神殿での説教であったのです。

さて、ペトロは何を語るのでしょうか。それは第一に、いやしの奇跡の原因についてでした。ペトロは語ります。「イスラエルの人たち、なぜこのことに驚くのですか。また、わたしたちがまるで自分の力や信心によって、この人を歩かせたかのように、なぜ、わたしたちを見詰めるのですか。……私たちではありません……イエスの名が、この人を強くしました。イエスによる信仰が、この人を完全にいやしたのです」(12、16節)。そう、目には見えなくとも復活され、御業を成して下さる主イエス様が、彼をいやされたのです。

次に、ペトロはこのいやしの説明を手掛かりとして、主イエスの死と復活を語り(13～15節)そして、人々に勧め命じました。「だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい」。実に、この一言がこの日、ペトロの伝えたかった一番の言葉であったのです。

主イエス様は、何のためにこの世に来て下さったのでしょうか。それは「あなたがた一人一人を悪から離れさせ、その(神様の)祝福にあずから

せるため」(26節)であったのです。ところが、人は悪から離れることをせず、祝福を与えるために来て下さった聖なる正しい方、主イエスを拒んで殺してしまったのです。

どうしてそんなことをしてしまったのでしょうか。その理由を解く一つの鍵となる言葉が箴言にあります。「神に逆らう者は正しく歩む人を憎む」(箴言29:27)、これです。なぜ、正しく歩む人が憎まれるのでしょうか。それは、正しく歩む人のその誠実な生き方が、神に逆らう者のその邪悪さを照らし出してしまうからです。

主イエス様は、あの善きサマリア人(ルカ10章)のように、人を別け隔てせず、弱り倒れている人を見過ごしにしないで、常に駆け寄り助けを与えてこられました。その姿は、人を区別して見、助けを必要としている人々を見過ごしにしてきた者たちの心に突き刺さりします。

「私は正しい。罪を犯してはいない」と思い込んでいた悪者たちの偽りと高慢を、正しい人は、そのへりくだった生き方によって、暴き出してしまうのです。正しい人が悪いわけではありません。しかし、偽りと高慢を抱きしめて手放すことをしない悪者たちは考えます。「誰が何と言っても、我々は常に正しい。間違いなどない。その我々の心を掻き乱すような奴は許してはおけない。そう、あの正しい人を殺してしまおう」。こうして、人は主イエスを殺してしまいました。光よりも闇の方を好んだのです(ヨハネ3:19)。

確かに、主イエスは意に反して殺されてしまったわけではありません。自ら死なれたのです(ヨハ

ネ10:11~18)。そして、主の十字架の死は、神がすべての預言者の口を通して予告しておられたことでもありました(18節)。そうではありますが、命への導き手である方を殺してしまったということは、何とも赦しがたい大きな罪です。人はその罪の責任を負わなくてはなりません。

ペトロは勧めます。「だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい」。そうです。犯してしまった罪がどんなに大きくても、悔い改めて立ち帰るならば、その罪は消し去られ赦していただけるのです。神様は約束して下さいました。「たとえ、お前たちの罪が緋のよう(に真っ赤)でも、雪のように白く(真っ白)になることができる」(イザヤ1:18)。

主イエス様も、悔い改める者たちの罪の赦しのために、十字架の御傷の残る御手を上げ執り成して下さいます(ローマ8:34)。

神様は憐れみ豊かであられ、赦しに富むお方です。

人は主イエスを拒み殺してしまいました。しかし、主は復活され、その御力を惜しむことなく与えて、40年間歩くことの出来なかったこの人を喜び立たせ、神を賛美する人に変えて下さいました。主は、今なお、私たち一人一人を悪から離れさせ、その祝福にあずからせようとしておられるのです。

では、私たちのすべきことは何でしょうか。それは、偽りと高慢を捨て去り、悔い改めて主のみもとに立ち帰ることです。その時、私たちは誰もが、罪の赦しと真の平安を受けることが出来るのです。

「わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか」(エゼキエル33:11)。立ち帰って生きよ。これが私たちへの変わることのない主なる神様の御旨であります。

(小野田雄二)

[今日の暗唱聖句] エゼキエル33章11節

わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。

立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。

イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。

〈ねらい〉

わたしたちの罪のために十字架におかかりくださったイエスさまの愛に感謝します。

〈今日のお話〉

先週のお話を覚えていますか？足の不自由だった男の人が、神さまのお力によって、歩けるようになって、踊りながら神さまを賛美したお話でしたね。その姿を見てびっくりした人々は、ペトロさんたちの後をついてきました。ペトロさんは、あわてて「私の力ではありません。すべて、私たちの救い主イエスさまのお力です」と言いました。けっして、自分が威張ったりするのではなく、神さまのお力をほめたたえました。すこし前までのペトロさんだったら、自分のことを威張ったり、自分がほめられることばかりを喜んでいてでしょう。イエスさまは、そのような心の弱いペトロさんのために、十字架におかかりになりました。

ペトロさんはそのことが、よくわかったのです。

〇〇ちゃん、〇〇くんをとても大切に思って、すくい、まもってくださるイエスさまに、感謝しましょう。

〈暗唱聖句〉ヨハネー4：8

「神は愛だからです」



〈賛美〉

「わたしたちのつみのため」(38番)

日本基督教団出版局『子どもさんびか』より

〈子どもカテキズム〉問29

……自分を罪人と認め、悔い改め……

〈お祈り〉

わたしの、いじわるな心をゆるすために十字架におかかりくださってありがとうございます。

〈分級の流れ〉

①寒い日が、続きます。子どもたちを励まし、温かく、暖かく迎えましょう。

イエスさまが、一人一人を深く愛しておられること、それゆえにご自分のすべてをお与えくださったことを、教師の証を交えながら伝えましょう。教師という子どもの上に立つ存在としてではなく、恵みによって神の子とさせていただいた、ゆるされた罪人であることの感謝をもって子どもと共に祈りましょう。

②画用紙に、クレヨンで自分の絵（体全体）を描いて、周りをおおざっぱに切り抜き、裏に「イエスさま、ありがとう」と、書きます。自分の存在が、神さまに愛されて、喜ばれていることを覚えながら自分の絵を丁寧に描きます。みんなの描いた絵を壁に貼ってもいいでしょう。

③丸くなって、賛美とお祈りをささげて、来週に期待を持たせます。

★一カ月が経ちました。クラスの子どもたちは喜んで日曜学校に来ているでしょうか？ 分級に満足して帰るでしょうか？ クラスの中で、一人一人の子どもが、自分らしく表現できているでしょうか？ 分級の自己評価をしましょう。



〈ねらい〉

「だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。」(使徒言行録3章19節)

ペトロは、主イエスを拒み、十字架につけた人々に向かって、悔い改めて主イエスに立ち帰るようにながす。足の不自由な人を救った復活の主の救いが、今も私たちを罪から救うために働いていることを語りたい。そして、子どもたちのひとりひとりをも悔い改めと信仰の恵みへと招きたい。

〈展開例〉**1. イエスさまこそ救い主**

生まれつき足が不自由だった人が立ち上がり、歩き回り、躍り上がって神さまを賛美しているのを見て、人々はたいへん驚きました。ペトロは人々に、この出来事のほんとうの意味を語り伝えます。

ペトロはまず語ります——この不思議な出来事は、わたしの力によって起こったのではありません。イエスさまの恵みのみ力が働いて起こったのです。

イエスさまは人となられた永遠の神さまです。ですから、昔も今も、また世界中のどんな場所でも、人を罪から救い、永遠の命に招くためのみわざをおこなってくださいます。足の不自由な人のいやしは、そのことを証しする出来事として起こされたのです。

イエスさまは今ここにいる私たちのために生きて働いてくださいます。そして私たちを、この

人と同じように救ってくださいますのです。

2. 悔い改めて立ち帰りなさい

イエスさまは救い主なのに、なぜ十字架につけられたのでしょうか。私たち人間の罪が、イエスさまを十字架につけたのです。

ペトロはこのときに神殿に集まってきた人々に言いました。あなたがたが聖なる、正しいお方であるイエスさまを十字架につけたのです——

けれどもイエスさまを十字架に追いやっていったのは、その時代にイエスさまのまわりにいた人々だけではありません。私たちのひとりひとりも、イエスさまを十字架につけた罪人です。私達も生まれながらの罪のためにイエスさまを見る目がさえぎられているために、イエスさまが救い主だということがわからなかったのです。でも、イエスさまは恵みによって、私たちの霊の目を開いてくださったのです。イエスさまが見えるようにしてくださったのです。

イエスさまの愛は、ご自分を十字架につけて殺してしまった人たちをもゆるして、救ってくださいます驚くべき愛です。どんな罪人も、悔い改めてイエスさまに立ち帰ることができます。悔い改めて立ち帰るなら、イエスさまは私たちのすべての罪をゆるしてくださいます。イエスさまは私たちをも招いていてくださるのです。

〈祈り〉

父なる神さま。私たちにもイエスさまの恵みを分け与えてください。アーメン。

〈ねらい〉

人間の罪の深さを共に覚え、悔い改めの必要を知る。心から悔い改めることができるように、共に祈る。

〈展開例〉**○礼拝説教のおさらいとしての問い**

- ①民衆が集まってきた、ペトロとヨハネがいた場所は何と呼ばれていたところですか。(ソロモンの回廊)
- ②民衆はなぜ、ペトロたちのところに集まってきたのですか。(歩けなかった人が歩き回って神様を賛美しているのに驚いたから。)
- ③「地上のすべての民族は、あなたから生まれる者によって祝福を受ける」と神様から約束された旧約聖書の人物は誰ですか。(アブラハム)

○話し合いの導入例

①「悪いことをしてしまったなあ」と思って、「神様ごめんなさい、赦してください」とお祈りしたことはありますか？ でも、もしかしたら私たちは、自分でも気がつかないようなところで、神様に罪を犯しているかもしれません。イスラエルの人たちの多くも、イエス様がまことの救い主である、ということを知らずに、イエス様を十字架にかけるといふ、恐ろしい罪を犯してしまいました。この日ペトロの話聞いた人は、自分の犯した罪を初めて知って、どんなに驚き、悲しんだことでしょうか。神様は、私たちの犯した罪について、色々な機会を通して教えてくださいます。

お父さんやお母さん、先生教えていただいたり、時には怒られたりすることや、お友だちや兄弟とけんかをした時、私たちは自分では気づかなかった罪に気づくことができるかもしれません。ある時は悔しかったり悲しかったりして、自分が悪くても相手に素直に謝ることは難しいかもしれませんね。皆さんはそんな経験がありますか？ でも、神様は私たちが罪を悔い改めることを待っておられ、悔い改めた人を赦してくださいと、聖書には書いてあります。私たちは、自分の罪を素直に認めて、神様に「赦してください」と祈ることができるでしょうか？

→それぞれの経験を具体的に話してもらい、祈る。皆の前で話せたことは、罪を自覚できていることだと、認めてあげたい。教師も一緒に、神様への悔い改めの祈りをする。

②この時のペトロの話には、旧約聖書の人たちの名前がいくつか出てきました。神様はイエス様が生まれる何百年、何千年も前から、イスラエルの人たちに、救い主の誕生を約束しておられました。イエス様の先祖に当たる、旧約聖書の人たちの名前を言ってみましょう。今まで聞いたことのある人はいましたか？ その人はどんな人でしたか？

→例) マタイ1章の系図を読んでみる。モーセ、サムエル、アブラハムなどについて、子どもたちの覚えていることを出してもらい、神様の約束が聖書の歴史を通じて成就されたことを分かち合う。

ねらい

○旧約の神は新約の神と同じであることを理解する。

展開例

○使徒2章のペテロの説教との違いはイスラエル人向けであったという点。足の障害者の癒しに驚いて集まったイスラエル人にペテロは語った。「アブラハム・イサク・ヤコブの神がイエスに栄光を与えられたのだ。モーセ・サムエルらの大預言者もイエスに向けて預言していたのだ。諸民族の救いの基となるというアブラハムへの神の約束はイエスにおいて完全に成就した。だ

から契約の子である皆さんは、メシヤの苦しみが自分の罪の赦しのためであったと信じて悔い改めて神に立ち返れ」と。

話し合ってみよう！

○アブラハム・イサク・ヤコブの神はイエスの神でもあるという旧約と新約のつながりについて話し合おう。

祈り

アブラハムに現れた神はイエスの神でもあったことを信じさせてください。

○暗唱聖句○

エゼキエル33：11

○祈りの課題○

聖書日課

月	使徒3章	11～12節
火	使徒3章	13～14節
水	使徒3章	15～16節
木	使徒3章	17～20節
金	使徒3章	21～24節
土	使徒3章	25～26節

☆三二日記☆

テキスト 使徒言行録7章54節～8章1節

(1) ステファノの裁判～人々の怒り

ステファノは同胞からの妬みにより「モーセと神を冒瀆する言葉を吐いた」との理由により、最高法院に訴えられたのです。その裁きの座で彼は大祭司からの尋問に答える形で、福音を語るのです。しかし、この福音は福音を受けるべきであったにも拘わらず福音を拒絶した人々に裁きを語る言葉となりました。

裁かれるものと裁くものの立場がこのとき逆転したのです。それと同時に、ステファノは敵の怒りを受けるのです。人々が怒ったのは神様に対して被告であるはずの者が、裁く側にいた人々を告発したからなのです。この怒りをあらわに示す者たちは、ステファノに向かって怒りを示し、かれに向かってくるのです。人々はこのとき、真の裁き主であられる神様を見ずに、ステファノをつまりは人間を見て踏いたのです。怒りは、神様へ向けられるべき人の目を背けさせ、人を見ることへと向けられ人間こそが裁く権能を持っているかのように思わせるのです。それに対して、神様にしっかりと目を向ける者は裁き主であられる神様のみを見つめるのです。このステファノの裁判の席に人を見る者と神様を見る者の違いが明らかに示されています。

(2) ステファノの処刑

ステファノは怒り狂った人々の手により、石で打たれて殺されました。彼は最高議会で判決を受けることなく、人々の怒りのために人の手で殺されたのです。

しかし、当時ローマの属州には死刑判決をする権限が与えられていませんでした。どんなに宗教的な決まりがあっても、属州民がローマの裁判を

無視して死刑を行うことは許されなかったのです。ですから、ステファノは都の外に引きずり出され、人目につかないように、こっそりと投石によるリンチによって殺されたのです。ここで都の外に連れ出したのは律法遵守のためというよりも、むしろ、ローマの兵隊などに見つかるのを避けるためであったと考える方が、遙かに妥当性があると思われると思います。いずれにせよこの行為は、この地上の法にも、神の法にも違反する行為であったのです。

(3) 敵のために祈り、死ぬステファノ

全く違法に、怒る人々によって殺されようとしているステファノですが、彼はこのころされる寸前に祈りを捧げています。その祈りは主イエスが十字架上でなした祈りを思い起こさせるような祈りでした。

その祈りは最後まで主イエス・キリストを見続ける祈りです。それは主イエスが示して下さいのように、敵のために祈る祈りでした。敵のために祈ることは容易なことではありません。しかも、今自分の命を奪おうとしている敵のために祈ることは並大抵のことではありません。しかし、主イエスにつく者は主イエスに倣うとりなしの祈りを捧げるのです。それは、神様を見ない人々が怒りを表していたのとは対象に、生きるにも死ぬにも唯一の慰めである主イエス・キリストに属する者は、この慰め主に全てを委ね、この方を見つめるからなのです。

ステファノの死は全てを主に委ねて訪れました。彼の死の報告には、復活により再び目覚めることの希望が示されているのです。 (春名義行)

テキスト 使徒言行録7章54節～8章1節

(単元のねらい)

ステファノは、使徒たちがその職務に専念できるようにと、教会の執事的働きを担うために選出された。ところが、ステファノは「伝道者」として実に説教のモデルとも言うべき優れた説教をする。ここに、すべてのキリストの弟子たちの共通の務めとしての福音の語り手としての姿を見ることができる。ここで、「ステファノ美談」としてではなく、命をかけた語り手として作り変える力を持つ、主イエスの福音の力、すばらしさを語りたい。なお、『子どもカテキズム』問22を参照のこと。

「大關利だ、ステファノさん」

使徒たちは、イエスさまの福音を語り続けました。神さまは、どんどん救われる人を教会に与えて下さいました。ところが、教会の仲間が増えてくると、教会がしなければならないお仕事も増えてゆきました。それまではなかった難しい問題も起こったのです。今まで食べるものは皆で仲良く分け合っていたのですが、「こっちが少ない、あっちが多い」という苦情がでました。教会の中で、けんかが起こるのは、悲しいですね。けんかなんかしている場合ではないはずです。教会が、何よりも一番先にしなくてはならないのは、イエスさまを伝えることです。そこで、使徒たちは、これらのことを聖霊と知恵に満ちた信仰の深い7人の人達を選んでこの人達にしてもらうようにしました。

その一人の人にステファノがいました。選ばれたステファノさんは、さっそくお食事の世話をしたのでしょうか。違うのです。ステファノさんも、イエスさまの福音を伝えるために働きました。きっと、けんかをしていた人達も、「こんなことをしていちゃだめだよ」と反省したのだと思います。ところが、ユダヤ人は気に入りません。彼を捕まえて最高法院、裁判所の席につかせました。さあ、ステファノさんはどうしたのでしょうか。「すみません。もうイエスさまのことは話しません。もう、イエスさまが神さまだなんて、言いません。許してください！」こう言ったのでしょうか。違います。ステファノさんは、すばらしい時が与えら

れたと思って、天使のように顔をキラキラ輝かせて、ユダヤ人の皆がよく知っている旧約聖書の物語を語りました。そして、最後の場面で、きっぱりと言いました。「あなたがたは、神さまから遣わされた預言者を殺し続けました。そして今、預言者たちが預言し続けたあの正しい方であられるイエスさま御自身を殺してしまいました。」

これを聞いていた議員たちは顔を真っ赤にして、歯ざしりをして、怒りました。けれどもステファノは、聖霊に満たされてさらに言いました。「天が開いて、イエスさまが神の右に立っておられるのが見える！」すばらしいですね。この言葉を聞くとともに、人々は耳をふさいでステファノに飛び掛ります。彼らは、「イエスを神さまであると言い続けているのは、神さまを汚すことだ、あの男は殺されなければならない」と考え、それを実行するのです。彼は、この後すぐに、外に引き釣り出されて、石を投げつけられて殺されます。

イエスさまのために殺されることを殉教と言います。イエスさまは、一番最初の殉教者になるステファノを、立ち上がって迎えられるのです。子どもカテキズムに教会の信仰告白の「使徒信条」(「ニカイア信条」)が載っています。そこでは、天に昇られたイエスさまは、父なる神さまの右に「座っておられる」と教会は信仰を告白しています。でも、ここでステファノは、イエスさまが座っておられるのではなく、立ち上がっておられるお姿を見ます。

先生は、テレビで、アメリカの野球場で、すばらしいプレーをした選手に向かって、観客が立ち上がって拍手する場面を見た事があります。また、ダッグアウトのなかで座っていたチームメートは、ホームランを打った先週が戻ってくると、立ち上がって打った選手を迎えます。

イエスさまは、今、勇気と愛をもって、イエスさまのお話を語ったステファノをご覧下さって、とても喜んで、まるで石を投げつけられるステファノを応援しておられるようです。イエスさまは、ただ座って見ていられないのかもしれませんが、あるときには、僕たち私たちのことも、そのように見ておられるのかもしれませんが、立ち上がって、「しっかりしなさい！ わたしが知っているぞ」と仰ってくださるのです。どうしたら、そのことが分かるでしょうか。それは、あのステファノさんのように天を見つめることです。神さまを礼拝することです。そうすると、イエスさまがしっかり見えてくるのです。イエスさまに応援していただいていることが見えてきます。

ステファノさんは、最後にこのような言葉を残

して死にました。「主よ、この罪を彼らに負わせないで下さい」これは、まるでイエスさまの十字架の上での言葉のようです。ステファノさんは、殺す人達を呪って死んだのではないのです。彼らのためにお祈りしながら死んだのです。普通だったら、自分を殺す人を恨んだり、憎んだり、呪いながら死ぬのなら分かります。どうしてステファノさんはそのようにお祈りできたのでしょうか。それは、心のなかに、神さまの愛が溢れ、信仰の喜びと確信が溢れていたからです。自分がやがて復活することも確信していたからだと思います。僕たち私たちがもしも、イエスさまのことを信じていることで馬鹿にされたり、からかわれてしまった時には、頭に来て、仕返しをしたくなるかもしれませんが、やり返したくなるかもしれません。そんなとき、天を見つめましょう。イエスさまが視ていてくださることを信じましょう。そしてイエスさまを信じていること、神さまの子どもとされていることを一番の誇りにして、語り続けましょう。

(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] 使徒言行録7章60節

それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」
と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。

〈ねらい〉

天において神の右に座しておられるイエスさまが、私たちのため常に、お祈りしてくださっていることを喜び感謝します。

〈今日のお話〉

今朝も寒い朝でしたけれど、〇〇ちゃん、〇〇くんが元気に礼拝に来ることができた事を、神さまに感謝します。先週は、どんな事がありましたか？ お友だちと、楽しく遊べましたか？ 先生は、〇〇ちゃんや〇〇くんが、毎日神さまにお祈りをして、神さまに感謝して過ごすことができるようにと、一週間お祈りをしていましたよ。

イエスさまの救いを人々に、喜んで一生懸命に伝えていたステファノさんは、ある日「天が開いて、イエスさまが、神さまの右に立っておられるのが見える」と言いました。天で、神さまの右にすわっておられるイエスさまは、愛する神さまの子どもたちの為に時には立ち上がってお祈りしてくださいます。〇〇ちゃんや〇〇くんが、おともだちに神さまのお話をしようとするとき、い

じめっこ子から、おともだちを守ってあげようとする時（下記の点線枠を参照してください）、イエスさまは立ち上がって、ほくたちわたしたちのために、父なる神さまにお祈りをしてくださっています。神さまが喜んでくださることを、勇気をもってしましょう。

〈暗唱聖句〉フィリピ4：5

「主はすぐ近くにおられます。」

〈賛美〉

「きよいあさあけて」（3番）

日本基督教団出版局『子どもさんびか』より

〈子どもカテキズム〉問26

……今は、御父の右に座して、私たちのために執り成しの祈りをささげていてくださいます。



〈お祈り〉

私たちがお祈りをささげる時、イエスさまもいっしょにお祈りをしてくださってありがとうございます。アーメン。

〈分級の流れ〉

- ①「今日のお話」を導入にして、立ち上がって祈ってくださるイエスさまのお姿を、子どもに伝えましょう。幼稚園や家での生活の中で、悲しかったこと、とても勇気のいったことが最近あったでしょうか？聞いてみましょう。

参考（幼児期の情緒について）

友だちが泣いている時、心配したり、慰めたり、助けてやったりという、共感・同情などの感情は、情緒の発達と社会性の発達とによってもたらされるもので、およそ二歳ごろに芽生え、四歳ごろまでに発達が見られるものである。（『乳幼児の発達心理』より）

悲しい時、勇気が必要な時……特にイエスさまは、私たちのために祈ってくださることに感謝します

- ②教会のために、この日の分級で幼稚科のお友だちができること（お手伝い）考えてみましょう。

例：礼拝が始まる前に玄関まわりの掃き掃除をする。お年寄りの聖書かばんを玄関から礼拝堂まで運ぶ。

受付で週報を手渡す。自分より小さい子の面倒をみる。小さなガラス瓶に花を生けて、各場所に飾る。

絵本やおもちゃ箱の修理をする……etc

教会の一員であることの自覚と、役にたつことの喜びを体験します。

イエスさまの助けと共に……



〈分級教師へのワンポイント・アドバイス〉

あなたにとって、分級とは何ですか。分級の目標をどこにおいておられますか。先号の「本誌の基本方針」にも記したことでありますが、私どもは、不正確な表現で恐縮ですが、分級を「オマケ」のようなものと申しました。しかし、そこで同時に、子どもたちはそのオマケに目がないとも申しました。多くの日曜学校教師には、一つの強迫観念があるように思われます。「分級準備の時間が足りない。」「どのようにして30分の時間を使おうか。」「一つ一つのクラスの状況がありますから、すべてに当てはまる分級展開例なるものはあり得ないように思います。大切なことは、分級を、学校の教室（クラス）イメージつまり、知識の教授、伝授の場というイメージから解放することではないでしょうか。それが奉仕を「苦しい」ものとしているのではないかと考えています。日曜学校は、教師自身がわくわくし、楽しめなくては魅力あるものとはならないのではないのでしょうか。

分級は、子どもと向き合う場、「教会」（魂の看取り、配慮）の現場です。心が通い合うために、質問します。お話（教理）が分かったかという質問は二次、導入ですれば十分です。その子の心を開かせるような「質問」ができればどんなにすばらしいでしょう。

〈ねらい〉

主イエスが今も子どもたちのために祈ってくださることを仰がせ、喜びと感謝をもって生活できるように励ます。

〈子どもカテキズム〉

問26

〈子どもと向き合うために一質問一〉

- ①ステファノさんは、人々から何をされましたか？（最初の質問は、説教を聞いていたら誰でも分かるような質問をする。どんなことでも構わない。答えられたら、よく褒めること）
- ②先週、悲しかったことや苦しかったことがありましたか？ だれかに馬鹿にされたり、意地悪されたりしたことはありましたか？ ⇒ もしも、子どもが具体例を話してくれたら、必ず、その日の内に、ゆっくりと相談にのって上げてください。その時こそ、担任教師の出番です。
- ③最近、けんかして仲が悪くなっているお友だちがいれば、どうすれば解決できるか話し合いましたか。
- ④ステファノさんは神さまに何をお祈りしましたか？
- ⑤イエスさまを信じているあなたが悲しんでいるとき、意地悪されているとき、苦しんでいる時イエスさまはどんなふうにも思っておられる？ ⇒ 「イエスさまは、あなたをいつも見守っておられます。お祈りしておられます」（これが伝われば十分！）

〈あそび〉

「（自分に戻ってくる……）ブーメラン遊び」

（図版は106ページに掲載しています。）

〈お祈り〉

天のお父さま、僕たち私たちも、つらいときがあります。そんなとき、イエスさまが見てくださることを忘れないように助けてください。アーメン。

〈ねらい〉

執事的働きを担うべく選ばれたステファノが、素晴らしい説教をし、その結果人々の怒りを受けて石で打たれ、最初の殉教者となった。自分を殺そうとする人々を前にしても、ひるまず福音を語り、その敵のために祈りつつ死んでいったステファノの強さはどこからくるのか。福音のため死をも恐れない者へと変えてくださる主イエスの力、素晴らしいことを確認し、私たちがまた、しっかりと主イエスを見上げることができるよう励ましたい。

〈考えてみよう〉

○ステファノと、彼を殺そうとする人々を対比させ、その違いがどこからくるのか考えよう。(表にして子どもたちに答えを書かせるのもよい。)

問いの具体例

①何をしたか

人々……全く違法に、ステファノを石で打ち殺した。

ステ……自分を殺そうとする人々のために祈った。

②その時の心の状態は？

人々……怒りで心がいっぱいになっている。

ステ……神様の愛で満たされている。

③何故そうしたのか(そうなったのか。)

人々……人に目を向けていた。

ステ……神様をしっかりと見つめていた。

問	ステファノ	人々
①		
②		
③		

○ステファノの祈り「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」から、何を思いだしますか。

⇒主イエスの十字架上の祈り

○ステファノは、何故このような祈りをささげながら死んでいくことができたのだと思いますか。

⇒主を見上げ、主に全てを委ねていた。復活ののぞみを確信していた。など

〈やってみよう〉

敵とまでいなくても、苦手な人や好きになれない人はいるものである。(いじめにあっている子もいるかも知れない。) そういう相手のために祈ることはとても難しいことだが、自分の力で何とかしようと思うのではなく、主によって力を与えられ、祈ることができるように導きたい。そして、主イエスの福音を語る力が与えられるよう励ましたい。できれば、具体的に名前をあげ、共に祈ろう。

〈お祈り〉

神さま、私たちも、いつもしっかりとイエス様を見上げ、イエス様から愛と力をいただいて敵のためにも祈り、更に福音を伝えていくことができるようにしてください。

ねらい

- 主イエスの聖霊に満たされた人間はイエスと同じような行為を為しうることを学ぶ。

展開例

- 復活の主の聖霊に満たされたステファノは「神の右に立っておられるイエスが見える」と言えることができた。「主イエスよ、私の霊をお受けください」「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」という祈りはイエスの十字架上

の祈りと同じ。キリストの模倣者となっている。

話し合ってみよう!

- 今日の聖書の箇所とルカ23:44、46を比較して類似点を話し合ってみよう。

祈り

主イエスと同じ行動をするキリスト者となるように成長させてください。

○暗唱聖句○

使徒7:60

○祈りの課題○

聖書日課

月	使徒6章	1～7節
火	使徒6章	8～15節
水	使徒7章	1～8節
木	使徒7章	9～22節
金	使徒7章	23～29節
土	使徒7章	30～53節

☆三日記☆

テキスト ヨハネによる福音書6章1～15節

(1) 迫害によって散らされて

ステファノ殺害から始まったエルサレム教会に対する迫害によって、ある人々は教会から散らされ難を逃れるためサマリアに逃げていきました。教会が散らされた事実は、負の要素に見えますが、迫害によって散らされた人々（特にフィリポ）によってサマリアに福音が伝えられて行きました。そして、ついに異邦人へ福音が伝えられるに至ったのが、このエチオピアの高官の出来事なのです。

(2) フィリポへの命令—宣教の主権者である主—

主の天使はサマリアにいるフィリポに「南に向かい、エルサレムからガザに下る」砂漠の道に行くように命じています。迫害のさなかであっても、主の宣教の御業は止むことなく、フィリポを新しい宣教へと導こうと、行くべき所を命じているのです。フィリポはその命令に全く従順であり「すぐ出かけていった」のです。このところで、迫害が起こってもなおキリスト者を用いて前進させられる宣教の事実の中に、主こそが福音宣教の主権者であることが明らかにされます。

(3) フィリポ、エチオピアの高官と出会う

主が命じるままに出かけていったフィリポは、その道でエチオピアの高官と出会います。この出会いも、異邦人宣教に向かわせる、主の御意志が強く表れています。

彼はエチオピアの女王間だけに仕える宦官でした。彼は神を敬う異邦人と呼ばれる人々の一人であったようです。しかし、おそらく彼は割礼不適格者であって、ユダヤ教に改宗することができなかったのではないかと推測されます。

その彼が預言者の書を朗読しているのを聞いて、フィリポはその書の解説をし、主イエス・キリストの福音を伝えるのです。このようにしてエチオピアの高官は福音に触れるのですが、彼に福音が伝えられたのは主イエスの霊による、絶えざる促しによるものだったのです。

(4) エチオピアの高官洗礼を受ける

福音を聞いた宦官は「ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるでしょうか。」と問うています。主イエス・キリストの福音は難をも拒絶しないことを彼は理解し、またキリストへの信仰と洗礼が一つになっていることを知っていたのです。洗礼を妨げるものは不信仰だけです。主に対する不信仰が見出せなければ、主に対して絶対的な信頼をしている宦官の洗礼を妨げるものは何もなかったのです。彼がこれほどまでに理解ができ、洗礼に導かれたのは、この宦官を主の霊が捕らえていたからなのです。主が彼を選び出し、主の霊によって真の信仰が与えられたのです。

(5) 喜びに満たされて

主の福音に触れ救いを受けた宦官はもはやフィリポを必要とはせず、救いの主のみを見つめ喜びに満たされ旅を続けるのです。この喜びは福音に触れ、聖霊に満たされたからです。その福音に触れた喜びは、宦官のような者でも救いに導くキリストの福音によって与えられたものなのです。

福音は主が主導権を握って下さり、まるで希望のないような状況にあっても確実に前進させ、福音に触れた人々を喜びに満たす力を持っているのです。
(春名義行)

テキスト 使徒言行録8章26～40節

(単元のねらい)

前回は、執事的職務のための選出されなかったステファノが、伝道者として大きな働きをしたことを見た。我々の教会において、教会の秩序を整え、執事的な奉仕を担うことの重要性は自明のことであろう。しかし、それが何を優先させるためであったのかを見失うことがある。フィリポと宦官の物語は、聖書はどのように読むべきか。伝道する者の基本的姿勢はいかなるものかを確認させられる。子どもたちを、小さな伝道者として見、励まし、訓練することに、ここで取り組みたい。教師自身、伝道者としての自覚を深めたい。なお、『子どもカテキズム』の間69、24を参照のこと。

「走れ、フィリポ」

教会のお仕事をするように選ばれた7人のうちの一人にフィリポさんがいます。ある日のこと、フィリポさんがお祈りしていると、神さまが天使に、「エルサレムからガザに行きなさい。」と言われました。フィリポは、「これは、神さまの命令に違いない」と信じて、すぐに出かけてゆきました。すると、そこに、馬車を走らせながら、大きな声で、聖書を読んでいる人を見つけました。この人は、アフリカのエチオピアのカンダケという女王にお仕えする身分の高い役人でした。はるばるエルサレムの神殿まで、神さまを礼拝するために来て、そして今、礼拝を終えて、馬車を走らせて帰る途中でした。名古屋から、東京に行くよりもっと遠いところを馬車にのって来たのです。皆は、日曜学校が終わったら、今日は何をしますか。この人は、礼拝を終えてから、聖書を読んでいるのです。馬車に揺られ、揺られしながら、気持ちが悪くならなかったかなあと心配してしまうくらいですが、それほど、神さまの御言葉を慕っているのです。

神さまは、このようなエチオピアの役人のことをずっと顧みておられました。ですから、フィリポさんをお遣わしになられたのです。フィリポは、馬車に駆け寄り言いました。「こんにちは、読んでいる聖書のイザヤ書の意味がお分かりになりますか。」役人は、すぐ言いました。「手引きしてくれる人がいなければ分かりません。どうぞ、あ

なたは聖書のことが詳しくですから、ここに座って、教えて下さい」フィリポは、神さまに心から感謝しました。「今、分かりました。神さまはこの人に聖書の事を教えるために私をお遣わしになられたのです。神さま、どうぞこの人を救って下さい。真理に眼を開かせてください。」

読んでいたのは、イザヤ書です。「彼は、羊のように屠殺場に引かれて行った。毛を刈る者の前で黙している小羊のように、口を開かない。」宦官はこの箇所から尋ねました。「イザヤは、だれについて語っているのでしょうか。本人のことですか。それとも他の誰かのことですか。」フィリポは、この箇所からイエスさまの福音を語りました。この時のお話は、僕たち私たちが礼拝式や分級で教えられているお話、福音です。イエスさまは、僕たち私たちの罪を償うため、罪を贖うための羊のように、十字架に死んでくださったこと。三日目に死人の中からお甦りになられたとすることを聞いたのです。そしてこのイエスさまを信じたら、罪が赦されて、神さまの子とされること。信じている人は、教会の洗礼を受けることが必要なことも、教えていただいたのです。つまり、フィリポさんは、先生が今しているように説教したのです。イエスさまを紹介したのです。

僕たち私たちが持っている新約聖書は勿論、旧約聖書も、イエスさまのことが書かれているのです。聖書のお話の主人公はイエスさまなのです。

だから、イエスさまのことが分からなければ、聖書のことが本当はわかりません。逆に、聖書のなかで分からない御言葉があっても平気です。イエスさまのことを正しく信じていれば、大丈夫です。大人の先生のように聖書の深い知識や理解がなくても、イエスさまを信じていれば、罪を赦され、神の子とされるには十分なのです。もしも、皆が聖書を開いて分からない事があるなら、御言葉を聞いても分からない事があつたら、そのときにはいつでも先生に聞いて下さい。

さあ、宦官は、はるばるエルサレム神殿まで礼拝しに行く熱心な人ですが、ついに聖書が教えている救い主、神さまの御子、イエスさまを信じることができました。もう嬉しくて仕方がありません。この人は、エチオピアに帰る前に、フィリボから洗礼を受けました。洗礼を受けたあと、不思議にもうフィリボの姿は見えなくなりました。神さまの言われたお仕事が終わったのです。宦官は、とてもびっくりしたと思います。ゆっくりお礼を言いたかったでしょう。でも、宦官は独りぼっち

ではありません。イエスさまを信じた喜び、救われた喜びに溢れて、イエスさまと一緒にエチオピアに帰ってゆくのです。先生は思います。きっとこの人も、フィリボのように、イエスさまを誰かに紹介するようになったことを、です。決して、黙っていられなかったと思います。

僕たち私たちは、今、馬車に乗っていません。教会の礼拝堂のなかにいます。でも、ここで、聖書が読まれました。僕たち私たちは、イエスさまを信じていますから、愛のイエスさまと一緒にいて下さいます。イエスさまと一緒に家に帰ります。それなら、僕たち私たちも、お友達にイエスさまのことを伝えてあげられないでしょうか。先生のように聖書のお話ができなくても大丈夫です。大切なお友達を、聖書からイエスさまについて教えてくれるこの教会に誘ってあげれば良いのです。フィリボのように、今、あなたの心の中に伝えてあげたいお友だちの顔が浮かんできませんか。浮かんだら、お祈りしましょう。（相馬伸郎）

[今日の暗唱聖句] 使徒言行録8章35節

そこで、フィリビは口を開き、聖書のこの箇所から説きおこして、
イエスについて福音を告げ知らせた。

〈ねらい〉

教会へと導いてくださった神さまに感謝して、お友だちや家族と一緒に教会に来れるようにお祈りし、お誘いできるように励まします。

〈今日のお話〉

今朝も〇〇ちゃん、〇〇くんと、いっしょに礼拝ができてとてもうれしいです。

〇〇ちゃん、〇〇くんは、どうして教会に来るようになったのかな？

〇〇ちゃんは、お母さんといっしょに教会に来ました。〇〇くんは、△△ちゃんに誘われてクリスマスから教会に来ていますね。〇〇くんは、△△ちゃんに、誘ってもらってほんとうによかったね。でもね、〇〇くんが教会に来るずっと前からイエスさまは〇〇くんのことを知っておられました。そして、教会に来ることができるようにお祈りをしてくださっていたのです。

フィリポさんは、一度も会ったことのない、馬車に乗って通りかかった男の人に、聖書のお話を

してあげました。男の人はとても喜んで帰って行きました。私が誘っていただいたように、家族やお友だちを教会にお誘いしましょう。

〈随唱聖句〉 ヨハネー4：7

「たがいに愛し合ひましょう」

〈賛美〉

「うたいましょう」(90番)

日本基督教団出版局『子どもさんびか』

〈子どもカテキズム〉 問4

神さまを愛すること、家族やお友だちを愛することです。

〈お祈り〉

私の大切な家族や、お友だちと一緒に教会に来ることができるよう、みちびいてください。アーメン。

〈分級の流れ〉

- ① 2月は、あまり教会行事のない月かもしれません。分級が、マンネリ化しないよう一回一回のクラスを大切に取り組みましょう。
- ② 「今日のお話」をしながら、一人一人に、誰を教会にお誘いしたいかを聞きます。名まえをあげてお祈りします。
- ③ 「缶馬」で遊びます。(あらかじめ作って用意しておく)

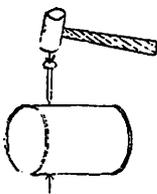


ナイロンロープ

「フィリポさん、馬車に乗る!!」(馬のひずめの音がするかな?)

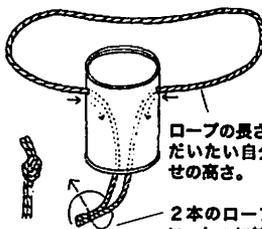
材料/空き缶(スチール缶) 2個ずつ・ナイロンロープ・かなづち・5寸釘

かんの底から3cmくらいのところに、5寸釘で穴をあける。

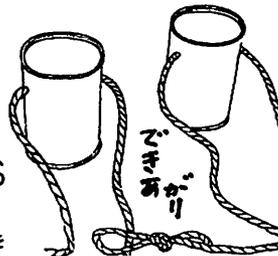


反対側にも同じように穴をあける。

ナイロンロープをはさみで切ってかんの穴に通す。



ロープの長さは、だいたい自分のせの高さ。
2本のロープをいっしょに結ぶ。



足のまん中(土ふまず)にかんをあてる。くつをはいた方が足が痛くない。



★誘いたい家族や友だちにも缶馬を見せてあげよう!

〈分級教師へのワンポイント・アドバイス〉

毎週の分級準備、どのような手順でしておられますか。以下、一つの例として提示いたします。

- ①単元テキストを読んでください。何度か読んでください。
- ②本誌の聖書研究、カテキズム研究（は、1号から8号までを参照のこと）、そして最後に説教展開例をお読みください。
- ③子どもたちのために祈りしてください。子どもたちと主イエスとの関係について思い巡らしてください。
- ④自分が心動かされた恵み（御言葉）を一言で言い表せるようにしてください。
- ⑤それが伝わる分級の姿をイメージしてください。ここで、御自分のクラス運営が具体化します。
- ⑥この教案を参考にしてください。（現実には、②と連動することが多いかもしれませんが。）
- ⑦最後に、このこと一つが伝われば自分自身嬉しい、子どもが慰めを受けることができるというものを一言にして主日を迎えましょう。

〈ねらい〉

教会に来ることができたのは、誰かに誘われたり、連れてきてもらったおかげである。子どもたちこそ日曜学校伝道の担い手であることに気づかせ、友だちを誘わせる。

〈子どもカテキズム〉

問4

〈子どもと向き合うために一質問一〉

- ①エチオピアの人は馬車に乗って何をしていますか？
- ②フィリポさんはエチオピアの役人に何をしてあげましたか？
- ③聖書から誰のことを教えてあげましたか？
- ④あなたはイエスさまのことが好きですか
- ⑤イエスさまは、あなたのお友だちのことをどう思っておられると思いますか？
- ⑥あなたは誰に誘われて教会に来ましたか？
- ⑦あなたは誰かに、日曜学校のことを教えてあげたことがありますか？
- ⑧今、誘いたいと思っている人はいますか？
- ⑨どうしたら、日曜学校に誘えると思いますか。
- ⑩そのために何ができますか ⇒自分でお祈りする。先生にもお祈りしてもらおう。先生に手伝ってもらおう。（車の送迎、お便り……など）

〈あそび〉

「フィリポさん馬車に乗る」

缶馬を作って遊ぼう。（幼稚科を参照のこと）

〈お祈り〉

天のお父さま、僕たち私たちは、イエスさまに導かれて教会に来ることができました。お友だちやお父さんやお母さんが連れてきてくれました。ありがとうございます。僕たち私たちも、お友だちや家族をイエスさまのところに連れて来れますように、愛と勇気を与えてください。アーメン。

〈ねらい〉

ステファノ殺害から始まったエルサレム教会への迫害によって人々は散らされたが、その人々によって福音はサマリヤに伝えられ、更にフィリポによって異邦人伝道の第一歩がなされた。どのような状況にあっても、主を信じ喜びに満たされる人がおこされ、福音が広められていく主の御業に目を留めさせたい。神様はどのような時にも、そしてどのような人にも福音を伝えるよう求めていること、そしてそのために必要な力を与えてくださることを子どもたちに伝え、たとえ小さくとも一人一人にできることがあることに気づかさせたい。

〈考えてみよう〉

○質問を通して理解を深めよう。自由に答えさせてもよいし、穴埋め形式でキーワードを確認してもよい。

☆質問例

・フィリポは何故ガザの荒野に行ったのですか。
⇒□□□□が行けと言われたから。

・フィリポの会ったエチオピア人の宦官とはどのような人でしたか。

⇒エチオピアの□□□□□□の高官で、女王の□□□を管理していた。

・宦官は何をしていましたか。

⇒エルサレムに□□にきて、帰る途中□□を朗読していた。

・フィリポは宦官に何を語りましたか。

⇒□□□□について□□を告げ知らせた。

・宦官は、フィリポの話聞き、どうしましたか。

⇒□□を受け、□□にあふれた。

・迫害という状況の中にあってもなお、福音がますます広められていったのは何故だと思いますか。

⇒福音は主の御業であり、あらゆる時を用いて、主が福音を前進させてくださる。等

・神さまは私たちに何を求めていらっしゃるのでしょうか。

⇒私たち一人一人が主イエスの福音を伝えることを求めていらっしゃる。等

〈やってみよう〉

・教会に誘いたいお友だちの名前をあげてみよう。

・私たちにでもできると言うことを具体的に書き出してみよう。

イースターの子ども集会に誘う

子ども礼拝に誘う

トラクト等をあげる

友だちのために祈る などなど

※できるだけたくさんあげて、実行できるよう励まそう。

〈お祈り〉

神様、私たちが心からイエス様を信じ、イエス様から力をいただいて、イエス様のことを伝えることができるようにしてください。

ねらい

○伝道活動は復活の主イエスの活動であることを知る。

展開例

○弟子フィリポと宦官の出会いは主の天使の媒介による。復活の主ご自身が聖書の手引きをする人を通して信仰を与え洗礼による救いへと導いておられることがわかる。伝道活動とは以上の

形態をとることを学ぼう。

話し合ってみよう！

○聖書を開き理解させてくださる方は復活の主イエスの霊によっていることを話し合ってみよう。

祈り

福音の使者の働き人とさせてください。

○暗唱聖句○

使徒言行録 8 : 35

○祈りの課題○

聖書日課

月	イザヤ53章	1～6節
火	イザヤ53章	7～10節
水	イザヤ53章	11～12節
木	使徒8章	26～31節
金	使徒8章	32～40節
土	ローマ10章	14～17節

☆三二日記☆

テキスト 使徒言行録9章1節～19節

(1) 迫害者サウロ (後のパウロ)

サウロはすでに7章58節、9章2、3節に登場しています。最初はステファノ殺害に賛成しているけれども、直接は手を下さない迫害の傍観者のような人物でした。しかし、次にはキリスト者の家に次々と押し入る迫害者となり、ついには迫害者の中心的存在となった様子が、すでにサウロが現れた箇所から推測することができます。サウロは人に誇ることができるほど熱心なユダヤ人であり、律法に従おうとし、主イエスを信じる人を神様を喜ばそうとの思いで熱心に迫害したのです。

(2) キリストの顕現

そのようなサウロが迫害の手を伸ばそうとダマスコに向かい、もうすぐ目的地に着くというところで、キリスト御自身がサウロに関与なさるので、キリストは天からの光によってサウロに働きかけられたのです。その光は昼間の光よりも遙かに明るい圧倒的な光だったのです。その光をサウロに着いていた人々も見えており、その声も聞いているのです。しかし、その声を聞いて理解出来たのはサウロだけだったのです。主は圧倒的な権威をもって、サウロに語りかけるのです。

彼は主の語りかけを聞き、それが主イエスであることを悟り、主が権威をもって語られたとおりに行動するのです。主はサウロの肉の目を閉じられ、心の目を開かれたのです。

(3) アナニアの派遣

サウロに働きかけられた主はその後、一人の弟子に働きかけます。それは、アナニアという人物です。アナニアは迫害者サウロの所に行けという主の命令に対して、すぐには行動をせず、むしろ

サウロ故に行くことをためらうのです。主のご命令であっても、身の危険を感じる所に行けという命令に理不尽さを感じたのかもしれませんが。それほどにこのサウロが恐ろしい人物であったことをよく語っています。

しかし、アナニアは主のご計画を聞くとすぐに態度を変え、主のご命令に従い直ちにサウロのもとへと出発するのです。

(4) サウロの洗礼

サウロは神様によって違わされたアナニアによって閉じられた肉の目が開かれました。このときアナニアはサウロに「兄弟」と呼びかけているのです。これまで明らかに敵であった者が、今やキリストにあってすでに兄弟となっていたのです。

彼は同時に洗礼を受けました。洗礼をしたということは「主イエスは人になって下さった神様であり、私の救い主である」と告白したということです。彼はこの瞬間から迫害していた者から迫害される者へと明らかに変わったのです。

(5) サウロの回心と神様の介入

サウロの回心の出来事は一つ一つの全てのことに、神様の明らかな介入があります。そして、全て神様のご計画に従って、この出来事がなっていたことを知るすることができます。その介入は全ての人にもなされ、神様に選ばれた人は神様の介入によって回心へと導かれるのです。

また、福音の前進のために神様は神様にも私たちにも敵としか見えないような者をも回心に導き、そのご計画に従って十分に用いて下さる事実が、このところに現れています。 (春名義行)

テキスト 使徒言行録9章1～19節

(単元のねらい)

使徒パウロの回心物語は、使徒言行録の重要なモチーフで、三度も繰り返し記される。迫害つまり、御自身に敵対するサウロを御自身の証人、使徒として用いられる神の大きな救いの御業を語る。キリストに敵対していることこそが、逆さまな生き方であり、盲目の状態であることを語る。さらに、サウロの回心に、アナニアというキリスト者が用いられる。神は御自身の御業のために、キリスト者の服従、奉仕を用いられるのである。なお、『子どもカテキズム』問21を参照のこと。

「逆立ち歩きは止めだ、サウロ」

イエスさまの教会は、使徒たちはもちろん、ステファノさんや、フィリポさん、イエスさまを信じるキリスト者が行く先々でイエスさまのすばらしい福音を語りましたから、キリスト者の数が増えて行きました。しかし、それを苦々しく思っていたのは、ユダヤ人です。その中に、サウロという大変優秀な人がいました。サウロは、心から聖書の神さまを信じていました。けれども、あのエチオピアの宦官のように、聖書がもっとも大切な事として教えている真の神さまであって真の人となられたイエスさまのことを認めませんでした。ですから、本当は、神さまの事が分かっています。そんなサウロでしたから、「イエスさまが神さまだ、聖書が約束していた救い主だ」と言い広めているキリスト者などは、神さまの敵、神さまを冒瀆する悪者だと信じて疑いませんでした。ですからパウロは、「そんなやつらは、男であろうが女であろうが、捕まえて、裁判にかけて殺してしまわなければならない」こう固く、心に決めていました。

いつものように一生懸命、キリスト者を捕らえるためにダマスコという町に馬を走らせていたある日のこと。突然、天からの光、神さまの栄光が彼を照らしました。サウロはびっくりして倒れてしまいました。すると、光の中から、「サウル、サウル、なぜ、私を迫害するのか」とイエスさまが声を掛けられました。サウロは、どれほど驚いたことでしょうか。声を震わせて、「主よ、あなた

はどなたですか。」と聞いたのです。サウロは、これまで、主、つまり神さまのために、一生懸命はたらいていたつもりです。決して、自分がしていることは間違いではないと自身満々だったのです。だからこそ、辱ねずにおれないのです。イエスさまは、お答えなります。「わたしはあなたが迫害しているイエスである。」

イエスさまは、サウロさんに、「何故、わたしを信じる者たちを捕らえて殺そうとするのか、教会を壊そうとするのか」と仰いませでした。「何故、わたしを迫害するのか」と仰いました。イエスさまは、イエスさまを信じている僕たち私たちがまるでイエスさま御自身のようにお考えになっておられるのです。だから、ステファノが石を投げつけられるときに、立ち上がったのです。誰でも、自分のほっぺたをつねったら、痛いでしょう。でも、お友達のお友だちをつねって、「痛い!」と感じるお友だちはいないと思います。イエスさまは、僕たち私たちが、イエスさまのために苦しんでいると、痛いと思われるのです。

さて、サウロは、やっとの思いで立ち上がると、自分の目が見えないことに気がつきました。このイエスさまと出会ったことがあまりにも驚くようなことでしたから、サウロは食べたり飲んだりする事もできませんでした。そして、これまで、自分が信じてきたこと、行ってきたことを思い起こしながら過ごしました。

そんな時、神さまは、パウロが捕らえて殺そう

としていたダマスコにいるアナニアというキリスト者に声をかけられます。なんと、あの有名なサウロが治まっている家に行きなさいというのです。しかも、サウロの眼を開くために祈りしてあげなさい、と言うのです。アナニアは、言いました。「主よ。わたしはその人がどんなに酷い事をしてきたか知っています。わたし違を捕まえて殺そうとしているのです。」アナニアは、信じられなかったし、そんな男のところに行くのが嫌だったからです。けれども神さまは、大切なお仕事をアナニアさんにお任せになられます。もちろん、イエスさまは、サウロの眼を開く事など簡単です。けれども、イエスさまは、アナニア自身に、心の底から神さまを信じる人になって欲しいし、そうしてくれると信じておられるから、こうお命じになったのです。そしてサウロ自身も、殺そうとしていたアナニアさんに助けをもらうことによって、イエスさまの弟子たちを心から愛し、すぐに彼らの仲間になれるようにしてあげたいのです。

アナニアさんは、従いました。そして、サウロ

のところに行って、一部始終を話しました。すると、たちまち、目からうろこのようなものが落ちて、見えるようになったのです。今まで、サウロさんは目が見える、神さまのことが良く分かっている、自分こそ、正しいことをしていると信じていましたが、今はっきりと、一番大切なことに対して、本当は目が見えていなかったことがよく分かりました。そして、イエスさまこそ、真の神さままで、聖書で約束されていた救い主だと分かったのです。今までは、ひっくり返って生きていたのですが、イエスさまを信じる事によって、正しく立って生きられるようになったのです。

誰でも、もちろん先生も、イエスさまを信じる前は、自分こそ正しい、自分が中心と考えて生きていました。それは、神さまから見れば、ひっくり返っているような生き方です。でも、今は、イエスさまが主、中心、真理だと信じて、立ち上がって生き始めているのです。今、イエスさまを礼拝している僕たち私たちは、人間らしく生きているのです。
(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] テモテへの手紙一 1章15節

「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた」という言葉は真実であり、
そのまま受け入れるに値します。わたしは、その罪人の中で最たる者です。

〈ねらい〉

神さまを礼拝することは、神さまの方を向いてしっかり歩むことです。毎週礼拝をささげることができる恵みをよろこび感謝して、日々家庭でも神さまに、お祈りができるよう励まします。

〈今日のお話〉

〇〇ちゃんも〇〇くんも、幼稚園の運動会でかけこをしたことがあるよね。よーいドン！で走りだして先生が旗を持って待っていてくれるところを目指して走ります。反対の方向には走りません。私たちも、イエスさまが待っていてくださるゴールを目指して走ります。毎週、礼拝をささげるのは、イエスさまを目指して走っているからです。ひとりぼっちで、走りません。教会のみんなと手をつないで走ります。

今日のお話に出てきたパウロさんは、神さまを信じて救われる前は、イエスさまとは、反対の方向に走っていました。イエスさまをととも悲しませることでしたが、イエスさまはそんなパウロさんを愛して、救って下さいました。それから、

パウロさんもイエスさまを目指していっしょうけんめい走りました。

神さまに愛されて造っていただいた私たちは、神さまに向かって、ひまわりの花のように大きくなることができますように。

〈暗唱聖句〉 エペソ 4：15

「……キリストに向かって成長していきます。」

〈賛美〉

「イエスさまはわたしの」(73番)

日本基督教団出版局『子どもさんびか』より

〈子どもカテキズム〉 問34・35

……キリストの体なる教会と共に歩みます。

……天の国を目指して、歌いつつ歩みます。

〈お祈り〉

神さまを信じる心を与えてくださってありがとうございます。アーメン。

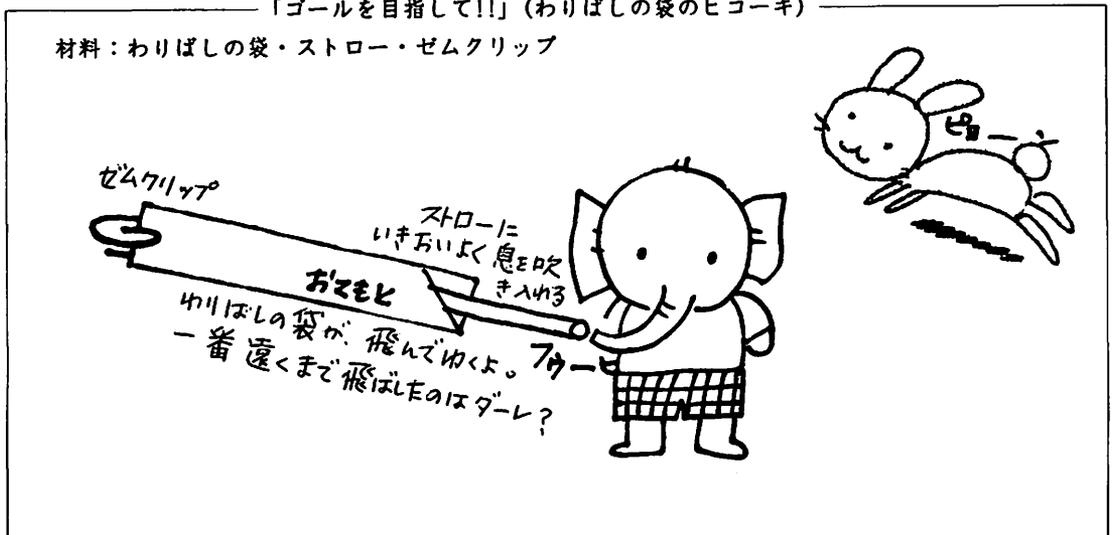
〈分級の流れ〉

①幼稚園などの運動会を思い出しましょう。ゴールを目指して走ることの喜びを伝えます。

②工作をしよう

「ゴールを目指して!!」(わりばしの袋のヒコーキ)

材料：わりばしの袋・ストロー・ゼムクリップ



〈分級教師へのワンポイント・アドバイス〉

福音は喜びです。驚きです。常に語る者に、確信が求められます。この内実のないところで、福音伝道は結実しません。だからこそ、伝道は、キリストの救いに与った者、洗礼を受領した者が担うことができるのです。しかし、現実には、一週間さまざまな誘惑、戦いを経て、勝利感をもって日曜学校に臨める日もあれば、子どもの前に立つことすら差し控えたいくなるようなときもあるでしょう。しかし、子どもたちはそのような先生の状況にかかわらず、御言葉を、生けるキリストを求めています。明日の一回の日曜学校は、真剣勝負です。明日、初めて来る子がいるかもしれません。一週間に一回の営みのために、すべてを整えましょう。

教師は自らの「霊性」を常に保てるように、祈りと御言葉の生活を自らに課します。キリスト者は、自分のために霊性を整えるのは勿論ですが、もっとも大切なことは、隣人のために霊性を高めることではないでしょうか。どうぞ、自分のために、また、子どものために名前を挙げ、祈ってください。特に、地域の子らのために祈ってあげられるのは、担任のあなただけかもしれません。あなたの教会の教師会は、祈りの場となっていますか。

〈ねらい〉

サウロは、外的れの生き方をしていました。イエスさまは、そんなサウロを憐れんでくださり、人生の目的にかなって生きる者につくりかえられました。人生の目的、目指すべき方向、つまり神礼拝へと導き、励ます。

〈子どもカテキズム〉

問1、34、35

〈子どもと向き合うために一質問一〉

- ①サウロさんは何のためにダマスコの町に行こうとしたのですか？
- ②イエスさまは、サウロさんに何と言いましたか？
- ③お話のなかで、イエスさまは僕たち私たちが苦しい目にあっているとどんなお気持ちになられたのですか？ ⇒御自分の体の痛みとして。
- ④先週、あなたもイエスさまに悲しまれることをしましたか？
- ⑤イエスさまの光を浴びたサウロはどうになりましたか？ ⇒悪や敵の力より強い神の愛の力を伝える。
- ⑥サウロの目が開くために誰が働きましたか、あなたはアナニアになりたいですか？
- ⑦今日、あなたは礼拝式で、イエスさまの光を浴びましたか？ ⇒教師は、毎週の礼拝式で（特に御言葉の朗読と説教において）イエスさまが臨在してくださり、命の光を照らしてくださっていることを信じさせたい。

〈あそび〉

「直線通り」（使徒言行録第9章11節）

目隠しをして、2～3本立てたペットボトルを倒さないようにスタートラインからゴールラインまで歩きます。

〈お祈り〉

天のお父さま、わたしは、イエスさまを信じていますが、ときどき神さまのことを忘れてしまいます。お赦しください。そんなとき、聖霊なる神さま、御言葉を思い出させてください。お祈りする心をつくってください。アーメン。

〈目標〉

サウロは、ダマスコ途中で主イエスに出会い、主イエスに捕らえられ、迫害者から伝道者へと、全く逆の通を歩みだした。主イエスに救われた喜びを、彼は後の書簡の中で、実に生き生きと告白し、主イエスを信じないことのむなしさを、大胆にはっきりと語り続けた。この事実を子供たちと共に、違う聖書箇所からさらに理解を深めたい。聖書は聖書で解釈し、聖書は聖書で理解を深める習慣を、子供たちに教えながら、自ら確認し、実践したい。

〈展開例〉

1. キリスト教の迫害者だったサウロは、ダマスコに行く途中イエス様に捕らえられ、180度方向転換して、イエス様を宣べ伝える伝道者に、変えられました。次の聖句はその何十年も後に、パウロが、フィリピの人々に宛てた手紙の一文ですが、この中に、イエス様に捕らえられ、救われた喜びが、生き生きと描かれています。この聖句を味わいながら、その次の文章の()内に入る言葉を、a～fの中から選んでください。(何度も同じ言葉が入るカッコもあります。使わない言葉も入っています)

「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさ

に、今では他の一切を損失とみえています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくとみなしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。」

(フィリピの信徒への手紙3章5～9a節)

サウロは、熱心な()派のエリートでした。正義感が強く、自分の信じていること以外、絶対間違っていると確信し、()にかけられて殺された()が、わたしたちの救い主だと言っている、()のお弟子さんを捕らえては、牢屋にいました。しかし()に行く途中、()に捕らえられ、自分のやってきたことが、間違っていたことを教えられました。そしてサウロは全く逆の通を歩み始めました。サウロは()にかかって死んでくださった()こそ、わたしたちの救い主であることを、力強く語り続けたのです。

この事実から、わたしたちは、聖書の中心は()であり、しかも()にかかって死んでくださった()こそ聖書の中心であることを、教えられます。たとえいくら聖書を研究しても、聖書を暗記していても、()を信じて()とともに歩まなければ、無意味なのです。

- a. エルサレム b. ファリサイ c. 十字架
d. エジプト e. イエス様 f. ダマスコ

2. サウロは、テモテに宛てた手紙の中で、自分のことを「罪人の頭」(口語訳)と言っています(テモテ1章15節)……。では、わたしたちは、いったい何者でしょうか？ 聖書を読みながら、みんなで話し合ひましょう。

ねらい

○180度の回心の意味を学ぶ。

展開例

○三日間目が見えなくなり、暗闇の中での深い反省(復活のイエスとの出会いに基づく悔い改め)を通してこれまでの歩みを回れ右して全く反対の歩みに転じたサウロ。それは迫害者サウロから伝道者パウロの劇的誕生の物語である。ここに記されている「目からうろこ」という言い方はここから始まっている。

話し合ってみよう!

○「目からうろこ」の格言の意味を話し合ってみよう。また、ステファノの殉教を目撃していたサウロは単なる傍観者であったのであろうか。それとも、忘れない出来事であったのであろうか。

祈り

回心の出来事を忘れることなく、ますますその方向に歩ませてください。

○暗唱聖句○

テモテへの手紙一：15

○祈りの課題○

聖書日課

- 月 使徒22章 1～5節
- 火 使徒22章 6～11節
- 水 使徒22章 12～16節
- 木 使徒22章 17～21節
- 金 ガラテヤ1章 11～17節
- 土 ガラテヤ1章 18～24節

☆三日記☆

テキスト 使徒言行録13章1節～12節

(1) 教会による宣教への派遣

パウロは神様によって聖餐の交わりの内に入れられ、同時に福音宣教へと召されました。しかし、パウロのこのところまでの宣教は、主の飯に従った全く個人的な業でした。また、パウロの宣教に限らず他の人々の宣教も個人的な業でした。

しかし、この13章から始まる宣教旅行はシリアのアンティオキア教会の指導者たちによって手を置かれ、祈られて派遣されていった宣教の業だったのです。つまり、教会が正規に派遣した組織的な宣教であったといえるものでした。

しかし、この働きは教会や教会の指導者によって按手を受けた宣教者たちに主導権があるのではなく、聖霊なる神様が主導権をとって働かれる主のお働きなのです。それ故にパウロもバルナバも、教会によって選ばれ派遣されたのではなく、それに先だってキリストによって選び出され、キリストの霊によって送り出されたのです。福音宣教は人間の業が目され、そこに終始されがちですが、その宣教の業に神様が関与なさっておられることを決して見落としてはならないのです。

(2) キプロス島での宣教

パウロとバルナバはこうして教会によって送り出され、宣教へと出発します。福音が初めて海を渡っていくことによって明らかにされる宣教の新しい段階がここから始まります。キプロス島へはサラミスという町の港から入ったのです。彼らの最初の宣教は、サラミスの市場や、街角でなされたのではなく、ユダヤ教の会堂にまず入って福音を語ることによってなされました。福音はまずユダヤ人に語られ、その後異邦偉人へ嫁げ知らされていくのです。

さらに彼らは陸路を通して福音を告げ知らせながら、パフォスへと到達するのです。

(3) 地方総督の回心

パフォスはキプロスにおけるローマの行政所在地でそこには地方総督の官邸があった所でした。そこでパウロはその地方総督に招かれ、彼に伝道をする機会を得ました。

しかし、総督お抱えの魔術師で総督より庇護を受けていたバルイエス（エルマ）の妨害に遭います。おそらく、パウロたちが来ることで不利益を被ることを恐れていたのでしょう。自らの利益のために主に対して挑戦する結果となったのです。

その結果、彼は「悪魔の子、全ての正義の敵」と言われ、主のまっすぐな道をゆがめる者と断罪されるのです。神様によって立てられた真の預言者が偽預言者に対して手厳しい言葉を発するように、パウロは主の権威によって神様の敵に対して手厳しく断罪する言葉が投げかけられるのです。

その罪によりバルイエスはしばらくの間光を見ることができなくなるのです。自らの欲のためにバルイエスは真の光も、現実の光も失ってしまったのです。

その出来事を見ていた、地方総督セルギウス・パウルスは、主を信じたと記されています。しかし、パウロのなした不思議な業によって心動かされたのではなく、力強い主の教えに驚き、信仰を持ったのです。つまり、彼は御言を聴いて信じたのです。

宣教は選ばれた人たちに福音の御言が有効に働くようにされ、前進させられる神様の御業なのです。
(春名義行)

テキスト 使徒言行録13章1～12節

〔単元のねらい〕

パウロの第一次伝道旅行の始まりを学ぶ。それは、礼拝を捧げているとき、聖霊の言葉を聞いて始まった。それはまた、預言を成就させるためであった。子どもたちも今、礼拝を捧げ、御言葉を聴く。大人だけでなく、子らもキリストの証人とされている。カテキズムの言葉は伝道の言葉を与えるが、カテキズム教育即、伝道への派遣を促すものではない。ここに、我々の教育の課題があろう。子らに世界大に働く神の御業を仰がせ、伝道への励ましを与えたい。日曜学校は伝道の前線であることを説教者、教師は常に意識したい。なお、『子どもカテキズム』問79、80、81、9を参照のこと。

「パウロ、海を渡れ」

「最初の教会は、エルサレムから始まりました。最初のキリスト者は、ユダヤ人でした。けれども、イエスさまの教会は、エルサレムという町、ユダヤ人から始まって、今では、僕たち私たちの日本にまで広がりました。どうしてでしょうか。海を渡って、イエスさまの福音を伝道して下さった人達がいたからです。

イエスさまは、あのパウロさんにご計画をお持ちでした。ユダヤ人ではなく、異邦人にもイエスさまの福音を宣べ伝えさせるといふのです。今、いよいよ、その御計画が実行に移されようとしています。アンティオキアの教会で、僕たち私たちと同じように、礼拝を捧げていた時のことです。説教する人が、聖書から語りました。聴いていた人達は、「バルナバとサウロを、伝道のために出発させなさい。」と言う、聖霊なる神さまからの言葉として聴き取ったのです。そこで、アンティオキア教会の人達は、断食して、心を合わせて、二人の上に手を置いてお祈りしました。そして、教会から送り出されて、出発したのです。それは、聖霊なる神さまによって送り出されたということの意味しています。

二人はキプロスという島に向かって船に乗り込みました。キプロスの島にも、既に、聖書を教えるユダヤ教の会堂がありました。二人は、キプロスの島にある会堂を探して歩きながら、そこで、聖書からイエスさまのことを語りました。

パフォスというところに来た時、ユダヤ人の魔術師、バルイエスという偽預言者と出会いました。この人は、ローマ帝国から派遣された地方総督、その名をセルギウス・パウルスという、キプロスで一番偉い人と仲良くしていました。総督は、パウロとバルナバの語る福音を聞きたいと思いました。ところが、それを聞きつけたバルイエスは、何とかして、総督をイエスへの信仰から遠ざけようとししました。

その時、パウロさんは怖い顔をして魔術師をにらみつけて、言いました。「お前は、真の神さまの教え、主イエスさまの福音を曲げる者だ。そのようなお前は、神さまが許してくださる時まで、目が見えなくなってしまう。」するとどうでしょう。たちまち、魔術師の目が見えなくなっていました。それを目の当たりにした総督は、びっくりしてしまいました。そして、ゆっくりとパウロさんとバルナバさんからイエスさまのことを聴きました。総督は、魔術師が目が見えなくなってしまったことに驚くより、イエスさまの素晴らしさのほうにもっと驚きました。そして、イエスさまを信じてキリスト者になったのです。こうして、アンティオキアの教会のみんながお祈りして送り出した結果、すぐにすばらしい神さまの御業が起こって、イエスさまの福音はキプロスの島にも広げられてゆきました。

さて、僕たち私たちは、今、礼拝式のなかで、

イエスさまの福音がどんどん広がって行く有様を学んでいます。この日本にも、もう、450年も前に、大勢の宣教師が来て、数え切れないほど多くの日本人がイエスさまを信じました。また、僕たち私たちの教会は、150年以上前に、日本で一番最初に福音主義教会、プロテスタント教会と呼ばれている教会として誕生した教会と繋がっています。海を越えて日本にイエスさまの福音を伝えてくれた人達がいたからです。僕たち私たちは、今、海を越えて伝道できません。でも、近くのお友達には、伝道できるでしょう。伝道するには、確かに勇気が必要です。馬鹿にされたり、からかわれたりすることもあります。でも、伝えたいと思いませんか。イエスさまは僕たち私たちだけではなく、お友達のことでも愛しておられます。そのことを教えてあげて欲しいとイエスさまは、求めておられます。

今日も、主の祈りを祈りました。「御名を崇めさせたまえ、御国を来たらせたまえ、御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」こう祈りまし

た。主の祈りで祈っていることは、イエスさまのお名前を誰かが伝えること、イエスさまこそが本当の唯一の神さまだということを誰かが伝えること、神さまの御心は、地上のすべての人が救われることなのですから、誰かが伝道することが必要となります。あなたは、お友達に伝道したくなりませんか。

最後に、パウロさんたちは魔術師と戦いました。僕たち私たちの周りにも、魔術を使う人がいるかもしれません。占いとか、悪霊払いとか霊媒師とか……。イエスさまのことを信じなくさせるもの、信じることを馬鹿馬鹿しいと考えさせるもの、テレビや映画、漫画や雑誌、様々なものがあります。パウロさんだったら、それらをどんな風に見るでしょうか。きっと、「にらみつける」でしょう。先生には、パウロさんのような特別の力は与えられていません。けれども、イエスさまのお名前には力があります。イエスさまのお名前を呼ぶなら、負けることはありません。イエスさまのお名前を呼んで、お祈りしましょう。(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] マタイによる福音書28章18節～19節前半

イエスは、近寄って来て、言われた。「わたしは天と地のいっさいの権能を授かっている。
だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」。

〈ねらい〉

命がけで伝道した伝道者の姿にふれ、世界中の教会の伝道のためにお祈りしましょう。

〈今日のお話〉

先週から、パウロさんのお話が始まりました！パウロさんは熱心に、イエスさまのことを人々にお話しました。そして、海を越えて他の国にも、伝道するようになりました。ガリラヤの湖とはちがって、海に船を出すことは危険がいっぱいです。波にのまれて死んでしまうかもしれません。サメに食べられてしまうかもしれません。嵐になったら、あっというまに船は海に投げ出されてしまいます。しかし、パウロさんたちは、イエスさまの救いを伝えることにいっしょうけんめいでしたから、キプロスという島を目指して船の旅に出ました。わたしたちが住んでいる日本の国も、海に浮かぶ島国です。ずーと昔に、とてもとても遠い国から船に乗って、イエスさまのお話をするため

にたくさんの危険とたたかって伝道に来てくれた人々がいました。ですから、わたしたちの国にも教会ができました。とても、うれしい事ですね。

〈暗唱聖句〉 マタイ 28 : 20

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

〈賛美〉

「大きな船にのって」(42番)

いのちのことば社『ブレイズワールド』より

〈子どもカテキズム〉 問81

……私たちがなすべきわざを喜んですることができるようにしてください、ということです。

〈お祈り〉

世界中の教会が、イエスさまの救いを伝えることができますように助けてください。アーメン。

〈分級の流れ〉

- ①今週から、いよいよパウロの伝道旅行が始まります。聖霊の神さまに導かれて、力強く伝道するパウロの熱意が伝わるよう話してゆきます。
- ②工作をしよう

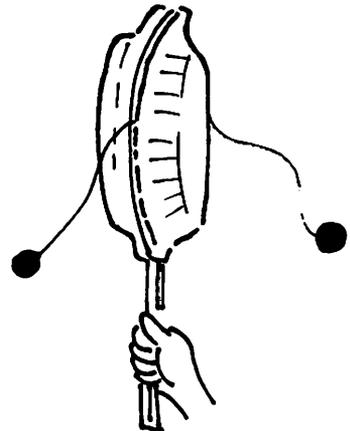
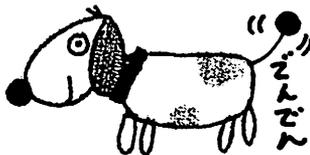
「賛美しながら伝道するパウロ!!」(パウロのでんでん太鼓)

材料：紙皿(発泡スチロールでもOK!)各2枚・タコ糸・ボタン(鈴)

作り方：紙皿の裏に、パウロの絵を描きます。(パウロの絵をコピーして貼ってもOK)

紙皿2枚の間にわりばしをはさむようにしてとめます。

左右にボタンや鈴を糸でとめてデキアガリ。



*~3/21までパウロが登場しますので、教会で保管して使います。

〈分級教師へのワンポイント・アドバイス〉

子どもたちも主イエスの友です。信じている子どもには、主イエスの御心が分かります。使徒パウロはその御心に激しく突き動かされた人です。世界の果てまで、福音を宣べ伝えたいという思いが強い人です。今、その使徒パウロの伝道を学んでいます。子どもたちに、ここでこそ、イエスさまのお働きを担うことができることを伝えてあげたいと思います。

日曜学校にどうやったら子が増えるのでしょうか。幾つもの方策はあると思います。しかし、「ロコミ」にまさる宣伝はないと言われていたように、日曜学校こそは、そのロコミの力に頼るのです。子どもが伝道したいと思うように福音を提示したいのです。日曜学校が楽しい場所、行くべき価値があると子どもに共感するものとなるように励みましょう。しかし、それも、教師だけの努力では成り立ちません。同志であり、主イエスの友らとこの課題を共有しましょう。子どもたちが伝道の主体です。常に、お友だちを誘えるよう励まし続けてください！ お願いします。

〈ねらい〉

ここにこの教会があるのは、誰かが福音を伝道してくれたから。伝道なくして教会（救い）はなかったからであるから、イエスさまを信じる者は誰でも伝道する使命と特権が与えられていることに気づかせる。

〈子どもカテキズム〉

問79、80、81

〈子どもと向き合うために一質問〉

- ①船に乗って旅行したことがありますか？
⇒海の上は怖い。旅行は楽しい。
- ②パウロさんは何故、船に乗ったのですか？
⇒主の日に礼拝をささげていると神の言葉が迫った。
- ③パウロさんたちは何のために船に乗ったのですか？
- ④いつ、どこで神さまは語られましたか？
- ⑤この教会はいつから、どのようにしてここにあるのか知っていますか？ ⇒教会の歴史を短く語ってあげるのも3年生位なら有効。
- ⑥今日のお話を聴いて、あなたもイエスさまのことを伝えたいと思いますか？ ⇒もしも、イエスさまを誰かに伝えたいと思ったなら、それは、聖霊によることを教えたい。喜びたい。励ましたい。

〈あそび〉

「船に乗って」

発泡スチロールのトレイにヨーグルトなどのプラスチックカップを積んだり、竹串の先に折り紙で作った旗を立てて自分の舟を作ります。（「○○ちゃん号」）

持ち帰って今晚のお風呂に浮かべて見よう。世界中にイエスさまのことが伝わる幻を見よう。

〈お祈り〉

天のお父さま、僕たち私たちのためにイエスさまを伝えてくださった人々に感謝します。僕たち私たちも友だちのために、伝道できますように。勇気と愛を与えてください。アーメン。

〈目標〉

使徒言行録は使徒の働きというよりも、聖霊のお働きです。そのためこの書は「聖霊行伝」とも呼ばれてきました。私たちは、昔から現在に至るまで、限りある人間の力に、目をうばわれがちです。しかし、福音の宣教は、聖霊なる神様が、私たち人間を用いて行われる御業です。今も生きて働き続ける主イエスにのみ、栄光が帰せられるべきことを、確認したいと思います。

〈展開例〉

○欠席した教会学校友だちに、教会学校で教わったことを伝えることで、いつの間にか聖書の御言葉を伝えている“ヒロユキ君”の立場になって、みんなで考えてもらう。

ヒロユキ君はとっても元気な6年生。友だちのアオイ君と、毎週仲良く教会学校にやってきます。ところが今日は、一人でトボトボ歩いてきました。アオイ君が熱を出して、今日は教会に来ることが出来なかったからです。2人は教会学校のお話を、楽しみにしていました。ヒロユキ君は、今日来ることができないアオイ君を、後でお見舞いして、その時、今日聞いたお話を聞かせてあげようと思って、先生のお話をメモして、要点をまとめました。次の(1)～(5)は、ヒロユキ君がアオイ君のためにまとめた、今日のお話の要点です。みんなで読んでみてください。(ヒロユキ君は、初めてこういう作業をしたのです。だから少しまとまりがないのは、大目に見てください！ 一生懸命頑張っていました。)

- (1) アンティオキアの教会から世界伝道が始まった。みんなで祈ってサウロとバルナバを選んだ。
- (2) 二人はキプロスという島に渡って、イエス様

を、宣べ伝えた。

- (3) キプロス島の総督は、賢く立派な人だった。ところが、偽物の教えを見破れないどころか、それに頼っていた。これは今も同じだ。迷信にしばられていたり、占いに頼っている人の方が多いと、先生が言っていた。
- (4) でも総督は、心が満たされないまま悩んでいた。これも今と同じだ。私たちのまわりでも、決定的なただ一つだけの真実、聖書の御言葉を知らない人はとても多い。
- (5) 私たちを、救いから引き離そうとするものは多い。今の子どもたちは、みんなと一緒に安心できない、「あいつ普通じゃないよ」と、言われるのを、一番怖がる。だから悪いことも、みんなで作ってれば、それが普通になっていく。私たちは世の中の普通ではなく、聖書の規準で行動するのが、大切。そして勇気。

教会が終わると、さっそくヒロユキ君は、アオイ君の家へ、お見舞いに行きました。アオイ君のお母さんも教会から帰っていて、2人とも大変喜んでくれました。さっそくヒロユキ君は、自分でまとめたお話の要点を見ながら、アオイ君に伝えようとしたのですが、思うように話せません……。アオイ君のお母さんもいらっしゃったので、プレッシャーも正直感じました。ここでみなさんの出番です！ ヒロユキ君を助けて、(1)～(5)を見ながら、アオイ君に今日のお話を伝えてください。

～アオイ君のお母さんからみんなへ～

一人一人話し方は違うけど、聖書のお話を友だちに伝えるとき、必ず神様が助けてくださいます。上手く話すことよりも、神様が用いてくださることを感謝し、みんなで、イエス様を伝え続けましょう。

ねらい

○教会による組織的伝道活動も聖霊の働きによることを学ぶ。

展開例

○最初のアンテオケ教会による組織的伝道の実態が描かれている。正式な手続きで選ばれたバルナバとパウロは按手礼によって教会から派遣されています。しかし、このような教会の手続きは聖霊の指示と導きの結果であることを明らか

にしています。

話し合ってみよう！

○伝道は魔術師との対決に至る霊的戦いを含んでいることを認識しよう。

祈り

教会の正式な手続きが聖霊の働きによっていることを信じていくことができますように。

○暗唱聖句○

マタイ福音書28：18-19

聖書日課

月	使徒13章	1～12節
火	使徒13章	13～25節
水	使徒14章	1～7節
木	使徒14章	8～20節
金	使徒14章	21～26節
土	使徒15章	36～41節

○祈りの課題○

☆ニ二日記☆

テキスト 使徒言行録16章6節～15節

(1) 人の計画と神様の御意志

パウロ自身の計画としては、すでに伝道したアジア州に再び行くことを望んでいたようです。そしておそらくはアジア州の中心地であるエフェソへと向かおうとしたのだと思われます。その中心都市から周辺の町へと宣教を広げていこうという宣教の戦略があったのです。

しかし、神様はパウロの計画を否定されます。神様のご計画はアジア州ではなく、ヨーロッパの人々へ福音を語ることだったのです。このところでどのように聖霊なる神様がパウロに意義を語ったのかは記されていません。使徒に対する直接的な語りかけなのか、私たちも体験する様々な事柄によって道が閉ざされたのかは分かりません。しかし、明らかに宣教の業に対する神様の御意志が記されています。その神様の御意志にパウロは素直に従っていきます。そこには、自分の意志や自我を通せない悲しさもあるはずですが、自分の思いが通せない時ほど、主イエス・キリストは聖霊なる神様をとおして自由に働いて下さるのです。

(2) マケドニア人の幻～マケドニアへ～

このように神様の御意志に従ったパウロたちが前進していくと、さらに次の召しと与えられます。彼はマケドニア人の幻を見ることによって、自分たちがどこに向かって進んでいくべきかを知るのです。自分の計画など自我を通さず、神様の御意志に従うことで、先が見えなくても神様のご計画に従って道が開かれていくのです。全ては主のみ手の内にあり、主がその先も見越して宣教の業をなして下さるのです。

聖霊の働きは人の計画と必ずしも一致しません。しかし、だからといって何もしなくても聖霊なる

神様が働かれるというわけではありません。可能な限り任された働きをなそうとする時、人の思いを遙かに超えて、全てを良く、正しく導いて下さる主が働いて下さるのです。

(3) フィリピで

マケドニアに向けて出発した彼らはマケドニア州の第一区の都市であるフィリピへ到着するのです。パウロはそこでしばらくの間そこに滞在して宣教の業をなすことにしたのです。ここでもパウロの第一の目的はユダヤ人の会堂であり、それを探し、折り場へと出かけて行きます。

そこで、リディアという裕福な女性実業家と出会うのです。彼女は神を崇める人物で合ったことが明らかにされています。福音に対して、まず心を開いたのは彼女だったのです。彼女は神を崇める人物でしたから、その準備された心に主が語られ、主によって彼女は心開かれたのです。彼女が心開かれたことによって彼女の家族も救いへと導かれていくのです。そして、彼女と彼女の家族が洗礼を受けたのです。その彼女は更に宣教者たちを家へと招き彼らをもてなしました。

これはただ「もてなした」と言うことが注目されるのではなく、そこが宣教の拠点、その地域にできたキリスト者の集会にとって最初の住まいとなったのです。その集会から始まったフィリピの教会の姿は喜びと感謝にあふれた、フィリピの信徒への手紙において豊に現れています。

このフィリピの町での宣教の前進は、リディアと宣教者たちがであった時から神様の導きの中にあり、全てが神様の御業であったのです。

この短い箇所には宣教を導かれる聖霊のお働きが生き生きと描かれているのです。（春名義行）

テキスト 使徒言行録16章6～15節

〔単元のねらい〕

宣教がほかならない宣教の主、聖霊によって禁じられる。たとい福音宣教であっても人間的思いで担うことは許されない。聖霊は、彼らの行動を直接的に示されない。しかし、パウロは幻を、宣教への召しとして理解する。パウロは、神の夢を自分の夢に変えて、生きるのである。これこそ、キリスト者の生きる目的であり、子らにこの夢を見せたい。使徒言行録は、ここに来て、超自然的方法によってではなく、今日のキリスト者と同様の方法によって使徒たちが服従する事を明らかにする。『子どもカテキズム』問68、恵みの手段を確認させたい。また、問68を参照のこと。

「神さまの夢を自分の夢にしたパウロ」

パウロさんたちの伝道はとても大変な目、危険な目に遭いながらも、いつもイエスさまが共に働いてくださっているの、教会は信仰を強められ、人数も増えて行きました。

ところが、アジア州で伝道し始めると、聖霊なる神さまからこのように言われました。「あなたがたは、ここでは御言葉を語ってはいけません。」パウロさんたちはどんなに驚いたことでしょう。仕方なく、こんどは、ビティニア州に入ろうとしました。ところが、それも、聖霊なる神さまが許してくださらなかったのです。先生だったら、「神さまの一番大切なお仕事をしているのに……。神さまが伝道しなさいと命じたからここまで来たのに。神さまがそれを邪魔するなんて……。」こんな風に考えてしまいます。ところが、パウロさんたちは、静かに祈りしてこう考えたのです。「そうだ。伝道することは、一番すばらしいことだけれど、自分勝手に決めてはいけないのだ。どんなに神さまに喜ばれることだって、お祈りしてから始めなければいけないのだ。神さまが、私達の主であって、私達は神さまにお仕えしているのだから」それで、トロアスに下って行きました。

その夜のことで、パウロは幻を見ました。こんな幻です。一人のマケドニア人、つまり、今のヨーロッパに住んでいる人のことですが、その人が、お願いするのです。「マケドニア州に渡ってきて、わたしを助けて下さい。」パウロは、こ

の幻を見たとき、一緒にいた伝道の仲間にお話して皆と考えました。「皆、これは、どういう意味だろう、神さまは、直接、マケドニア州に行けどは仰っていないよ。けれども、聖霊なる神さまは、アジア州や、ビティニア州に行くことをお許しにならなかった。それは、マケドニアの人達に福音を伝えるためなのではないかな。」皆は、そのとおりだと考えて、すぐに、決断しました。こうして、イエスさまの福音は、エーゲ海を越えて、マケドニア州、今のヨーロッパに伝わっていったのです。そのはるか後の16世紀になってから、このヨーロッパから日本にイエスさまの福音が伝わってきたのです。

さて、パウロさんたちはどうして、マケドニアに海を越えて渡ったのでしょうか。よく、神さまの御心を考えたからです。僕たち私たちも、自分が何をすべきか、今何をしたら良いのか、考えると良いですね。けれども、僕たち私たちにとって、「考える」ってどんなことでしょうか。それは、神さまから聴くことです。イエスさまを知らない人は、自分が何をしたいのか、すべきか、それを、自分の好き嫌い、自分の得になるか損になるかを考えて決めてしまいます。そうして、神さまの前に罪を犯してしまいます。自分中心の罪です。それなら、どうすれば良いのでしょうか。お祈りすることです。「どうしたら、何をしたら神さまに喜んでいただけますか」とお聴きするの

です。お祈りすることは、神さまの御言葉に聴くことですから、聖書を読むことと、礼拝の説教を聴くことが必要です。それによって、神さまに喜ばれることがなんであるかを教えていただけるのです。

それにもう一つ、パウロさんは自分の見た幻のことを、皆にお話しました。つまり、相談したのです。一人だけで決めないで、イエスさまの弟子たち、教会の仲間と一緒に考えたのです。神さまのお働きは一人だけではありません、誰かと一緒にすることができるし、皆と力を合わせてする事が大切なのです。

最後に、マケドニアの人がパウロに「わたし達を助けて下さい」と言ったのはパウロさんが見た幻であって、実際に叫んでいるものではありません。けれども、イエスさまを信じているパウロさんには、マケドニアの人達がイエスさまの福音を待っていることを信じる事が出来ました。今、僕たち私たちは、どんな幻を見ますか。僕たち私たちの周りにいる人達が「助けて下さい」とお願いして

いる声が聞こえませんか。世界中から、「食べ物が欲しい、平和が欲しい、自由が欲しい」という声がたくさん挙がっています。僕たち私たちに、できることがありますか。ただし、イエスさまのことを伝えて欲しいと言う声は、挙がっていないかもしれません。けれども、本当は、一番必要なのは、イエスさまの福音です。だから、信仰をもって、お友達が「助けて、イエスさまのことを教えて、教会に連れて行って」と言っていないけれども、心の底の底では、本人も気がついていないような叫びを聴きとってあげられたらどんなに神さまに喜ばれることでしょうか。「神さまの夢」は、一人でも多くの人がイエスさまを信じて、神さまの子となることです。それなら、神さまの夢を僕たち私たちの夢にしませんか。するべきです。今、神さまは僕たち私たちにどんな夢をもっておられるでしょうか。その夢を実現するために、何をしたらよいでしょうか。皆で考え、お祈りしませんか。今日だけでなく、ずっとお祈りし続けましょう。
(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] 使徒言行録2章17節

神は言われる。終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。

すると、あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。

〈ねらい〉

新しい朝をお与えくださる神さまに感謝して、日毎に神さまの御心をお祈りもとめることができるように励まします。

〈今日のお話〉

パウロさんたちは、とても危ない目に合いながらも、いろいろな国に出かけて行ってイエスさまのお話をしました。いつもイエスさまが、守ってくださいました。パウロさんたちはいつも、お祈りをしてから出かけていきました。

わたしたちも、毎朝お祈りをしていますか？「神さま、新しい朝をくださってありがとうございます。元気に、起きることができました。今日も幼稚園に行きます。お友だちと仲良く、楽しく遊べるようにしてください。神さまのお話を聞きたいお友だちを教会にさそえるようにしてください。イエスさまのお名まえによってお祈りします。」と、お祈りできたらすばらしいね。

パウロさんたちも、毎朝お祈りしました。「神さま、新しい朝をくださってありがとうございます。

す。神さまのお話を聞きたい人のところへ、行くことができるようにしてください。イエスさまのお名まえによってお祈りします。」と、お祈りして出かけていきました。わたしたちも「今日、どうしたら、何をしたら神さまに喜んでいただけますか？」とお祈りしましょう。

〈暗唱聖句〉詩編5：4

「朝ごとに、わたしの声を聞いてください」

〈賛美〉

「けさもわたしの」(4番)

日本基督教団出版局『子どもさんびか』より

〈子どもカテキズム〉問76

……そのためには、まず神さまからの御言葉に聴く必要があります。信じることは祈ること……

〈お祈り〉

毎朝の神さまのお恵みをありがとうございます。
アーメン。

〈分級の流れ〉

①「けさもわたしの」の賛美を元気よくささげましょう。

♪
けさもわたしのちいさい○○よ
○○○○○○○○ ○○○○○○
神さまきょうも みこころを
おこなう日にしてください
♪

* 1・2節を賛美した後、幼稚科オリジナルの3・4節をみんなで作りましょう。

ちいさい鼻・目・足・手・おなか？ などなど

* 身近な楽器（音の出るものなら何でも）を鳴らしながら、賛美をしてみましょう。

* 2/22に作った、「パウロのでんでん太鼓」を鳴らしながら賛美しましょう。



② 分かりやすく書いた大きめの絵地図とおもちゃの船（画用紙で作っても）を用意し「ここを通過」と見せながら話すと楽しいでしょう。

③ 丸くなってお祈りをささげ、来週に期待をもたせます。

〈分級教師へのワンポイント・アドバイス〉

「この子だれの子」という、ニューヨークのスラム街。殺人、暴行、凶悪事件が毎日起こっている町で2万人の子どもたちを集めている日曜学校の働きを進めている一人のアメリカ人牧師が著された書物があります（いのちのことば社、2003年）。そこにこのような実話が紹介されていました。一人の英語を話せないヒスパニック系の婦人が主イエスの救いにあずかりました。その方も、厳しい状況のなかに置かれている子どもたちのために何とかしたい、主イエスへの奉仕をしたいと願いました。彼女は、短い英語を教えてもらいました。「わたしはあなたを愛してるよ」「イエスさまはあなたを愛しておられるよ」この二つです。この二つの言葉を、子ども一人ひとりを抱きしめながら語るだけなのです。スラム街に生きる、誰からも、親からも愛された経験のない子らには、なかなか「愛」が伝わりません。しかし、毎週毎週、同じことを続けたのです。そして、遂に、一人の少年が「ぼくもあなたのことを愛してるよ」とこたえてくれました。その子はその日の夜、親からの虐待を受けて殺され、通りのゴミ箱に捨てられました。

教師は、何をする人なのか。その原点がここにあるような気がしてならないのです。教案研究に励んでいただきたいのは、「愛」（神と子への）が富ましめられるためなのです。

〈ねらい〉

自分の考え、計画を先に考えるのではなく、お祈りして神さまの御計画を教えてもらう姿勢こそ、信仰に生きること。信じることは祈ること。神さ

まの支配は世界中に及ぶので、伝道する。

〈子どもカテキズム〉

問11、68、76

〈子どもと向き合うために一質問一〉

- ①最近（今日）どんな夢をみましたか
- ②パウロさんはどんな幻を見ましたか。
- ③パウロさんは最初どこに行くつもりでしたか。
- ④どうしてこの幻を見て、予定を変えたのですか
- ⑤どうしてパウロさんたちは海を越えて知らない国に行こうとするのですか。⇒自分の命以上に大切なものをパウロは知っている。イエスさま、福音である。イエスさまの十字架の愛はそれほど大きい。「この愛によって、あなたも愛されている。」これが伝われば十分。

〈あそび〉

「わたしたちを助けて」ゲーム

皆さんも良く知っている「だるまさんがころんだ」（教師が知らないときは子らに聞いてください）の伝承あそび。「だるまさんがころんだ」（10文字）を「わたしたちをたすけて」（10文字）に代えて遊びます。……罪と死の鎖につながっていた友だちを解放するのは誰だ！

〈お祈り〉

天のお父さま、わたしはお祈りしないことがあります。お赦してください。神さまが僕たち私たちに何をして欲しいのかを知って、行えるようにお祈りできるようにしてください。アーメン。

〈ねらい〉

アジア州とビティニア州への伝道旅行を志したパウロであったが、ほかならぬ神様ご自身によってそのことが止められる。かわって、幻を通じてマケドニア州への伝道の道が示され、パウロは従う。「伝道」という神様が最も喜ばれることであったも、まず神様の御旨に従うことが大切であることを学ぶ。

〈展開例〉

設問と一緒に一つずつ解きながら、上記の「ねらい」の理解を目指す。

○設問

- 1) 聖書の巻末の地図と現在の地図を見比べながら、以下の問いに答えてください。
 - a) 今日のお話で、パウロが神様から行くことを禁じられた州が二つありました。どこどこでしょう。
() 州と () 州
 - b) 上の二つの州には現在、一つの国があります。それは何という国でしょう。
()
 - c) パウロが最終的に向かったのは何という州だったでしょうか。
() 州
 - d) 上の州には現在、何という国があるでしょうか。
()
- 2) パウロは助けを求めている人の幻を見て、それが神様の御心であることを確信して、
 - 1) のc) で答えた州に向かいます。それでは、私たちはどのようにして神様の御心を知ることが出来ると思いますか。話し合ってみましょう。
 - 3) 今日のお話は伝道という神様が最も喜ばれることでも、その前に必ずしなければならないことを教えています。それは何でしょうか。話し合ってみましょう。

○設問の説明

- 1) パウロの伝道旅行の道筋を現在の世界地図の中で確認しながら、2000年前になされたことがらをリアルなものとして理解する。
b) の答えは「トルコ共和国」。ローマ帝国の属州アジアと属州ビティニアには現在のトルコ共和国が相当する。また、d) の答えは「マケドニア共和国」。ただし、属州マケドニアの範囲には現在のアルバニア共和国とギリシャ共和国の一部も含まれるので、アルバニアないしはギリシャでも正解とする。
- 2) 現在の私たちには幻という形では神様の御心は示されない。何よりも祈ることによって、神様の御心を求めることの大切さを話し合いの中で考えたい。
- 3) 今日が一番重要なポイントである、あらゆることを行う前に神様の御心を探り求めることの大切さを考える。そしてそのことは祈りによってなされる。そのことから、礼拝だけでなく、教会のあらゆる奉仕は、祈ることから始まることに話しをつなげる。

ねらい

○ピリビ教会の誕生の由来を知る。

展開例

○アジア州でみ言葉を語ることを硬く禁じられた
ということは、聖霊が求めていた方向はヨー
ロッパであったことがわかる。ローマの植民都
市ピリビでリデアという婦人と出会い、その家
族を通して後のピリビ教会が誕生した。聖霊に
よる神の計画・使命が実践されて教会は誕生す

ることがわかる。

話し合ってみよう!

○パウロの伝道旅行の地図を見ながらヨーロッパ
に伝道が広がる様子を確認しよう。

祈り

リデアという女性を通してピリビ教会を誕生さ
せ発展させた主の働きを賛美します。

○暗唱聖句○

使徒言行録2：17

○祈りの課題○

聖書日課

- 月 使徒16章 1～5節
- 火 使徒16章 6～10節
- 水 使徒16章 11～15節
- 木 ピリビ2章 19～30節
- 金 ピリビ4章 1～9節
- 土 ピリビ4章 10～20節

☆三二日記☆

テキスト 使徒言行録20章17～38節

この箇所は第3伝道旅行の最後、パウロがエルサレムへ向かおうとする時に、ミレトスへエフェソの長老を呼び寄せて語られたパウロの告別説教です。その説教の対象はエフェソの長老たち、すなわちキリストの教会であり、その中心は教会の任務とその任務を果たす上での勧めです。パウロはこれを自分自身の姿を語って教え、またその体験から勧めを与えています。

(1) パウロの模範

説教の前半17～27節までには「あなたがたと共にどのように過ごしてきたか」を語っています。それは「アジア州に来た最初の日以来」からお別れをしようとしている「今日」まで一貫して示してきた姿でありました。「自分を全く取るに足りない者」とした謙遜、「涙を流しながら」という愛、「陰謀」による試練と忍耐、要するにその全てが「主にお仕えする」というものでした。

それは、「公衆の面前でも方々の家でも」公私の両面で、「ユダヤ人にもギリシア人にも」誰にでも、神への悔い改めと主イエスへの信仰を証しするというものでした。異邦人教会とユダヤ人教会の交わりを実現するために危険を知りながらエルサレムへ向かうのですが、こうした自分に決められた道を通り、自分の「任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません」と言える熱意をここに注いできたと言っているのです。

最後に「誰の血についても責任がない」と言っているのは「ひるむことなく伝えて」全力を注ぎきったことを言いたいのでしょう。パウロの自分自身の姿で示してきた生き方こそ、異邦人教会に倣ってほしい教会の姿なのです。

(2) パウロからの勧め

そこでパウロから長老たちに勧めたいことは

「あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。」ということなのです。自分自身に気を配る上で大切なことは自分が何者であるのかという自己認識、自己分別です。そこでパウロは群れ全体とあなたがたのことをまず語っているのです。すなわち群れとは「神が御子の血によってご自分のものとなされた神の教会」であり、あなたがたは「聖霊が、……世話をさせるために、群れの監督者に任命なされた」者ですよと言って自己確認させているのです。どちらも「神が」「聖霊が」と言われているように群れも監督者も、要するに“神の”教会なのです。その神が群れを御子に血によってご自分のものとされ、世話するために監督者を任命しているのだと言いたいのです。

その上でパウロ自身の「わたしには分かっている」という牧会経験から注意すべきことが勧めとしてあげられています。第一に「残忍な狼どもが入り込む」危険、また「あなたがた自身の中から」邪説を唱える異端分子が現れる危険を注意しています。これには「教えてきたことを思い起こす」と「目を覚ましている」ことが勧められています。

また第二点に「恵みの言葉」にいつも学ぶように勧められています。これは「あなたがたを造り上げる」成長と「恵みを受け継がせる」という力があると言っています。

そして最後に「自分の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いた」ように、あなたがたも働いて弱い者を助けるよう勧められています。それは何よりも主イエスが「受くるより与える方が幸いである」と言われた言葉に基づいています。

エフェソ教会についてはエフェソの信徒への手紙とヨハネの黙示録2章を参照することができます。

(村手 淳)

テキスト 使徒言行録 20章17節～38節

(単元のねらい)

第3回伝道旅行の帰途、パウロはエフェソ教会の長老に最後の「別れの説教」を行う。ここには、伝道者としての原型となる姿が語られる。ここから、主イエス・キリストとその教会に仕えるキリスト者として歴史に連なる在り方と、教会とキリスト者を真実につくり上げてゆく神の恵みの御言葉への信頼を学び取りたい。

「神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねて」

いままで、パウロさんの伝道の旅を学んできましたね。今朝のお話は、その伝道の旅ももう終わりに近いパウロさんのことです。

パウロさんたちは、船に乗って、エルサレムに急いで帰っていました。でも、その途中で、どうしても会いたい人たちがいました。それは、エフェソの教会の人たちです。そこで、ミレトスという港に船が着くと、エフェソの教会に使いをやり、すぐに教会の長老さんたちに来てもらいました。どうしても最後のお別れを言っておきたかったからでした。

エフェソの教会は、パウロさんが、3年もの間、一生けんめい伝道し、導いてきた教会でした。でも、この伝道の旅が終われば、エフェソの教会の人たちと二度と会えないことを、パウロさんは覚悟していました。ですから、自分がいなくなった後の教会のことを、とても心配していたのです。そして、この最後の機会に、どうしても教会にとって一番大切なことを、長老さんたちに伝えておきたいと願ったのでした。

みなさんも、もし仲のいいお友だちと、これからももう会えない、最後のお別れをしなければならぬ、ということになると、どうでしょうか。そのときには、そのお友だちに、どんなことを伝えますか？ 一番大切なことを伝えたいと思いませんか。相手の人のことを思って、最後に伝えることができる一番大切なことって、なんですか。それは、相手の人への心からの「愛」を伝え

ることではないかなあと、先生は思います。

パウロさんも、そうだったと思います。しかも、パウロさんにとって一番大切なことは、「イエス様とその教会を自分の命をかけて愛する愛」を伝えることでした。なぜなら、イエス様は、御自分の命を十字架で捨ててまで、私たちを罪から救い出して愛してくださいました。そして、教会を御自分のものとしてくださいました。そのイエス様の愛に答える真剣な「愛」を、パウロさんは、最後に伝えようとするのです。

パウロさんがはじめに語るのは、3年の間、エフェソの教会でイエス様に仕えて、伝道して来た自分の姿でした。「長老のみなさん。みなさんは、このわたしが、あの3年の間、いつもイエス様に一生けんめい仕えてきたことを、よく知っているはずですよ。わたしは、イエス様を伝えるために、涙も流したこともありました。迫害を受けて苦しいこともありました。でも、それは、ただイエス様に心からの愛をこめて仕えるためでした。どんな時にも、どんな場所でも、誰にたいしても、『神様に対して悔い改めて、イエス様を信じて救われなさい』と力強く伝道してきました。

そして今、パウロさんはエルサレムに帰ろうとしています。しかも、そこには、今までよりも、いっそう激しいユダヤ人からの迫害が待ち受けています。命を失うほどの危険さえあるかも知れま

せん。それでも、なおエルサレムに帰るのは、ただ聖霊なる神様に導かれてのことでした。そこでは、人間の思いではなく、神様に従おうとするパウロさんの姿が見えてきます。パウロさんは、イエス様に自分の命を賭けて仕える愛の決意を、このように語るのです。「けれども、わたしには、覚悟ができています。なぜなら、イエス様からいただいた自分の務めを果たすことが、一番のよこびなのです。わたしは、神様の恵みの福音を伝道することさえできれば、自分の命も惜しくはないからです」。

このようにイエス様に命を賭けて仕える自分の姿を通して、パウロさんは、イエス様が十字架で命を賭けてくださった大いなる愛を、エフェソの教会の長老さんたちに伝えるのです。そして、自分が去った後のエフェソの教会が、イエス様の救いの福音から離れず、正しく導かれるように、長老さんたちに神様から託された使命を教えるのです。

そして、その愛の言葉は、最後に、祈りとなります。「そして今、そのようなあなたがたを神様

とその恵みの言葉とにゆだねます。なぜならば、この神様の恵みの言葉こそが、あなたがたをつくり上げ、すべてのクリスチャンと共に恵みを受け継がせる力があるからです」。お互いにもう会えないことが分かっているパウロさんとエフェソの教会です。これから、お互いがどうなっていくのか、分かりません。けれども、ただ一つ確かなことは、イエス様の福音を告げる神様の恵みの言葉こそが、すべてのことを貫いて、神の御業を成し遂げる力を持っていることでした。ですから、パウロさんは、自分の去った後のエフェソの教会の人々を、神様の恵みの言葉に信頼して委ねることができました。すべての不安も委ねることができたのです。

このパウロさんのイエス様とその教会への愛と祈りは、二千年を経た今に至るまで、決して止むことはありません。なぜならば、代々のクリスチャンが、その愛と祈りに生き続けてきたからです。私たちも、神様の恵みの言葉に委ねて、この愛と祈りに続いていきましょう。（西 牧夫）

【今日の暗唱聖句】 使徒言行録 20章32節

そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。
この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。

〈ねらい〉

「神とその恵みの言葉とにゆだねられた教会」につながることでできる喜びを感謝します。

〈今日のお話〉

〇〇ちゃん、〇〇くん……は教会が、好きですか？ 日曜日の朝、お友だちに会えてうれしいね。みんなでいっしょに賛美したり、お祈りできてうれしいね。聖書のお話を聞いて、神さまがわたしたちのことを、とても愛してくださっていることを知ることができて一番うれしいね。分級で、工作をしたり、ゲームをしたり、おどったり(?)、楽しいね！

教会には、生まれたばかりの赤ちゃんや、おじいちゃんや、おばあちゃんもいます。教会は、イエスさまを真ん中にした神さまの家族です。

神さまは、教会を愛して、育ててくださいます。パウロさんも、エフェソ教会で神さまのお話をいっしょうけんめいにしました。わたしたちの教

会で神さまのお話をしてくださっている、〇〇牧師や、日曜学校の先生のお話をよく聞いて、成長することができますようにお祈りしましょう。

〈暗唱聖句〉 エペソ 1 : 23

「教会は、キリストの体です……」

〈賛美〉

「しゅイエスはまことのぶどうのき」

日本基督教団出版局『子どもさんびか』より

〈子どもカテキズム〉 問34

……キリストの体なる教会と共に歩みます……

〈お祈り〉

神さまの御言葉をよく聴いて、神さまの家族を大切にすることができますようにお祈りします。
アーメン。

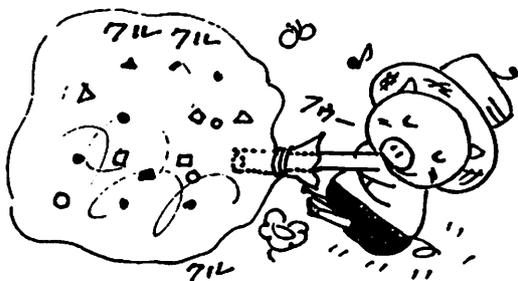
〈分級の流れ〉

- ①「今日のお話」をしながら、教会で様々な奉仕をささげている兄弟姉妹のことを話しましょう。イエスさまが、神さまの家族のために祈ってくださっていることを感謝します。
- ②先週と同様に、分かりやすく書いた大きめの絵地図とおもちゃの船（画用紙で作っても）を用意し「ここを通過して、エペソの教会に……」と見せながら話すと楽しいでしょう。
- ③工作をしよう

—— ポリ袋の色々クルクル ——

材料：透明なポリ袋・色とりどりの色紙を切ったもの・ストロー・輪ゴム

作り方：透明なポリ袋の中に、色とりどりの色紙を入れて、ストローに輪ゴムで留めて吹く。



〈分級教師へのワンポイント・アドバイス〉

日曜学校教師は、子どもたちにとって牧会者の使命を与えられています。生徒全員の牧会者となることは現実には不可能でしょう。しかし、担任の子らの牧師として、派遣されているのです。羊飼いは、羊のことをよく知らなければなりません。筆者の教会では年に最低一度、全体で家庭訪問します。親子合同礼拝式のお誘いをするためです。それは、ただ単にその集會に両親が来て欲しいのでお誘いするということだけのためではありません。子どもたちの「家庭」を知ること、教会と家庭との関係、親子関係などを垣間見るためでもあるのです。

2万人が集るといふ教会学校が、アメリカ、ニューヨークの下町にあります。2万人の子らを集めるということだけで驚かされますが、それ以上に驚かされるのは、教師のスタッフが一週間のうち、その2万人の子らの家庭一軒一軒に赴いて、来週の週報を手渡しするのだそうです。そのような関係を築くからこそ、2万人が集うのではないのでしょうか。

一年に一度の私どもの教会など、いったい何なのか……。しかし、祈ることができます。ハガキを書くことはできます。そしてその祈りが具体化し、真実になれば、分級でどのような会話（質問）がなされるべきかも、自ずと導かれてくるのではないのでしょうか。

〈ねらい〉

「命すら惜しいとは思いません」と告白するパウロなればこそ、福音がエフェソの教会を形成しました。この大なる福音を語るができる者とされた教師自身の喜び、教会への愛を正面から語って、福音の素晴らしさ、教会の価値を気づかせる。

〈子どもカテキズム〉

問34

〈子どもと向き合うために一質問〉

- ①パウロ先生は、エフェソの教会で何年間イエスさまのことを伝えましたか？
- ②パウロ先生は、どんなふうにイエスさまのお話をしていたのでしょうか？ ⇒落涙。
- ③「命よりも大切なもの」があると思いますか？ ⇒イエスさまは御自分の命を十字架にお捨てになるほど、(イエスさまの命ほど大切なあなた！)わたしたち(=教会)を愛してくださった。このイエスさまを信じるだけで、神の子とされて、永遠の命が与えられる。だから、パウロは語り続けた。教会がどれほど大切であるか！
- ④わたしたちにできる教会の働きのお手伝いはありますか？

〈あそび〉

「手紙を書こう」

身近な牧師、日曜学校教師……。海外で伝道、奉仕している先生たちに手紙を書こう。(『改革派教会名簿』に海外宣教、奉仕者の住所が記されています。牧師が長老に聞けば分かります。牧師に住所を書いて投函していただくこともできるでしょう。)

〈お祈り〉

僕たちのために、イエスさまの教会と先生たちを与えてくださって感謝します。礼拝のお話をもっとしっかり、そしてもっと多くのお友だちと聞けますように。アーメン。

ねらい

○神の言葉（聖書）への信頼を培うことを目的とする。

展開例

○神とその恵みの言葉が人間を造り上げ聖なる者とする力をもっていることがここで明らかにされている。パウロがエペソ教会から去っていなくなっても、神の言葉が教会を形成する力があるのでその言葉に人々を委ねるとパウロは語っ

ている。

話し合ってみよう！

○教会では礼拝の説教が重んじられるがその理由について話し合ってみよう。

祈り

神とその恵みの言葉が私を形成してくださるよう

うに導いてください。

○暗唱聖句○

使徒言行録20：32

聖書日課

月 使徒17章 16～21節
火 使徒17章 22～34節
水 使徒18章 1～11節
木 使徒19章 1～10節
金 使徒20章 17～24節
土 使徒20章 25～38節

○祈りの課題○

☆三二日記☆

テキスト 使徒言行録27章

今日の箇所はローマへの旅での最初の出来事です。28章14節で「こうしてローマに着いた」とあるところまでが、ローマへの旅日記となっています。もちろん単なる日記や紀行ではなくて、27章では20節「助かる望みは全く消えようとしていた」という絶望とその中でパウロが示した信仰を通して信仰の本質を伝えたいのです。またそのパウロの信仰から、希望を持ち続けるが信仰者をどのように動かすのかを伝えたいのです。

伝道旅行から戻りエルサレムで主を証したのと同様にローマでも主を証しすることが主の御心であることを示され、確信したパウロがローマへの旅の途上を通して、とりわけその困難な旅を通して主のご計画とそれを信じる信仰者のあり方を示すことが、この箇所の主眼点なのでしょう。

(1) 絶望的な状況

27章の船出から暴風に襲われるところまでは絶望の淵に追いやられる経緯を説明しています。

シドンまでは順調に進みますが、そこから「向かい風」に阻まれます。「良い港」につくのも「風に行く手を阻まれ」ようやくのことでした。「断食日の過ぎていたので航海はもう危険であった」という時期にまで旅はずれ込んでしまい、それにもかかわらず「大多数の意見」や「船長や船主の方」への信用から船出をし「エウラキロン」と呼ばれる有名な暴風に巻き込まれることになってしまいます。「積み荷を海に捨て」「船具を投げ捨て」「太陽も星も見えず」という絶望の淵に立たされてしまいます。パウロも忠告を加えていましたから、こうした結果には「大多数の意見」による失敗がありました。ローマに行くどころか「助かる望み」さえ全く消えようとする絶望に至ったのでした。

(2) 望みを抱く信仰

パウロはその中で「立った」のです。これは「希望するすべがなかったときに、なおも望みを抱いて信じる」（ローマの信徒への手紙4:18）信仰の姿でした。ローマに行くことが主の御心であることを確信していたパウロですから、このような状況でも当然だというのではなく、こうした状況に陥る中でもパウロは「礼拝している神から」と話しているように、常に礼拝していて「神からの天使が昨夜わたしのそばに立って言われた」言葉聞いていたのです。

またこうして信じているパウロはこのあと27章後半に描かれているように、船員たちの逃亡を阻んだり、全員に食事を取らせたり、さらにはその食事のあと、残りを投げ捨てて船を軽くするように計らったりします。天使による救いの告知を受けていたパウロにとって、こうした救いの約束と希望の信仰は、何もせずに待つことではなく、そこに至るためのあらゆる努力と配慮を含むものでした。パウロは非常に冷静に現状を把握し、体力も、さらには船の航行に必要な船員も船体の状態にも配慮しています。ローマへ行くことが主のご計画であっても、そうした主の御心の成就には人間の意志判断や責任、準備や努力なのがちゃんと含まれていることを聖書はパウロのその後の姿から教えたいのです。

望み得ない状況の中でなお、神への望みを持って神様を礼拝すること、またそのなかで神様のご計画を覚え、信じた私たちがちゃんと実現に向けて祈り従っていくことが、望みを持つ信仰に含まれていることを、パウロの姿から学ぶことができます。

(村手 淳)

テキスト 使徒言行録27章1～44節

(単元のねらい)

この説教は、パウロのローマ行きの最後の旅の場面である。エルサレムに戻ったパウロを待っていた迫害、逮捕、取り調べ、裁判、控訴、ローマへの旅と嵐との遭遇。人間的には過酷な試練と絶望的な状況の中でも、そのすべてを貫いて神の御言葉が着実に実現してゆく。その神の御言葉に対する信頼と希望を、パウロの姿を通して語り伝えたい。

「確かな希望」

最後の伝道旅行から、エルサレムに帰ってきたパウロさんです。でも、同じユダヤ人の人たちに取り囲まれ、捕えられ、殺されかけてしまいます。そのとき、ローマの軍隊の千人隊長が、人々の間からパウロさんを引き出し、調べてみると、パウロさんにはローマの市民権があることが分かりました。そこで、裁判を受けさせるために、カイサリアの港町にいるローマの総督の下に送ります。でも、2年たっても裁判の結果が出ません。そしてついに、ローマの皇帝の裁判を受けるために、パウロさんは、ローマに送られることになったのです。

ユダヤのカイサリアからイタリアのローマまで、なんと3千キロ近くの大旅行です。ローマの百人隊長ユリウスに引き渡されたパウロさんたち囚人を乗せた帆船が、カイサリアの港を出発します。百人隊長は、ミラという港に着くと、パウロさんとほかの囚人を、イタリアに向かう別の船に乗りかえさせました。

港を出た船は、向かい風のために、なかなか前に進まず、幾日もかけて、やっとクレタ島の「良い港」と呼ばれる所に着きました。ちょうど、季節は秋でした。でも、この秋から冬にかけて、海が大きく荒れるので、船で航海するにはとても危ない季節でした。そこで、パウロさんは、こう忠告したのです。「皆さん、今の季節は航海をとりやめてください。危険です。そうしないと、積んである荷物や船体だけでなく、私たちの命までも

危険になります」。でも、百人隊長は、航海のプロの船長さんたちの方を信用して、衆人のパウロさんの言葉を聞きませんでした。船は港を出て行きます。

はじめは、穏やかな南風が吹き、船は順調に進んでいました。ところが、突然、雲行きがあやしくなり、パウロさんが言った通りに、おそろしい嵐がやってきたのです。船は強い風と高い波で、右に左に木の葉のように大きく揺れます。船の舵もききません。船が浅瀬の岩にぶつかって壊れないように、ただ風に流されるままです。翌日には、船を軽くするために積荷を捨てました。3日目には、船具も投げ捨てました。みんなが助かろうと必死です。でも、来る日も来る日も、太陽も星も見えません。自分たちがどこにいるのかも分かりません。ただ海の上を漂うばかりです。船の人たちは、だんだんと元気がなくなります。そして、ついに助かる望みも消えてしまいそうになりました。「もう何をやってもだめだ、みんなおぼれて死ぬしかない」。

嵐の中、みんな助かろうとして、必死に動き回っていました。でも、どんなに自分の力で何とかしようとしても、状況は悪くなるばかりです。次第に、元気がなくなり、希望が消えていったのです。けれども、そんな人たちの中で、ただ一人、静かに、落ち着いて、変わらず、希望を決して失わない人がいました。それが、パウロさんでした。

パウロさんは、嵐の中でも、みんなと違って、ただ一人神様に礼拝し、祈り、人間の力よりも神様の御言葉に信頼していたからでした。

みんなの希望が消えようとしたとき、そのパウロさんが立ち上がって、このように言って、みんなを力強く励ましたのです。「みなさん、元気を出しなさい。船は失いますが、みなさんのうちだれ一人として命を失う人はありません」。これを聞いた人たちは、びっくりして、こう思ったと思います。「俺たちには助かる見込みがないとしか思えないのに、あのパウロという男は、なぜ一人だけあんなに落ち着いているんだ。なぜ、あんなに確信に満ちて、俺たちを励ますことができるんだろう」。

パウロさんは、その理由を、続いて語ります。「なぜなら、昨晚わたしが礼拝していると、神様からこのような御言葉を受けたからです。『パウロ、恐れるな。あなたは、必ずローマの皇帝の前に立たなければなりません。だから、神様は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せました』。わたしは、人間の力よりも、天地を造られた神様を信じています。その神様の御言葉は、どんなことがあっても、必ずその通りになるから

です。ですから、みなさん、元気を出しなさい」。

これを聞いた人たちは、なぜパウロさんが希望を失わず、落ち着いていられるのか、その理由がはっきりと分かったと思います。それは、人の目に見えるものや人の力によるものではありません。そうではなくて、目には見えない神様に目を高く挙げ、神様からの御言葉に信頼するからです。ここにこそ、どんなときにも決して失われない確かな希望があります。

みなさんも、これからの生活の中で、突然思いもしなかった嵐のような辛く悲しい出来事に遭うかもしれません。「もうだめだ」と思うってしまうこともあるかもしれません。でも、そのとき、このパウロさんのように、いつも共にいてくださる神様を礼拝して、神様の御言葉に耳を傾けてください。必ず、一人ひとりを導かれる神様のふさわしい御言葉が与えられるにちがいありません。そのときには、その御言葉に信頼して、希望をもって立ち上がってください。そして、隣にいるお友だちにも、その神様からの希望を伝えてあげてください。」
(西 牧夫)

[今日の暗唱聖句] ヘブライ人への手紙11章1節

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。

〈ねらい〉

天と地とその中のすべてをお造りくださりそれを治めておられる神さまに感謝します。どんな時も神さまにお頼りして礼拝をささげましょう。

〈今日のお話〉

ポカポカとあたたかい日になりました。ちょうちょも、飛び始めましたね。さくらの花も、もうすぐ咲きそうです。寒い冬も終わり暖かい春がやってきました。神さまは、雪や雨や春風をお与えくださいます。

ある日、パウロさんは、大きな船に乗って、ローマの国に向かっていました。ローマの国の一番えらい王さまに会うためでした。とてもとても長い旅でした。途中で、おそろしい嵐が船を襲いました。強い風と、雨、そして荒れ狂う波に、船は今にも沈みそうです。船に乗っている兵隊たちはブルブル震えています。でも、パウロさんは船の中で神さまを礼拝し、お祈りして、神さまだけにお頼りしていました。なぜならば、神さまは、ローマの人びとにも神さまのことを伝えるためにパウ

ロさんを必ず無事にローマにみちびいてくださることを知っていたからです。嵐からも守ってくださる神さまは、僕たち私たちを、どんな悲しいこと、苦しいことからお守りくださいます。

ですから、どんな時も神さまにお頼りして、礼拝をしましょう。

〈暗唱聖句〉 テサロニケニ 3 : 3

「主は真実な方です」

〈賛美〉

「大きな船にのって」(42番)

いのちのことは社『プレイズワールド』より

〈子どもカテキズム〉 問13

……すべてのことが私たちの役に立つよう働くのです……

〈お祈り〉

ほくたち、私たちを神さまのお役にたつようにお使ください。アーメン。

〈分級の流れ〉

- ①船に乗ったことのあるお友だちは、いるでしょうか？ 経験のない子どもがほとんどでしょう。画用紙などで作った船に「パウロのでんでん太鼓」を乗せて、大きく揺らします。
- ②先週と同様に、分かりやすく書いた大きめの絵地図とおもちゃの船（画用紙で作っても）を用意し「ここを通過して、ローマに……」と見せながら話すと楽しいでしょう。
- ③工作をしよう

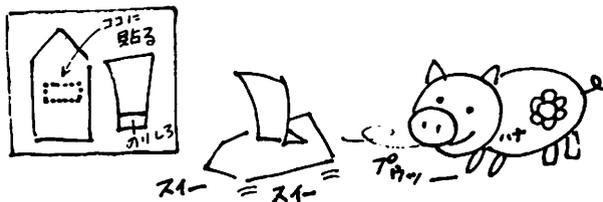
「フーフー舟」

材料：画用紙・セロテープ・クレヨン

作り方：①帆に好きな絵を描く。

②帆の下部を2 cm 折って、舟の中央にセロテープで留める。

③息を吹きかけて舟を進める。



〈分級教師へのワンポイント・アドバイス〉

毎週の尊いご奉仕に感謝申し上げます。明日、子どもたちは元気に主イエスを求めて教会にやってきます。ひとりひとり、主イエスが送ってくださった子らです。そのようなかけがえのない大切な子として常に新鮮に子らを見る眼差しが与えられますように。

最近来始めた子はいませんか。その子にとって、かけがえのない時間が日曜学校、子ども礼拝式の時間です。私どもにとってはいつもの主日かもしれません。しかし、ある子にとっては、生まれて初めての教会かもしれません。ある子の家庭は、夫婦関係が崩壊しつつあるかもしれません。学校で、家庭で傷ついているかもしれません。子どもたちの様子をよく見ましょう。教師は、いつも新鮮な思いで子どもたちの前に立ってほしいものです。

〈ねらい〉

長い物語をすべて紹介しようとすれば時間が足りません。ここでは、子どもカテキズム問13「摂理の信仰」に絞って伝えたいと思います。教師自身の証こそ、もっとも身近な事例です。摂理の故に今の祝福された自分、恵まれた自分がいることを証言しましょう。神が共にいてくださることにまさる祝福はありません。神さまを信じる者は大胆に生きれることを伝えましょう。

〈子どもカテキズム〉

問13

〈子どもと向き合うために一質問〉

①台風の時、海の上はどんなになっているか想

像してみよう。

②激しい暴風の中、パウロはいっしょに乗り合せていた人たちになんと言いましたか。⇒「皆さん、元気を出しなさい。わたしは神を信じています。」

③神さまを信じている人はどうして元気が出るのか、理由を考えて見ましょう。

創造者なる神、摂理の神、臨在の神……

④先週、イエスさまはあなたといっしょにいてくださいましたか。どんなときそれを感じましたか。⇒なにか楽しいこと、嬉しいこと、良かったことが起こったとき。「それは良かったね。それなら、つらかったときにはいっしょにいなかったのかな……。イエスさまはどんなときでも一緒にいてくださるんだよ。どうすれば気づけるのかな？「天のお父さま」って呼びしてごらん！

〈あそび〉

パウロの伝道旅行の足跡を、聖書地図を開いて調べてみましょう。

伝道旅行の足跡を「すごろく」にして遊んでみてはいかがでしょう。

〈お祈り〉

天のお父さま、僕たち私たちは、少しでも大変なこと、辛いことがあると、めそめそしてしまいます。そんなとき、天のお父さまと呼ぶ心をすぐに与えてください。そして、神さまが神さまの子どもの僕たち私たちといっしょにいてくださっていることを思い出させてください。アーメン。

〈ねらい〉

パウロの旅は楽しい旅ではなく、行く先々に困難と迫害が待っていました。しかし、命の危険にさらされるような状況でもパウロの福音宣教の思いが弱ることはありませんでした。それはパウロが神様から、福音宣教の使命を与えられ、それを確信していたからです。

命を懸けることのできる価値ある使命を見つけることが出来たら、なんと幸せな人生となることでしょうか。パウロが与えられた使命を知り、使命に命を懸ける信仰の姿を共に学びたいと思います。

〈展開例〉

1. パウロは神様からどのような使命を与えられていましたか。

神様はパウロに「行け。私があなたを遠く異邦人のところへ使わすのだ」（使徒言行録22:21）と異邦人に対する福音宣教の使命を与えられました。しかし昔の旅は今のように飛行機や自動車や動力の舟による安全で快適な旅ではありませんでした。嵐や強盗や野獣による危険がいっぱいで、ほとんど歩いて移動しなければなりません。けれどもパウロはそのような危険をかえりみず、三度も伝道旅行に出かけたのです。

また、大都市ローマでも福音を伝えるために、エルサレムに行けば捕まって殺される危険があったにもかかわらず、それを覚悟してエルサレム行き、捕まった後、彼はローマに行くために皇帝に上訴したのです。

○質問

みんなは何の目的・使命を持って生きていますか。共に考えましょう。

2. 神様が私たちを守ってくださいます。

ローマに連行される途中、暴風雨のために舟が難破してしまいました。しかし、神様の守りを信じていたパウロは、この騒ぎの中でも冷静に、神様が必ず助けてくださることを話しました。

兵士たちは囚人が逃げると責任を問われるので、殺してしまおうと企てましたが、隊長が兵士たちを説得して思いとどまらせました。パウロをローマに行かせて、当時の世界の中心であるローマで福音を伝えるための神様のご計画だったのです。

どんなに危険が迫っても、必ず守られることが解っていたら少しも怖くありませんが、私たちは少しでも危険な状況になると、恐れおののいてしまいます。神様が守っていてくださると信じていても、いざその場になるとその信仰は風に吹き飛ばされて、現実の恐ろしさに心が奪われてしまいます。しかし、パウロは人間が考えたら、絶望だと思われる状況の中でも、決して恐れませんでした。それはパウロは強い人間だったからではありません。神様がパウロに強い信仰を与えたので、強くなることができました。

私たちは神様が信仰を持たせてくださり、強くしてくださらなければ、勇気も希望を持つことはできません。パウロの生き方から、人生の全てを神様にお任せして生きるときに、人間にはない勇気と確かな希望を持つことが出来ることを学ぶことができます。

○質問

苦しいと感じる時、つらいと感じる時がありますか。そんな時どうしたらよいと思いますか。共に考えましょう。

ねらい

○絶望的状况の中でも神への信仰によって希望を持って生きることを学ぶ。

話し合ってみよう！

○困難な体験をしているとき、人々を励ます勇気と希望はどこから来るか、話し合ってみよう。

展開例

○暴風が激しく、助かる見込みが全く消えうせようとしているとき、神からの声を聞いたパウロがみんなを励ましていることからわかるように、最後の希望を支えるのは神への信仰である。

祈り

どんな困難な時も神の見守りを信じて希望を持って生きることができるよう導いてください。

○暗唱聖句○

ヘブライ 11:1

聖書日課

月	使徒 27 章	1～8 節
火	使徒 27 章	9～12 節
水	使徒 27 章	13～20 節
木	使徒 27 章	21～26 節
金	使徒 27 章	27～38 節
土	使徒 27 章	39～44 節

○祈りの課題○

☆三日記☆

テキスト 使徒言行録28章

1. ローマへの最終行程

「神殿とモーセの律法に背くもの」という理由でユダ人から殺害されそうになったパウロは、ローマの千人隊長に保護され、ローマ市民権を理由に、ローマ皇帝の裁きを主張して、ローマ行きを願いました。未決囚としての生活が始まり、2年後にようやく船に乗せられ、ローマ行きが実現します。しかし、途中、嵐に遭い、マルタ島に避難の後、冬を過ごし、3ヶ月後にディオスクロイ（双子の意味でカストルとポリクスと呼ばれた異教の神々の船飾りをもった）アレキサンドリアの穀物船に乗ることができました。マルタより約130キロ北上し、シシリア島のシラクサに入港、そこに三日間滞在の後、イタリア本土の西南海岸の町レギオンに入港しました。シシリアとイタリア本土の間の狭くて危険な海峡を安全に北上するために南風を待つためです。幸い翌日には南風が吹いてきたので、イタリア本土南部の町ナポリの北西13キロに位置するブテオリ港に二日目に到着しました。その地のキリスト者たちとの一週間にわたる交流が許され、主からの励ましを感じた後、陸路を200キロ歩いての旅でした。ローマのキリスト者たちは、パウロを歓迎して二組に分かれて出迎えました。一組はローマ南約70キロにあるアフィフォルムで、もう一組はローマの南56キロにあるトレス・タバルネで迎えました。

2. ローマでの働き

皇帝の裁判を待つ未決囚としてローマに入ったパウロは、番兵に監視される制限はありましたが、一定の自由を与えられて「自分だけで住むことを許され」（16節）、「訪問する者は誰かれとなく歓迎し、全く自由に何の妨げもなく」（30～31節）

迎え入れる境遇を得ました。そこで、「三日後、パウロはおもだったユダヤ人たちを招いて」（17節）。福音の使者であるパウロは、このローマ滞在を、無為に過ごさず、「イエスのこと力強く証しする」時と自覚して行動しました。自らユダヤ人の代表者たちを招いて、到着の挨拶と未決囚としてローマに来た事情説明をなし、伝道の機会を作っています。ついで、日を定めて集会を開き、「神の国についての力強い証し」と「律法や預言者の書を引用して、イエスについて説得」し、福音のメッセージを伝えました。伝道旅行中と同様に、まず、同胞であるユダヤ人に、次にユダヤ人の福音拒否に伴い、異邦人たちにイエスの福音を宣べ伝える類型を守っています。こうしてパウロは異邦人の使徒としての勤めに力を注ぐことになりました。

3. パウロの宣教の結果

ローマ伝道の成果は、ユダヤ人に関しては福音を受け入れた人々と心の頑なさのゆえに拒絶した人々もあり、期待どおりではありませんでした。そこでパウロは、イザヤ書6章9～10節を引用して信じない同胞の頑なさを嘆き、救いが異邦人に向けられて行くことを宣言します。他方、異邦人伝道の成果については、福音が受け入れられ、異邦人教会の形成が実を結んでいったことが、28章30～31節の結びの言葉に暗示され、またその証拠をフィリピ1：12～14に読むことができます。

こうして囚人生活を始めたとき、主から「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証したように、ローマでも証をしなければならぬ」と告げられた言葉が成就していきました（使徒23章11節）。
(杉山 明)

テキスト 使徒言行録28章

(単元のねらい)

ローマに到着したパウロである。ローマのユダヤ人たちの福音の拒否から、異邦人の世界へと福音が展開する契機となる。囚われの中にあるパウロだが、神の言葉はつながれておらず、それ自身の力をもって、伝道の戦いに勝利する希望に開かれた姿を学び取りたい。

「神の言葉はつながれていない」

パウロさんたちの船は、嵐のために14日間も、海を流されていました。でも、船はマルタ島に打ち上げられ、船の全員が助かったのです。そのようにして、神様が語られた御言葉は実現してゆきました。冬の3ヶ月の間マルタ島にいた後、春になって別の船で再び出発します。

そしてついに、旅の目的地ローマの都に、パウロさんたちは到着するのです。当時のローマには、大通りや市場や劇場や宮殿がありました。人口は100万人もいる世界の政治・経済・文化の中心の巨大な都市でした。そのローマに、パウロさんは長い間、伝道したいと願っていました。そして今、その念願のローマに足を踏み入れたのです。パウロさんは、神様にどれほど感謝し喜んだことでしょう。

ローマに着いたパウロさんの身分は、鎖につながれた囚人です。でも、一人の兵士の見張りつきでしたが、借りた家に自由にひとりで住んでもよいことになりました。ただ、自分から外に出かけていく自由はありません。

その3日後のことです。パウロさんは、ローマにいるユダヤの人たちの指導者たちを家に招きました。どうして自分が、エルサレムからローマに連れて来られるようになったかを話すためでした。「ユダヤの兄弟のみなさん、わたしは、ユダヤの人たちに対しても、先祖の律法に対しても、何の悪いこともしていません。それなのに、イエス様の十字架の救いを伝えているという理由で、エルサレムのユダヤの人たちに殺されそうになりまし

た。そして、囚人としてローマ人に引き渡され、ローマの皇帝の裁判を受けることになったのです」。それを聞いたユダヤの人たちは、もっと、パウロさんのイエス様という方について話を聞いてみたいと思いました。

そういうわけで、ユダヤの人たちは相談して日を決め、おおぜいでパウロさんの家にやって来ました。パウロさんは、朝から晩まで、旧約聖書のモーセの律法や預言者たちの言葉を引用しながら、イエス様と神様の国について熱心に話しました。「あの十字架につけられたイエス様こそ、旧約聖書に預言され、神様が遣わしてくださった救い主キリストです。どうか、みなさん、悔い改めて、このイエス様を自分の主と信じてください」。ある人は、パウロさんの言葉を受け入れました。でも、ほかの人たちは信じようとしません。それで、ユダヤの人たちは、パウロさんのものを立ち去ってしまったのです。

パウロさんは、気を落としてしまったのでしょうか。そうではありません。信じようとしないうダヤの人に向かってではなく、今度はローマ人や外国の人たちに向かって、イエス様の救いを伝えるために、パウロさんは、ますます熱心に伝道するのです。

けれども、みなさんは、このパウロさんの姿を不思議に思いませんか。同じユダヤの人たちからは、受け入れてもらえなかったパウロさんです。

しかも、そのパウロさんは、囚人です。比較的
自由だといっても、足に鎖を繋がれています。家
からは外に出ることができません。それに、昼も夜
も、見張りの兵士に見張られています。そんな中
で暮らすパウロさんです。もし、みなさんが、パ
ウロさんと同じ立場だったら、どうでしょうか。
辛い気持ちになって、落ち込んでしまうかもしれ
ませんね。先生も、そうなるかもしれません。

でも、パウロさんは、そうではありませんでし
た。パウロさんは、丸2年間もそこに住んで、家
を訪ねてくれる人はだれも喜んで迎えました。そ
して、まったく自由に、だれからも邪魔されずに、
堂々と神様の国を宣べ伝え、十字架につけられた
主イエス・キリストについて教え続けたのです。
パウロさんのその力の秘密は、どこにあるので
しょうか。

その力は、パウロさん自身のちからではありま
せん。そうではなくて、パウロさんが語る神様の
言葉の持つ力でした。なぜなら、その神様の言葉
は、私たちの罪のために十字架にかかり、あらゆる
罪と死の支配に勝利して復活してくださったイエ
ス様を告げる力ある言葉だったからです。そう
であれば、人が、パウロさんを苦しめ、鎖につな

いでも、パウロさんの語る神様の言葉は、決して
つながれません。その牢屋の中からも、戦いの
中にあっても、たとえ死の中にあっても、どんな
中にあっても、神様の言葉が勝利するのです。そ
して、宣べ伝えられ、広まっていくのです。パウ
ロさんは、この神様の言葉の力に信頼したからこ
そ、力強くイエス様を証し続けることができました。

パウロさんのローマ伝道から二千年近くがたち
ました。そのあいだも、神様の言葉はつながれて
いませんでした。全世界に広がっていきました。
それは、活ける神様の言葉が、教会の礼拝を通し
て、伝道者を用いて、復活された十字架のイエ
ス様の勝利を、語り続けておられるからです。そし
て今、この日本のこの私たちの教会のみなさん一
人ひとりにまで、届けられています。それは、神
様の言葉が、みなさんの生活の中でも、その力を
発揮し、みなさんがその力を受けて、喜んで、大
胆に、堂々とイエス様の証しができるようになる
ためです。

さあ、この1週間も、神様の言葉に生かされて、
イエス様に従ってまいりましょう。(西 牧夫)

[今日の暗唱聖句] テモテへの手紙二2章9節

この福音のためにわたしは苦しみを受け、ついに犯罪人のように鎖につながれています。

しかし、神の言葉はつながれていません。

〈ねらい〉

時代をこえて、世界中に広まったイエスさまの救いの恵みを喜び、わたしたちも神さまに賛美をささげます。

〈今日のお話〉

パウロさんは、神さまの約束どおりにローマに行くことができました。そこで、朝から夜まで、人々に神さまのお話をしました。ある時は、牢屋に入れられてしまって、足に鎖がつけられたこともありました。鎖につながれながらも、神さまのお話をしました。パウロさんは、ご飯を食べることよりも、神さまのお話をするのが好きだったのですね。

パウロさんはそれだけではなく、たくさんの教会に手紙を書いて、はげましたり、大事なことを伝えたりしました。ここでパウロが書いた手紙が、聖書の中にあります。こうして、神さまのことは今も聖書を通して世界中に広がっています。

たんぽぽの花をもう、見かけたお友だちはいますか？花が枯れた後、白い綿毛ができます。風

が吹いてくると、綿毛はばらばらになって、風に吹かれて飛んでいきます。ひとつひとつの綿毛には、小さな種がついています。その種のように神さまの御言葉も、世界中に広がって、神さまの子どもが誕生するでしょう。

〈暗唱聖句〉使徒言行録18：9

「恐れるな。語りつけよ」

〈賛美〉

「主イエスとともに」90番

いのちのこば社『ふくいんこどもさんびか』

〈子どもカテキズム〉問79

私たちの神さまのすばらしさが、私たちから、そしてすべての人からもほめたたえられ……

〈お祈り〉

神さまの御言葉が世界中に広まりますように。
アーメン。

〈分級の流れ〉

①受難節を前にパウロの伝道旅行も今日で終わりです。最後の最後まで、神さまに従いつづけたパウロを神さまは支えつづけてくださいました。私たちが、今手にしている聖書の書簡のほとんどをパウロが、時には牢屋の中から書き送ったことを、聖書の目次を見せながら話します。

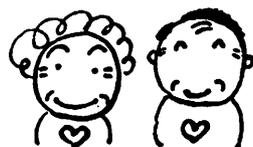
②お手紙を書こう

「おじいちゃん、おばあちゃんにお手紙を書こう!!」

便箋でも、ハガキでも、カードでもいいです。

絵に、こばをそえて遠く離れているおじいちゃん、おばあちゃんに送みましょう。

みこばや、教会学校で教えてもらったことが書けたらいいネ！



「まだ会ったことのないお友だちへ」

・御言葉を書いた手紙をつけて、風船を飛ばそう。

・御言葉を書いた手紙を入れた瓶を流そう（海の近くの地域）。



〈分級教師へのワンポイント・アドバイス〉

日曜学校が好きになる子、それは、ほとんど例外なく、教師が好きになる子です。教師が好きになって、主イエスが好きになる、これが多くの現実であろうと思います。わたしは毎週子どもの説教を担います。もしも、子らが、わたしのことが嫌いになったら、明日から来てくれないでしょう。(契約の子は仕方なく来るかもしれませんが)どんなに拙い説教でも、先生に好感、好意を持ってもらえるなら、説教は届きやすいのです。もちろん、内容はどうでも良いというような議論は無意味です。どうしたら、好きになってもらえるのか。子どもを好きになることです。(誤解を恐れず申し上げれば、それは、何も「子ども好き」になることを意味していません。)それは、主イエスが子らを受しておられることを信じること、主イエスが招いてくださった子らであると信じることによります。明日、あなたの担任の子らは、休まず通ってくるのでしょうか。祈りましょう！

〈ねらい〉

地の果てまでキリストの証人となる、この預言はパウロたちによって成就します。神の御言葉は真実であり、力があることを伝えましょう。また、御言葉の真実さと力は、信じて従う者に経験される真理であることを伝えましょう。教師自身の御言葉の真実と力の経験をストレートに分かちましょう。救いの歴史は、必ず完成されることも覚えさせましょう。

〈子どもカテキズム〉

問79

〈子どもと向き合うために一質問〉

- ①ローマってどこにあるか知っていますか。⇒
地図で見せる。当時のユダヤ人には、はるかに遠い場所。世界の果て。イエスさまの預言(第1章8節)「エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」の成就であることを伝えたい。
- ②歩いて行ったことのある町はどこまでですか？
⇒パウロたちがまだ見たこともない町へ行くときの気持ちを想像させたい。
- ③パウロさんは、どうして世界中にイエスさまの福音を伝えようとしたのでしょうか？ ⇒異邦人の使徒として使命を与えられた。福音伝道が支払うべき負債。伝えずにおれない喜び……。

〈あそび〉

パウロが書いた手紙を聖書からさがしてみましよう。

新約聖書27巻をカードにして、パウロの手紙を引いたら「当たり」にします。多く引いた人が勝ちになります。

〈お祈り〉

天のお父さま、僕たち私たちにも今日、御言葉を語ってくださいましたことをありがとうございます。世界中にイエスさまの御言葉が広められますように。僕たち私たちも神さまのお働きのためにお使ください。アーメン。

〈ねらい〉

パウロの旅は神様のご計画により、ついにローマに到着しました。福音を拒絶したユダヤ人たちの悪い策略に掛かって捕らわれの身となったパウロでしたが、これが異邦人伝道の契機となり、自分たちの計画ではとても出来ない、ローマの伝道と言う大きな夢が実現したのです。神様のご計画は人知を超えており、必ず実現することを知って、神様に従うことの素晴らしさと確実さを学びたいと思います。

〈展開例〉

1. 神様のご計画は人間の思いを超えている。

パウロは捕らわれの身となって舟に乗り、四ヶ月も掛かってローマに着きました。ローマは当時の世界の中心で世界一の大きな都でした。異邦人への福音宣教の使命を与えられたパウロが、一番来たかったところでした。パウロはどんなに嬉しかったでしょう。パウロはローマで裁判を受ける間、家を借りて住み、そこで大勢の人々に福音を語ることができました。それによってまた多くの人がイエス様を信じるようになったのです。

しかし、パウロはローマ行きを自分で計画し、旅行して行ったわけではありません。囚われの身になることによって、行くことができたのです。囚われの身になることは苦しいことでした。しかし、神様はそのことをも用いてご計画を実行なさったのです。神様のご計画はわたしたち人間の思いを超えた素晴らしい計画なのです。

○質問

あなたは思いもよらないことを通して、神様の

恵みを受けたことがありますか。

2. 神様の御言葉の力に信頼する。

パウロはキリストの福音を伝えるために各地を旅行し、ついにはローマ帝国の都ローマまでやって来ました。しかし、この間、パウロが身に受けた試練や苦難は数えることができないほど多くありました。(コリント二11:16-33参照)

けれどもパウロはその苦難に負けることなく、最後まで神様に従い、福音を伝える人生を生きただけです。このようなパウロの熱心と力の秘密はどこにあったのでしょうか。その全てはパウロ自身の力ではなく、神様の力だったのです。神様は御言葉を通してその力をパウロにお与えくださいました。パウロの力の源はその御言葉の力に信頼し、従っていることにあるのです。

パウロは鎖に繋がれましたが、福音の言葉は繋がれることなく自由に語られました。そして、パウロのローマ伝道から2000年過ぎましたが、神様の言葉はますます勢いを増して、いまや全世界に広がっています。嘘や作り話ではなく御言葉が真実だからこそ、そして御言葉を通して神が今も生きて働いておられるからこそ、教会が建てられ、わたしたちは信仰生活を送ることができるのです。

パウロのような経験を私たちは経験しないかも知れませんが、苦難にあうときには、思い出してお祈りをして神様の助けにより乗り越えてください。

○質問

あなたはどんな時に、御言葉の力の素晴らしさを感じますか。

ねらい

○ローマの宣教を基点としてユダヤから異邦人へと伝道が転換したこと、日本にも伝えられてきた不思議さを考える。

展開例

○ローマに到着しユダヤ人には拒否されたが、パウロは「神の国を宣べ伝え主イエス・キリストについて教え続けた」と書かれていように、ローマという異邦人伝道が本格的に始まり、世界宗教へ

と発展してゆく可能性が示唆されて使徒言行録は閉じられている。

話し合ってみよう！

○16世紀に日本にもキリスト教が伝えられ多くのクリンタンを生み出したことを話し合ってみよう。

祈り

キリスト教がユダヤから始まり世界宗教として発展した神の導きを賛美します。

○暗唱聖句○

テモテニ 2 : 9

○祈りの課題○

聖書日課

月	使徒28章	1～10節
火	使徒28章	11～16節
水	使徒28章	17～22節
木	使徒28章	23～31節
金	ローマ1章	8～15節
土	ローマ1章	16～17節

☆三日記☆

テキスト ヨハネ福音書18章38～19章16節

使徒信条に「ポンテオ・ピラトの下に苦しみを受け」と、主イエスに死刑を宣告し、十字架に送った総督として、また、主の受難をもたらした代表的人物としてピラトの名が覚えられてきたことを示しています。主は人類の不信仰と罪の贖いのために苦難を負われたのですが、とりわけピラトの裁判において、苦難の意味が明らかに示されています。

(1) ピラトの裁き以前の審判

捕らえられた主イエスに対する裁判は、先ず、大祭司カアファの舅である影の実力者アンナスによって(18:12～23)、次に、ユダヤ人の最高議会によって行なわれ、主をメシアと自称する罪・流神罪で死刑との判決を下しました(マタイ26:57～68と並行記事を参照)。

(2) ピラトの裁判

最高法院はピラトを訪れ、主を訴えました。最高法院には生命と奪の権威がなく、ローマ総督の手に握られていたからです(18:31)。訴えを受けたピラトは慎重に審理に取り掛かりました。

第1に、ユダヤ人指導者の告訴の罪状確認から始めました。その過程でピラトはこの訴えがきわめて宗教的な理由であるので、却下すべきであると判断しています。

第2に、官邸内で「ユダヤ人の王なのか」という質問で始まる主への第1回審問を開始し、審問を通してピラトはイエスの無罪を確信し、官邸の外に出て、「あの男に何の罪もない」と宣言しますが、告訴の却下を決定することはずせず、かえって告訴者との政治的妥協を図ります。ピラトは法的正義の立場から、イエスの無罪を言い表しますが、その信念を貫かず、特赦を行なう祭の習慣を用いて、イエス釈放を提案します。このごまかし

の思惑はユダヤ人の激しい反対によって挫折し、罪のない主を十字架に送り、ローマに背いて暴動を行なった犯罪人バラバを釈放する結果を引き起こしました(マタイ27:26)。

第3に、ピラトは官邸に入るとイエスに対して、審問抜きで、縄をかけ、鞭打ち、茨の冠を頭に載せ、紫の衣を着せて卑しめました(19:1～5)。軽い懲らしめを与えて告訴人の怒りをなだめて告訴を取下げさせようと試みましたが(4節)。この試みも成功せず、かえって自らの弱さと罪を露呈しました。主を十字架に追いやる狂気の叫びを誘発し、告訴人の罪の深さを明らかにすることになりました。

第4に、ピラトは3度目の官邸入りをして、「お前はどこから来たのか」と主への二回目の審問を行ないます。沈黙を守る主に対して、裁きを下す権威が自分にあることを伝えて警告を發します。11節の主の返答は、ピラトの権威より偉大な神の権威を持つ者として、無法な告訴をするユダヤ人の罪深さを示すと共に、彼らに妥協するピラトの罪についても指摘しています。ピラトは主の言葉に心を動かされ、三度目の釈放を試みましたが、「この男を釈放するなら、あなたは皇帝の友ではない」との恫喝に屈して裁判の座に着き、主イエスを有罪と結審し、「十字架につける」ために身柄を告訴人たちに渡しました。

こうして主の受難は頂点である十字架の苦難へと向かいます。罪なき神の子に罪の責任を負わせ、それによって、罪人を救おうとする神のご計画が現実のものとなります。主ご自身は不当な裁判に象徴される苦難が、贖いの代価であることを自覚し、黙して耐え、喜んで苦難を負い、世の罪を取り除く神の小羊としての務めを果されました。

(杉山 明)

テキスト ヨハネによる福音書18章38節～19章16節

(単元のねらい)

受難物語に沿って、ユダヤ人と総督ピラトの裁判で裁かれる主イエスの歩みを辿り、その姿を内に、人間の罪と神の裁きを見つめ、そこに現される神の驚くべき救いの御業を仰ぎたい。

「イエスの死刑の判決」

今日から、受難節の礼拝をささげます。イエス様の十字架に向かう歩みを見つめながら、そして、十字架の向こうにある復活の光を見つめながら、礼拝をささげていきましょう。

イエス様は今、ローマの総督ピラトのところで、裁判を受けておられます。裁判と言っても、みなさんは、あまりピンとこないかもしれませんね。たとえば、誰かが悪いことをして罪を犯すとします。当然、警察に捕まってしまう。それから、どうなるかと言えば、裁判所で裁判を受けることになるのです。裁判所では、その人が本当に罪を犯したのか、犯したとすれば、どういう罪を犯したかを調べます。その罪が確かであれば、最後に裁判官が判決を下すことになります。「あなたには、こういう罪がある。その罪に対して、こういう刑罰を下すことにする」。イエス様は、そういう裁判を、裁判官のピラトから受けているのです。

でも、イエス様は、なぜ裁判を受けているのでしょうか。裁判官のピラトの前に、イエス様を訴えていたのはイエス様と同じユダヤ人たちでした。しかも、彼らは、イエス様に刑罰の中でも一番重い死刑を求めていました。なぜなら、イエス様が、自分を神の子と呼んで、神を汚す死に値する罪を犯していると思い込んでいたからです。けれども、彼らは、自分たちの手で、人を死刑にすることはできませんでした。ですから、死刑にする権限をもっていたローマの総督ピラトのもとに連れてきて、イエス様に死刑にしようと求めていたのです。

ピラトは、イエス様を裁くにあたって、まず取り調べをします。けれども、イエス様は、「ユダヤ人の王」と呼ばれているだけで、死刑に値するような罪をひとつも見出すことができません。そこで、ピラトはユダヤ人たちの前に出て、こう言うのです。「わたしにはあのイエスという男に何の罪も見出せない。ちょうど今、過越しの祭りの時期だ。この時期には、犯罪人のうちだれか一人を釈放することになっている。あのユダヤ人の王を釈放してほしいか」。すると、ユダヤ人たちは、言い返すのです。「その男ではなく、あの強盗のバラバの方を釈放しろ」。

ピラトは困ってしまいます。そこで、イエス様を捕らえ、鞭打たせます。兵士たちは、イエス様に茨の冠を頭に載せ、紫の服をまとわせ、「ユダヤ人の王、万歳」と嘲って、平手打ちを食わせます。なんとこの嘲りの的となった惨めな王の姿でしょう。

そこで、ピラトは、もう一度ユダヤ人たちの前に、このイエス様を連れ出して、言います。「この人を見よ」。しかし、ユダヤの祭司長たちは、イエス様を見ると、こう叫ぶのです。「十字架につける。十字架につける。神の律法によれば、自分を神の子と呼んだ者は、神を汚す者だ。そういう男は、死の罪に値するのだ」。

この言葉を聞いて、ピラトはますます怖くなります。なぜなら、イエス様には十字架につけられるような何の罪も見つからないからです。ですから、何とかイエス様を釈放しようと努めます。けれども、ユダヤ人たちは、さらにピラトに追い討ちをかけて叫ぶのです。「もし、この男を釈放す

るなら、あなたはローマ皇帝の忠実な役人でなくなるぞ。イエスがユダヤの王ならば、それはローマ皇帝に背く反逆者だ。社会の平和を乱す者だ。そういう反逆者は処刑されなければなるまい。それが、あなたの務めだ」。

この脅しの言葉を聞いたピラトは、イエスばかりではなく、今度は自分の命が危なくなることを感じます。自分の命を守るためにも、イエスに判決を下す決心をするのです。ピラトは、イエス様を外に連れ出し、「敷石」という場所で、裁判の席に着かせます。そして、「見よ、あなたたちの王だ」と言うと、ユダヤ人たちは「殺せ。殺せ。十字架につけろ」と叫びます。そして、ピラトは、イエス様に「ユダヤ人の王」という罪状を下して、十字架の死刑の判決を下すことになります。

なんとひどい、なんと間違った裁判ではないでしょうか。何の罪もない方が、十字架というもっとも重い死刑の判決を受けたのです。ユダヤ人は、本当の神様の御子であるイエス様を、神様を汚す者として、十字架の死刑の判決を下しました。ピラトは、まことの平和の王であるイエス様を、平

和を乱す者として、十字架の死刑の判決を下しました。しかも、ピラトは、イエス様に罪がないことを知っていました。それにもかかわらず、自分の命を守るために、正しいことを曲げて判決を下しました。

でも、さらに不思議なのは、イエス様が、御自分の十字架の死刑の判決を、黙って、そして進んで受け入れておられることです。どうしてなのでしょう。

それは、罪のないイエス様に担われた罪が、実はユダヤ人の、ローマの総督ピラトの、そして私たちの罪であることが明らかにされるためでした。本当の神様の御子を受け入れようとしない私たちの罪、正しいことを曲げて平和を乱してしまう私たちの罪。その私たちの罪が、罪のないイエス様に代わりに担われて、実は神様に裁かれているのです。ここに起きているのは、神様の裁判の前に、神様に反抗し平和を乱す私たちの身代わりとして、代表としてイエス様が立ってくださっている、という驚くべき恵みです。

この驚くべき恵みを、しっかりと受け止めて、イエス様の十字架を仰ぎましょう。(西 牧夫)

[今日の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙二 5章21節前半

罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。

〈ねらい〉

イエスさまの十字架を見上げ、感謝します。

〈今日のお話〉

教会の屋根には、何がついていますか？ 十字架ですね。それは、私たちにとって、とても大切なものだからです。神さまを信じる私たちだけではなく、世界中の人にとって大切なものです。

私たちのいじわるな心、うそをついてしまう心、その他、神さまを悲しませるような心をゆるしてくださいるために、イエスさまは十字架におかかりくださいました。ですから、私たちは十字架を見上げるたびに「イエスさま、ごめんなさい」「イエスさま、ありがとうございます」と心から、思います。まだ、神さまの愛を知らないで、イエスさまがゆるしてくださいる恵みを知らないお友だちも、十字架を見て、神さまの愛に気がついて教会

に来てくれたらいいですね。

〈暗唱聖句〉 ペトロー 2 : 24

「わたしたちの罪をになってくださいました」

〈賛美〉

「わたしたちのつみのため」 38番

日本基督教団出版局『子どもさんびか』より

〈子どもカテキズム〉 問24

私たち罪人の身代わりとして十字架に死に……
私たちは、罪ゆるされて……

〈お祈り〉

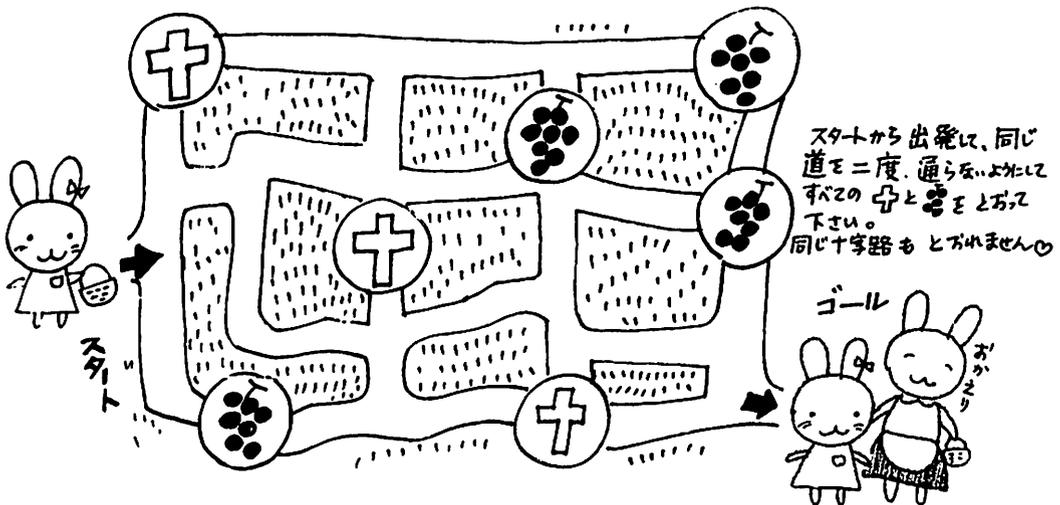
愛なるイエスさま、私の罪をゆるすため十字架のお苦しみをお受けくださったことを信じます。
アーメン。

〈分級の流れ〉

①受難節に入ります。幼くても、自分の罪は自覚できます。教師は祈って備えましょう。

「今日のお話」をした後、みんなで、あるいは、個別にお祈りしましょう。

②ウサコちゃん、ひとりでいけるかな？



〈分級教師へのワンポイント・アドバイス〉

私どもは子どもをどのように見ているでしょうか。第一には、生徒としてです。日曜学校に通ってくる子、子ども礼拝式に通ってくる子らは皆、私どもの生徒です。これは、至極当然の理解であると思います。しかしただ生徒として見るだけで良いのでしょうか。主イエスは、弟子たちのことを「もはやあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ」とおっしゃいました(ヨハネによる福音書15章15節)。もちろん、幼稚科や小学生1～2年生位であれば、霊的には、ただ受ける側だけという理解も成り立つでしょう。けれども、小学3年生位になれば、子どもによっては、明確な主イエスへの信仰(贖罪、赦罪の信仰)を与えられたり、少なくとも神や主イエス、日曜学校への好感を持つことができます。あなたは、子どもたちも主イエスの友となりうると信じておられますか。それなら、子らも私どもの友、同志になれるはずです。

〈ねらい〉

受難週は子どもたちと一対一で向き合う絶好の機会です。生徒の数によっては、数週間に分けてしか行えませんが、今日こそ、救いの信仰、十字架の信仰、罪の赦しを「個別に」語ってあげましょう。教師には、特別の祈りと備えが求められます。

〈子どもと向き合うために一質問〉

- ①教会は楽しいかな？
- ②イエスさまのこと好き？ 信じている？ ⇒

好きって言った子どもには、心から喜んであげましょう。「イエスさまは〇〇ちゃんが大好きだからね。それは、信じているって言うことだよ。」

③お家でお祈りしている？ ⇒祈ったことのないお友だちには、「天のお父さま～イエスさまのお名前によって、アーメン」と唱える(お呼びする)だけで良いと励ます。

④どんなお祈りが教えてくれる？ ⇒霊的狀態・成長が分かります。その子の状態次第では、十字架の意味が分かる？と福音の中核を問います。まさに霊的な会話、やりとりです。

⑤先生にお祈りしてもらいたいことはある？ 学校は楽しい？ お父さんお母さんは、日曜学校に来ることをどんな風に思ってるの？ ⇒子どもの生活、悩み、心に触れる質問をします。もし、ここで悩みをはっきり告げる子がいれば、必ず最後まで聞き取ってあげてください。時間がなくなれば後日続きを約束して列れます。必要であれば、牧師、校長に報告してください。

⑥祝福の言葉を告げる。

「〇〇ちゃんが教会に来てくれると先生はとっても嬉しいんだよ！ イエスさまは、もっともって喜んでおられるよ。神さまは〇〇ちゃんを、愛していつも見守っていてくださるよ。天のお父さまと呼ぶと神さまがいつも一緒にいてくださることが分かるから、お祈りしようね。」

〈お祈り〉

ひとりひとりと祈る。祝福を祈る。

〈ねらい〉

なぜ罪の無い神の子であるイエス様が、十字架刑によって殺されなければならなかったのか。神の子を殺そうとするユダヤ人と、イエス様が無実であるということを知っているが十字架刑を言い渡すピラト。そこにある人間の罪の大きさと深さを考えたい。

また、そのような罪にもかかわらず、イエス様はわたしたち人間のために十字架の死を自ら受けてくださいました。そこにおいて示されたイエス様の愛の大きさと深さをも考えたい。

〈質問例〉

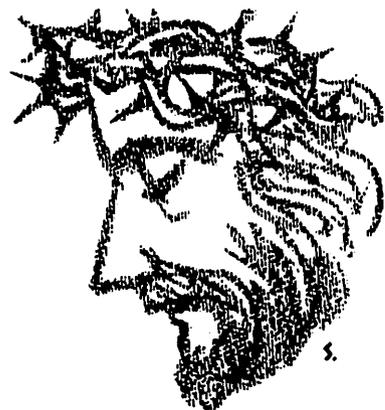
1. ユダヤ人たちはイエス様を総督ピラトの所に連れて行きましたが、彼等は何のためにイエス様を連れて行ったのでしょうか。
2. イエス様は裁判にかけられて、刑罰を受けなければならないような罪を犯したのでしょうか。
3. イエスが罪を犯していないということを知っ

ていたピラトは、イエス様に無罪を言い渡しましたか。

4. ピラトは最初、イエス様をどのように扱おうとしましたか。
5. ピラトの提案を受けたユダヤ人たちはどのように答えましたか。
6. ピラトは最終的に罪の無いイエス様をどのように扱いましたか。

〈一緒に考えよう〉

1. どうしてユダヤ人たちはイエス様を殺そうと考えたのでしょうか。
2. イエス様が無罪であると知っていたにもかかわらず、ピラトはどうしてイエス様に十字架刑を言い渡してしまったのでしょうか。
3. わたしたちはイエス様を十字架で殺したユダヤ人やピラトたちの罪と無関係でしょうか。
4. イエス様はどうして黙って十字架刑をお受けになったのでしょうか。



ねらい

○罪のない人間の不当な苦しみは、何のためだったのかを考える。

展開例

○イエスはポンテオ・ピラトの下に苦しみを受けましたが、罪を見出せない不当な裁判であったことが明らかにされています。「十字架につけよ」という民衆の声に負けてピラトは死刑の判決を出しているので、イエスの死は民衆（私たち）の罪と関わっており、民衆がイエスを殺し

たこととなります。ここに私たちの悔い改めるべき根拠があります。私の責任でイエスは受難したといえるのです。

話し合ってみよう！

○「彼が担ったのはわたしたちの病」というイザヤ53：4の意味について、話し合ってみよう。

祈り

イエスの受難は神が私を愛しているからであったと理解させてください。

○暗唱聖句○

コリントニ5：21

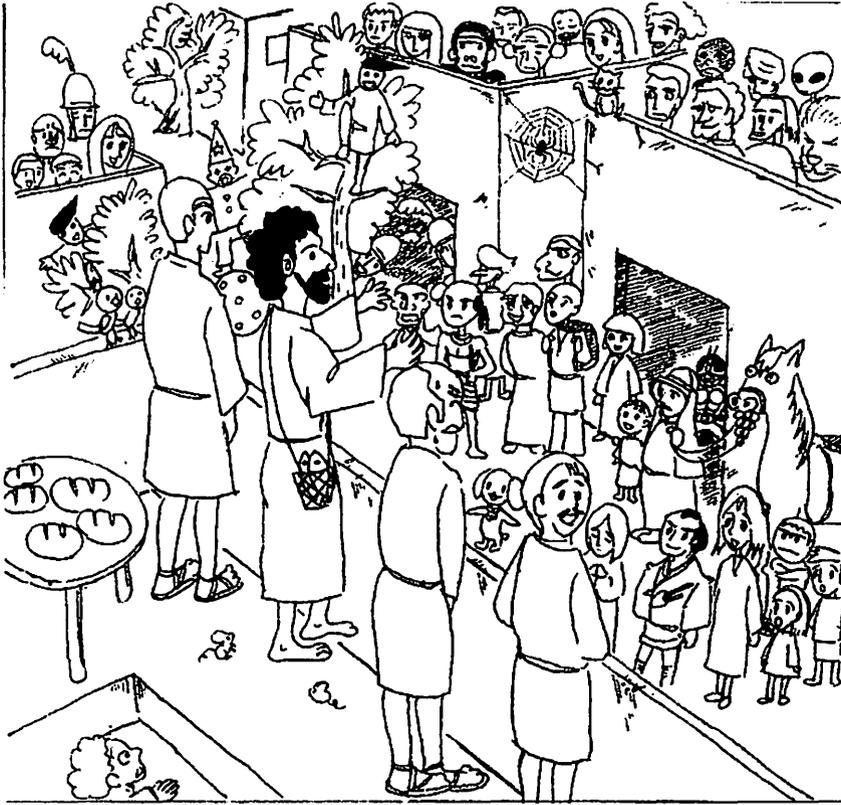
○祈りの課題○

聖書日課

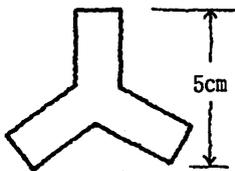
月	イザヤ53章	1～2節
火	イザヤ53章	3～4節
水	イザヤ53章	5～6節
木	イザヤ53章	7～8節
金	イザヤ53章	9～10節
土	イザヤ53章	11～12節

☆ニ日記☆

《1月11日分 小学科下級教材》



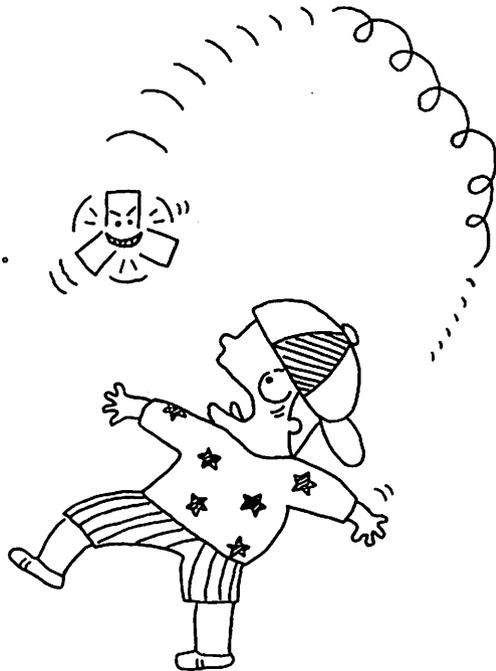
《2月1日分 小学科下級教材》



画用紙をY字形に切ります。



手の平の端にのせて、指先ではじき飛ばします。



日曜学校 2004年度カリキュラム (2004年4～6月分)

—「子どもカテキズム」に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
4月4日 受難週・進級	十字架のキリスト	—	子24
		ヨハネ19：17-30	ペトロ一2：24
十字架につけられたキリストを指し示し、十字架のキリストを仰ごう。			
11日 復活祭	復活のキリスト	—	子24
		ヨハネ20：1-10	ヨハネ11：25
復活し、罪に勝利された主イエスを指し示し、生ける勝利のキリストを仰ごう。			
18日	人生の目的……礼拝	問1	ウ小1
		ヨハネ4：1-26	ヨハネ4：14
人生に目的・目標があることを知ってもらう。神を知り、神を喜び生きること。			
25日	神の栄光をあらわす	問1	ウ小1
		ヨハネ4：27-42	コリント一10：31
神と世界を喜び、世にあって神の栄光をあらわす生き方へと招く。			
5月2日	救いの喜び	問2	ハイデルベルク1
		ルカ19：1-10	ルカ19：10
主が私たちを捜し求めてくださる。主イエス・キリストと出会う喜びへと招く。			
9日	神の子の喜び	問2	ハイデルベルク1
		ルカ15：11-24	ヨハネ1：12
親と子としての神との関係。神は待っておられる。神の子とされる喜びへと招く。			
16日 母の日	御言葉の礼拝	問3	ウ大教理62-65
		ルカ10：38-42	イザヤ55：3
主イエス・キリストの御前にひれ伏し、御言葉に聞き入る姿勢を学ぼう。			
23日	キリストの体なる教会	問3	ウ告白25章、ウ大教理62-65
		コリント一12：12-31	コリント一12：26
神の民である教会に召し集められていることの大切さと恵みを学ぼう。			
30日 聖霊降臨祭	聖霊降臨・教会の誕生	—	子30
		使徒言行録2：1-13	使徒言行録1：8
聖霊が注がれて神と教会に仕える者とされている喜びを分かち合おう。			
6月6日	神と人を愛する	問4	ハイデルベルク4, 64, 86
		ルカ10：25-37	ルカ10：27
神を知る喜びは、神と人を愛する喜びである。神と人を愛する愛へと招く。			
13日 花の日	神の御言葉	問5	ウ告白1章、ウ小2、ウ大3
		ペトロ二1：16-21	ペトロ二1：21
聖書を通して神を知る。その権威と恵み。聖書を通して神は今も語っておられる。			
20日 父の日	愛の手紙	問6	ウ告白1章、ウ小3、ウ大4-5
		ルカ24：13-35	ルカ24：23
聖書は神の壮大な物語を告げ知らせている。神の愛と福音を聞き取る。			
27日	霊なる神	問7	ウ小教理4、ウ大教理8
		ヨハネ4：1-42	ヨハネ4：24
神は霊であり、人格的な神であられる。目には見えない生けるまことの神を仰ぐ。			

日曜学校 2004年度カリキュラム 年間計画

2年サイクル第1年 (子どもカテキズム問1～33)

月 日	教会暦・行事	主 題 (仮 題)	子どもカテキズム
2004年			
4月4日	受難週主日 進級式	十字架のキリスト	
11日	復活祭	復活のキリスト	
18日		第一部 人生の目的 一、人生の目的 人生の目的……礼拝	問1
25日		神の栄光をあらわす	問1
5月2日		救いの恵み	問2
9日		神の子ども	問2
16日	母の日	御言葉の礼拝	問3
23日		キリストの体なる教会	問3
30日	聖霊降臨祭	聖霊降臨・教会の誕生	
6月6日		神と人を愛する	問4
13日	花の日	第一部 人生の目的 二、聖書、神の御言葉 神の御言葉	問5
20日	父の日	愛の手紙	問6
27日		第二部 信仰の道 一、三位一体の神さま 霊なる神	問7
7月4日		唯一の神	問8
11日		生ける神	問9
18日		三位一体の神 (一)	問10
25日		三位一体の神 (二)	問10
8月1日		第二部 信仰の道 二、父なる神さま 主権者なる神	問11
8日		天地創造	問12
15日	(平和)	平和について	
22日		摂理の神 (一)	問13
29日		摂理の神 (二)	問14
9月5日		第二部 信仰の道 三、人間 人間の創造	問15
12日		罪と墮落	問16, 17
19日	(敬老の日)	罪の悲惨	問18
26日		わたしも罪人	問19

月 日	教会暦・行事	主 題 (仮 題)	子どもカテキズム
2004年			
10月3日		神の怒り	問20
10日		あがない主の必要性	問21
		第二部 信仰の道 四、御子なる神さま	
17日		二性一人格 (一)	問22
24日		二性一人格 (二)	問22
31日	宗教改革記念	主は救い、イエス	問23
11月7日		神の御子、キリスト	問23
14日		謙卑のキリスト	問24
21日		高学のキリスト	問24
28日	アドベント	待降節	
12月5日	アドベント	待降節	—
12日	アドベント	待降節	—
19日	クリスマス	降誕祭	—
26日	年末	一年の感謝	—
2005年			
1月2日	新年	預言者イエス	問25
9日		大祭司イエス	問26
16日		真の王イエス	問27
		第二部 信仰の道 五、聖霊なる神さま	
23日		恵みのみ	問28
30日		選びと有効召命	問29
2月6日	(信教の自由)	キリストとの結合	問30
13日	レント	罪の赦しと義認	問31
20日	レント	神の子とされる	問31
27日	レント	聖化の恵み	問32, 33
3月6日	レント	愛の歩み	問32, 33
13日	レント	キリストの苦難	
20日	受難週主日	十字架のキリスト	
27日	復活祭	復活のキリスト	

あ と が き

中部中会教育委員会日曜学校教案誌編集部

主の御名をほめたたえます。

聖書物語を中心にしてカリキュラムを編んで参りました2003年度の歩みも、この第12号で締めくくりを迎えることができました。年度前半は旧約聖書の物語を、年度の後半はヨハネ福音書から主イエスの物語を、さらには使徒言行録から使徒たちの働きをと、学びを重ねて参りました。この教案誌が用いられて、聖書の物語に親しみ、主イエス・キリストとの交わりにあずかっていただく助けとなったならば、大きな喜びであり感謝です。

来年度(2004年度)は、再び『子どもカテキズム』を中心としたカリキュラム編成に戻ります。2004年度から2005年度の二年間のカリキュラムで、キリスト教教理の学びを中心に据えた礼拝となります。以前取り扱った折りには、皆様から多くのご意見とご指摘をいただきました。それを少しでも生かしたかたちで、また新たな気持ちで学ぶことができれば、と願っています。また、教案誌の名称を『教会学校教案誌』に変更する予定です。日曜学校の営みばかりでなく、教会教育のさらに多くの場面で用いていただくことを願って、名称を変更いたします。また、それにふさわしく、誌面を拡充できるよう、準備を進めています。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

2003年度の歩みも締めくくりに入ります。良き日曜学校の営み、とりわけ、子どもとの対話が行われるよう、願っています。子どもたちにも、魂の配慮が必要とされています。日曜学校教師一人一人が、魂の配慮の担い手となれるよう、祈り備えて参りましょう。

なお、印刷・製本には慎重を期しておりますが、乱丁・落丁の場合は、お取り替えいたしますので、ご連絡ください。

Soli Deo Glorial

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

聖書研究		分級展開例	
三川栄二	稲毛海岸教会牧師	幼稚科	名古屋岩の上伝道所日曜学校
春名義行	津島伝道所宣教教師	小学科下級	
杉山明	瑞浪伝道所宣教教師	1月分	豊明教会日曜学校
説教展開例		2・3月分	名古屋岩の上伝道所日曜学校
小野田雄二	上野緑ヶ丘教会牧師	小学科上級	新座志木教会教会学校
相馬伸郎	名古屋岩の上伝道所宣教教師	中学科	吉岡良昌(東部中会)
西牧夫	大屋伝道所宣教教師	表紙イラスト……	弓矢容子

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎(長)	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	豊明教会牧師
春名義行	津島伝道所宣教教師
望月信	高蔵寺教会牧師

教案誌のお申し込みは、津島伝道所・春名義行までご連絡ください。

バックナンバーもあります。

春名義行 〒496-0038 愛知県津島市橋町2-30 津島伝道所

Tel/Fax. 0567-26-4221

日本キリスト改革派教会 中部中会 『日曜学校教案誌』
2004年1・2・3月号(季刊)
第12号
2003年12月7日発行

発行 日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
発行所 日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校教案誌編集部
名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701
編集・印刷 株式会社あるむ
〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F
頒価 700円(本体価格)
